

62
406

京都府立大学
文学部
日本文学史
下

310580-000-0

62-406

日本文学史
下

武島 又次郎 述

文學士 武島又次郎述

日本文學史

下

早稻田大學出版部藏版

日本文學史 目次

第五期 室町時代

- 第一章 總說……………一
- 第二章 當時の散文……………五
- 第三章 當時の和歌……………一四
- 第四章 連歌……………二〇
- 第五章 謠曲と狂言……………二六

第六期 江戸時代

- 第一章 總說……………三五
- 第一期 元祿以前の時代
- 第二章 當時の一般……………四一
- 第三章 和歌……………四六
- 第四章 古風の俳諧……………五四

第五章 狂歌……………六一

第六章 檀林の俳諧……………六六

第七章 歌舞伎と淨瑠璃……………七一

第八章 小説……………七八

第一期 元祿時代

第九章 當時の一般……………八五

第十章 國學復興……………八九

第十一章 正風の俳諧……………九九

第十二章 鯛屋貞柳と正親町公通……………一一二

第十三章 浮世草子……………一一六

第十四章 近松門左衛門と元祿の淨瑠璃……………一二二

第十五章 當時の散文……………一三一

第二期 天明時代

第十六章 當時の一般……………一三五

第十七章 當時の和歌……………一四〇

第十八章 俳諧の中興……………一四九

第十九章 狂歌の復興……………一五四

第二十章 川柳の勃興……………一五八

第二十一章 當時の小説……………一六二

第二十二章 淨瑠璃と歌舞伎……………一七四

第二十三章 當時の散文……………一八三

第四期 天明以後の時代

第二十四章 當時の一般……………一八八

第二十五章 和歌壇の鼎立……………一九一

第二十六章 香川景樹と其門流……………一九七

第二十七章 俳諧の衰頹……………二一二

第二十八章 當時の狂歌……………二一六

第二十九章 小説……………二二三

第三十章 鶴屋南北……………二三〇

日本文學史 目次終

日本文學史

文學士 武島 又次郎述

第五期 室町時代

第一章 總論

一當時の一般。後醍醐天皇の中興の偉業有終の美を保つこと能はず、第二の北條高時は今や續々として武士の間におこるに至れり。新田、楠、兒島氏の忠勤もその効なく、南風次第にきそはずして、天下は遂に室町將軍の左右するところとなりぬ。しかれども室町の諸將軍いづれも、これ胸に經綸の大略ををさめし偉人にあらず、拱手たゞ職にそなはるのみにして、遊宴にふけり歌舞におぼれ、酒色に沈湎したりしかば、兵馬の實權はふたゝびその手中を離れて、中原の鹿、天下諸強の争ふところとなりぬ。歴史上の戰國時代則これ也。この間にありて武田上杉が鵜蛤の争に乗じ、獨り漁夫の利を得たるものを織田信長となす。織田氏を滅して明智光秀あり。明智光秀を撃ちて豊臣秀吉あり。豊臣秀吉に代りて徳川家康あり。家康英武雄略専心意を天

下の治平に注ぐ。こゝにいたりて形勢次第に定り、徳川氏の基礎やうく固し。徳化文壇に及びて冬がれたりし言の葉の花もこゝに再び桃紅李白の美觀を呈せんとせり。建武の中興におこりてこの時代にいたるまで約三百年間を稱して吾人はかりに室町時代と呼ぶ。けだし日本文学史における最も暗黒なる時代なりき。

平安朝時代縉紳の手にありにし文學の權力が江戸時代にいたり全く布衣の掌中に歸するにいたりし過渡として、鎌倉時代においては半ば、僧侶の手にうつり半ば、武人の有に歸し、半ば、なほ残りて貴族に止れり。さるをこの時代にいたりて、戰塵ひまなく世に立籠め、武士は日夜干戈を事とし、縉紳は諸國に漂浪して文筆にたづさはるの暇あらず。いはんや諸家の記録歴代の典籍は兵火のためにおほむね灰燼に歸し、文教はほとんど地を掃ふにいたれり。文學がかゝる時代に暗黒の觀を呈せし、事まことに理の當に然らざるべからざることにあらずや。たゞ將に絶えなんとせしこの文學の命脈をわづかに繋ぎとめしものを僧侶となす。彼等は戰國の時代に生れあひたるも、争亂の渦中に陥らざりき。世のなかの殺伐これ風としたりし中にしづかに卷を繕きて研學に餘念なかりき。世間は彼等を目するにものづから學者を以てせざるを得ず。つゆにても文字の教を乞はむとするもの、進みて僧侶の寺

院に來りて物學びをせざるべからず。いはゆる寺子屋の稱號の當時よりしておこりしは故なきにあらざる也。無論武士にして、さるべき歌人なかりきといふにはあらず、北條氏康の如き、太田道灌の如き、大内義隆の如きあるは、金澤文庫の設立者、あるは足利學校の再興者の如き皆深く文學に心を傾けたりといひつべし。しかもなほこまかに考ふれば同じく武士といへども、箴に梅花をかざし、いづれもろきと争ひしはこれ鎌倉時代の武人なりき。馬上に敵と相まみえ咄嗟の間にもなほ衣のたては、ほろこびにけりなど連歌したるはこれた鎌倉時代の武人なりき。室町時代にいたりてかゝる韻事を解するものは甚だ乏しくなれり。堂々學者を以て任ずるものにてだになほ満足に四書を講説するものなかりしを見ても、當時の學問の衰弊その極に達したりしを察すべし。

二當時の文學の特質。天下の趨勢は實に以上の如し。この趨勢の中にうまれたりし文學はそもく、いかなる特質を具へたるか。あゝ公衆の多數は眼中一丁字なきものおびたゞしう多うなれり。彼等は文字の力なし。こゝにおいてか讀みて文學を味ふの力甚だ乏しくなれり。彼等公衆を相手とせし文學は他の方法に依りて彼等に近づくべき手段を作らざるべからず。何ぞや、讀みて味はずといふとを離れ

て目に見せ耳に聞かせてたのしますといふ道によりたる事也。則たゞに文學を文章として世に出すにあらずしてあるは之を音楽にかけて歌ひあるはこれを動作にあらずして演ずといふと起るにいたりぬ。無學なるものも文盲なる者もこれによりて始めて感興を惹起し文學を味ふことを得たりし也。見よ室町時代において平家を曲譜にあはせて語ることをますく盛になれり。これ文學を音楽に合せたるものにあらずや。又この時代において能狂言は儼興するにいたり。これ文學を科介にあはしたるものにあらずや。文學がかく次第に音楽と調和し演劇と接近し、以て次の江戸時代の浮瑠璃と芝居との基礎をかたちづくられたる、これ實に室町時代文學の特點としてまことに觀過するあたはざるどころ也。

第二章 當時の散文

一、歴史的文學。戰亂の時代より生れたる文學はまたおのづから時亂時代の風豊を具へざるべからず。戦争を對象とせる歴史的文學則軍記物語が多くこの時代にあらはれけるものまことにこの故となす。さてこれらの軍記物語はその有名なる者のみを數ふるも十指を伏すべしといへども、更にその中に就きて傑出したるもの之を撰みて三あり。一にいはいはく増鏡、二にいはいはく太平記、三にいはいはく神皇正統記これ也。

増鏡は後鳥羽天皇より筆をおこして後醍醐天皇にいたりて筆をとどむ。大鏡と水鏡とこれとを合せて世に三鏡と稱せらる。作者を一條冬良とするこれ在來の説也。文章雅俗を折衷し言語も和漢を融和し流暢典雅讀みておのづから卷の終るを覺へざらしむる者あり。水鏡の最質朴にして文飾の見るべきものなきはそのうつせる時代の上古にして花やかなる事實に乏しかればなるべし。大鏡は清雅のうち勁健のふしを具へ老熟の筆致容易に企及すべからざるものあり。増鏡は質實にあいては大鏡に一籌を輸せりといへども華麗なるふしは遙にその上にあり。方丈記

の俊爽なく平家語の幽婉に敵せずといへども和雅にして清楚なるはたしかにその壇場なるべきか。

太平記は花園院の御代より始めて後光嚴院の御頃までほゞ五十年間の事を叙述せり。作者は小島法師なりといふ。和漢の辭句文脈を縦横に使用して自在にしてたへなること大匠の斤を運らすが如し。雄壯なるところあり。瑰麗なるところあり。盤上玉を走らする流暢に加へて崑崙の山歩々に横たはれる金玉の佳句あり。吾人は平家物語とならべてわが國戰記文の雙璧といふに躊躇せず。この作ありて室町時代の文學は始めて他の時代の文學とその力を角するに足るべき也。

神皇正統記は准后北畠親房卿の作也。上は神武天皇にちり下は後村上天皇芳野にて御受禪なされけるに終る。この作の精神はその題名にても知らるゝ如く南北朝の御争をもどかしがりてその正統のあるところを明にしたるにあり。議論主にして敘事客也。敘事のための敘事あらずして議論の徑路を明にせむための敘事也。無用の飾修をはぶき華美なる思想を避けひたすら正理のあるところを發揮せむとしたるを以ておのづから氣魄あり光燄あり簡朴にして端麗に森嚴にして犯すべからざるの氣あり。いはゆる氣を以て主となせるの文也。

これら三者を別にして當時の歴史的文學に吉野拾遺あり。櫻雲記などありといへども以上に比べてはるかに數等の下にあるを以てこゝに略せり。

二つれ。草。つれ。草は人の知る如く兼好法師の作也。兼好俗名を卜部兼好といふ。弘安六年(紀元千九百四十三年)を以て生れぬ。はじめ後宇多天皇に仕へ奉りたるも帝かくれまじければ慟哭してやがて剃髮し俗名をさながら法名にかへて兼好法師とよべり。卜部氏なれば家のわざを傳へて神道を明めたりしは勿論佛に入りて佛典を研究しかたはら儒を好みて漢學のいたりふかし。草庵を諸國にうつすこと數次觀應元年(紀元二千〇十年)遂に年六十八歳をもて身まかりぬ。

兼好の人物につきては光來諸説まち／＼にして歸するところなし。鹽谷判官の妻への艶書をしるせりといふとなどあまねく世に傳へられて林羅山も信に一世の過錯也などしるせり。今日にあたりてはその確否をたしかむること容易のわざにあらずといへども彼が色このまざらむ男は玉の杯底なき如しなど論じけるより考ふれば兼好が思想は全く世の中に跡たえて枯木冷灰の如きにあらざるを知るべく従ひて艶書のとほよし實際の事にはあらずとするもよく兼好が心を想像し得たる捏造説なるべしと思ふ。

さばれ吾人は傳記と作品とを混同するものにあらず。兼好が性行はよし細衣の徒にふさはしからずとするもその作品の上には何等のわざはひをも及ぼさざるなり。いてや吾人をして進みてその作品たるつれづれ草の文學としていかなる價值あるかにつきて一言せしめよ。

つれづれ草は確に枕草子より化出したるもの也。しかれども文體にいたりては巧に彼我の言語を運用し、自他の文脈を融合してあるは流麗にあるは雄健にあるは洒脱に、まことに國文の一境界を開闢して長く後世の模範となすに足れり。兼好つれづれ草のうちにしるしていはく

ひとり燈火のもとに文をひろげで見ぬ世の人を友とすることそよなうなくさむわざなれ。文は文選のあはれなる卷々、白氏文集、老子のことば、南華の篇。この國の博士どもの書ける物も古のはあはれなる事多かり。

干戈旁午、人々しづ心もあらざる時にだに、なほ青燈のもとあるは老莊の道をきはめ、あるは台家の教をまなび、あるは文集の妙所を味ふ。その學にあつかりしこと以て知るべからずや。

この蘊蓄を以て人生を觀じ、風光をあはれむ。こゝにおいて片言もむなしきはなく、隻句も味長からざるはあらず。そもわが國の文學は容積において乏しきにあらずといへども、敘述の範圍多くは月雪花ほとぎすに限られて、人生人間の諸問題につきて解説を試みたるものなどに至りては極めて僅少なりといはざるを得ず。奈良平安の時代を通じて源氏枕草子などを除くのは、かば吾人が人生觀自然觀などを抽象し得べき文學果して幾何あるか。このつれづれ草や風雲を説かざるにあらず、月露をいはざるにあらず。しかもいたづらに風雲月露のみを描くにあらずして常に人生人間と接觸せしめつゝ、敘述せり。則神儒佛三道の見地よりして羅山のいはゆる「世俗をいきどほり、生死無常を觀じ、時序を感じ、風景をうつし、男女の情をいひて以て兼好一家の世間と人間とに關せる觀念を吐露したり。わが國文學のおほくは浮華にあらざれば無味、單調にあらざれば板俗にして玩味に堪へ咀嚼を値するもの甚だ少きがなかにありて、この草子の言とほく意長く、しばしば人生の至理を闡明し得たるはまことに國文學中に一異彩を放てりといふべし、うべなるかな、室町時代の末葉より江戸時代にかゝりて、大に人々にもてあそばれ、おしなべて國文學としいへば捨て、願みざる漢學者にまで日本の論語としてたゞへられ従ひて註釋書の多き源氏物語につきて他にその比を見るあたはざることや。林羅山が和語の文章にお

いてことに勝れたるものなり」と評したるを見て漢學者がこの書に對する評價の一斑を知るに足るべし。

兼好と長明つれづれ草と方丈記まことに近古の文學における好箇の對照なり。俊爽にして逸氣あるこれ方丈記の特色にしてつれづれ草はこれに比べて確に一步を譲るべし。しかも警拔に多趣なる點にいたりては方丈記は遂につれづれ草の下流に立たざるを得ず。和漢の言語文脈を融合し流麗渾厚のちもむきあるは兩者ともに然りまた佛道の立場より見てこの世をはかなく定めなしと見たるもかはるところなし。しかれども長明はひたすらに佛敎也。厭世の主義也。兼好にいたりては佛敎に加味するに無我無爲の説を以てし、厭世かと思ればなほ世の中に執をととむるところあり。世を厭はざるかと思ればまた世を避くるの念ところづにあらはれたり。長明はひたすらに高潔なれど兼好はやゝ俗氣を帯びたり。されど溷濁を辭せざる大海が清冽なる溪泉よりも大なるが如くにこれあるひは兼好の長明よりも一層大なる人間なるの證なるかもはかりがたし。長明は無邪氣也。兼好は權謀あり。吾人は方丈記において潔士の文學を見つれづれ草において才人の文學を見る。

三〇 伽草子。伽草子とはその名のあらはすが如くつれづれなる夜半ものうき時伽の料にせむための草子也。すてに伽を以て目的。とす勢ひ話柄を最わかりやすき興味あるものに探らざるべからず。あるは小野小町あるは御曹子島渡りあるは一寸法師あるは浦島太郎あるは河頓童子あるは物ぐさ太郎など最人口に膾炙せるまた好奇心を動かすべき和漢の事實をしくみたる者あるはこの故となす。

伽草子いにしへは數多くありけむを今日につたはれるものはたゞ四十三篇にすぎず。このうち二十三篇は江戸時代の始めに伽草子といふ名目のもとに出板せられ他の二十篇は近き頃萩野由之氏によりて新編伽草子として世に公にせられたり。

伽草子は作者を詳にせず。そのなかには明に慶長の年號の見えたるもあれば一二篇は江戸時代の人の手に出てたること明かなりといへどもその他はことゞく室町時代のものゝ作りけむこと疑ひあらざるが如し。言語の使用法文體の上に多少の異同あるより見れば作者のあまたありけるも知らるべくまた一般に幼稚平板のふし少なからざるより思へば作者が決してすぐれたる文學者にあらざりけるをも察知すべし。

更に趣向の上より考ふればあるはめてなきことを種とせるもあり。かなしき事を材とせるもあり。或は滑稽の物語、あるは因果の物語、決して一を以て律すること能はずといへども、當時無學なりし老幼士女の心をなぐさめんがために簡明に興味ふかく、話説をなせるにいたりては皆一なり。

これらの少年文學は小説としては、いふまでもなく、大なる價值はなし。しかれども謠曲と相ならびて、日本古來の傳説を網羅し、江戸時代において鬱興せし小説戯曲の根本となり基礎を形成せしといふことにおいて、室町時代の文學中決してなほざりに觀過すべからざるもの也。今も伽草子の一例として、のせざる草子の一節をしるしてむ。

さるほどに丹波の國のせの山に年をへし猿あり。名をばましをの權の守と申しける。その子にこけまる殿とて世に超えてちゑさいかく藝能すぐれけるかたあり。此こけまる殿扇あつとり一さしを舞うて入り給ふいかなる者も見ゆるより心そらになしおもしろからずといふ事なし。さる間にこけるまどのやう／＼廿ばか御にならせ給ふ。父母いかなる方よりも嫁ごとと申させ給へども耳にも聞きいれたまはず。われおもふ子細あり。なみ／＼ならむ者をいかてか妻に迎

へむ。いかなや公卿殿上人の娘ならてはひさしからぬうき世に何かせむとおぼしめしける。世の中の人たち身のほど知らぬ望とおもひ給はんやからもあるべし。こともおろかやわれらが祖先猿丸大夫は皆しれる歌人也。

おく山に紅葉ふみわけなく鹿の聲きく時ぞ秋はかなしき。と詠み給ひしは、これを小倉の色紙の和歌に定家もれ入られしなり。その外世々の歌人の説にも、我を稻負鳥ましらの聲などよみおく和歌を人知らずや。恐らくは系圖におきては誰人にか劣るべき。なまじひなるやからに身をその何かせんとおぼしめし常は岩のはさまにて花を見、秋は木々の梢にては月をながめ萬の木の実を愛し、いとやさしきいろこのみておはしける。

第三章 當時の和歌

一歌壇の趨勢 後醍醐天皇の建武の中興より百年後小松天皇の永享十年(紀元二〇九八年)にいたりて新續古今集成りぬ。これ實に勅撰集の殿者にして永く和歌衰頹の紀念となれるものなり。これより以後は全國鼎の湧けるが如く、勅撰の盛事を見ざりしはいふまでもなく公卿漂浪して歌をいふもの日に日にその數を少うせり。かゝる大勢の中にありては和歌はたゞその餘喘をたもつのほか何等の活動をなす能はざりしは論なかりき。たゞ時に風雅集の清新を標榜せしあり。新葉集の准勅撰を以て目せらるゝあり。やゝ世の耳目を動かしてたしかに歌海の一波瀾を起したりしが如し。新葉集は後龜山天皇の弘和元年(紀元二〇四一年)宗良親王が南朝歌人の和歌人の和歌をあつめさせたまへるもの也。廿卷千四百餘首その容積の上よりいふも體裁の上よりいふも優に歴代の勅撰集と肩をならぶるに足る。ことに義を以て泰山より重しとし身を以て鴻毛の輕きに比せし吉野朝廷の人々の作品多ければをしくいさましく悲婉にして慷慨の氣あふるゝもの少からず。吉田令世が

新葉集の歌はその人もみな世の中を引きかへさんとかまへられたる人々にて歌もそのことにあづかりたるが多くいづれもとりにをしくたけくもいさをしくもある歌にて外の集とはことなり。

と評せるもことわりにて當年歌壇の一異彩たりき。
風雅集は花園院の貞和二年(紀元二千〇〇六年)院の御自撰にかゝり、その序にのべたまへる如く、

近き世となりて四方の事わざすたれ、誠少く偽多くなり、にければ、ひとへにかざれる姿巧なる心ばせをむねとして古の風は残らず。或は古き言葉をぬすみ、偽れるさまをつくりひなして更にその本にまどふ。

などありて、その世の浮薄なる風體を排して誠ある古ぶりの風格にかへしたまはむとて撰びたまへるなり。代々勅撰集の命令としいへば必ず古今後撰拾遺に續新等の形容詞を附加し來れるが常なるをこゝにいたりて風雅てふ全然異りたるものを冠せたるを見ても御心のかたはしを察し奉るべし。

しかれどもその實は名にふさはず。その風體は依然として舊套を脱せざりき。たま／＼目にたつものは多くは奇に走り怪に陥り、正宗に合へるものきはめて乏し。

曲れるを矯めんとして直きに過ぎたるもの、以て風雅集一部の歌を評するに足るべし。新葉集の

君がため世のため何かをしからむすて、かひある命なりせば。

また風雅集なる

打しめり薄のたれ葉もりつゝ西吹風になびく村雨。

とあるなどよく兩集の特質を示せりといふべし。

時代の争亂が當時の和歌の活動をさまたげたる極なりしと同時に、いとゞそのはたらきを鈍からしめし枯をいはゆる秘傳口訣となす。二條冷泉毘沙門堂の三家が鼎立して自家の威信をあらそひ、ために定家の遺訓なりなど稱して數多の秘訣を作りたりしは前に述べたり。この風年とともに甚しく東常縁にいたりてはかの後世歌人の虎の巻たる古今傳授をさへ作るにいたりぬ。この傳授を受くるものは凡骨も天才となり受けざるものは俊才も驥足をのばすによしなし。新思想新風體は絶對に壓迫せられ一も古格二も舊風、こまかしき制裁のために歌壇は旱天に曝されたる作物の如く萎靡して振はざるにいたりし也。

物窮すれば變ず。沈滞の絶頂に達したりし當年の和歌は今や一變すべきの時期に達せり。しかれどもその基礎やう／＼牢乎たりし傳授秘訣はたはやすく動すべからず。こゝにおいてか歌壇の氣運は方向を轉じて連歌俳諧の方面に向ひて活動せり。戰國の時代なりしにもかゝはらず、この種の文學が割合に潑刺たる運動をなし、はこの故なり。

二當時の歌人。和歌壇の大勢以上の如しといへども、古川に水たえず、世に名を知られたる歌人全くなしとはあらざりき。まづこの時代の初期においては僧頼阿あり。僧兼好あり。僧淨辨あり。僧慶運あり。これを和歌四天王といふ。中にあきて頼阿尤も名あり。頼阿は俗名を二階堂貞宗といふ。正應二年(千九百四十九年)を以て生れ、文中元年(二千〇三十二年)八十四歳を以て寂したりき。草庵集はその歌集にして井蛙抄、愚問賢註、井蛙眼目はその歌論をあつめたるもの也。頼阿常に歌風の平板に流れ時に珍奇に走るを憂ひ、二條良基と謀りて正風を鼓吹し以て新古今の隆盛にかへさんとせり。かれがその歌集に冠するに盧山夜雨草庵中の意を以てしたるにてもその精神のいづこにありしかを知るに足るべし。頼阿常にいふ新しき心をやすらかにこと／＼しくなく、うつくしくつくづくべしと又いはくこと／＼し

くすねたる歌をば甘心せずと。頼阿の歌はげに措辭奇を衒はず、しかもいひまはしの清新なるをその大なる一の特質とす。而して一見しては何ともなけれど故事など合まりてあつから玩味するに堪へたるをその二の特質とす。

北野にて

松かえの木のままにみゆる神かきや風と月とのあるしなるらむ。

春のきる霞を見ればあしびきの遠山ずりの衣なりけり。

などを見て知るべし。草庵體として江戸時代古學派歌人の勃起するにいたるまで吟壇を風靡したるもことわりならずや。

兼好、頼阿につき、慶運また兼好につぐ。淨辨は最劣りたるが如し。世の人この人々に澤田の頼阿、手枕の兼好、裾野の慶運、蘆の葉の淨辨など異名するは左の聞えたる歌あれば也。

月やどる澤田の面にふす鴨の氷より立つあけがたの空。

頼阿

手枕の野邊の草葉の霜がれに身はならはしの風の寒けさ。

兼好

淺江の氷にたてるあしの葉に夕霜さやき浦風を吹く。

淨辨

庵むすぶ山の裾野の夕ひばりあがるもあつる聲かとぞさく。

慶運

この時代の中期にいたりては西三條實隆あり。家集を雪玉集といふ。後柏原院あり。御集を柏玉集といふ。また冷泉政爲あり。家集を碧玉集といふ。この三者、草庵集とならびて堂上和歌の家の寶典とたゞへらる。いはゆる三玉集也。しかれどもあほむね陳言常語、構想舊套に陥りつゆ尖新のふしを見ず。草庵集に視て劣ることたゞに一等のみならず也。

この他僧侶には一休和尚あり。よみ歌おしなべて教訓の意をこめたる道歌なれど時として飄逸超凡、まことに世情を穿ちたるものあり。これよりこの時代の末期にわたりて武人には武田信玄出ててその信玄百首あり。北條氏康には武藏野紀行あり。東常縁には常縁集あり。毛利元就には春霞集あり。この他宗祇の宗祇集、肯柏の春夢草また歌壇の名著としてその名噴々たり。なほこの時代の歌人の殿者として細川幽齋あれどもその生涯むしろ江戸時代に跨ること多きを以て吾人はしばちくこゝに述べざるべし。

第四章 連歌

一連歌の流行。たゞ和歌の上下句を二人して聯ねたりしは平安朝に於ける連歌なり。鎌倉時代より室町時代におよびてはこれを數十の多きに聯ねたる長大なるもの流行するにいたれり。室町時代においては殊に然り。それら形式のうちにても五十句を聯ぬるものと百句をつらぬるものと最流行す。上を五十韻といひ下を百韻といふ。

けふもさく憂き身を鐘に耻もせて 心 敬

老よいつまでちる花を見む。 宗 祇

鶯にかたらひくらす野べのさと 道 眞

さびしや訪はぬ春雨の中。 滿 助

苦かけてひとりぬる夜の船の床 中 雅

妹こひしらの旅のさむしろ。 心 敬

など一例と見るべし。

連歌はもとこれを色紙にしるせり。したがひて色紙にしるさざる後にいたりて

も以前の關係よりして種々の名稱を存したり。則百韻の連歌にていはゞ一句より八句までを表といひ次の十四句を裏といふ。次の十四句これを二の表といひ次の十四句またこれを二の裏といふ。次の十四句を三の表といひ次の十四句を三の裏といふ次の十四句を名残の表といひ最後の八句これを名残の裏といふ。また最初の句を發句といふ次の句を脇といひ三者を第三といひ以下次を逐ひて呼び最後の句を舉句といふ。連歌にも規則なし。しかれども十句二十句となり二十句五十句となり五十句百句と重なりゆくにつれておのづから言語の使用法造句の方法に單調と亂雜とを避けしめざるべからず。こゝにおいてかその法則を定めたる式目といふ者起れり。始めてこれを定めたるは藤原爲相にして後世これを舊式目といふ。後光嚴院の御時二條良基これを修正す。これを後世新式目と呼ぶ。連歌の法則の基礎こゝにいたりて堅し。後花園院の御時一條兼良更に新式に追加をなす。これを新式追加となふ。而して後柏原院の御時牡丹花宵柏西三條實隆とともに新式追加を増補す。これを新式今案といふ。連歌新式の大成了たるもの也。そもく當時の連歌界にありて雄飛せし者を誰とかなす。いはく善阿、いはく教濟、いはく周阿、いはく梵阿、いはく心敬、いはく宗砌、この他十の指を屈するに足るべし

といへども中に就きて斯道の祖と仰がれしものを宗祇となす、宵柏もこれに並びてかくれなし。彼等は實にそのかみの連歌壇の二明星ともいひつべし。これよりさき救齋は二條良基の命をうけて連歌集の嚆矢なる筑波集をつくり、宗祇は勅命によりこれに次ぎて新筑波集を撰じたり。ともにこの道の寶典を以て目せらるゝものなり。

吾人は餘白なきの故を以てこれら連歌師の傳記と評論とを除くべし。しかれどもたゞ一語を費すべきは何が故に連歌がかく流行を來したるかの一事なり。當時戰亂の世、人々人情の機微を察し、幽玄の詩美をさぐるのいとまなかりしはいふまでもなし。こゝにおいてか當時の歌人は苦心を用せず、勞力少き技術において彼らの詩才を活かせんことを考へたり。この時にあたりて、たはやすく縁語いひかけにたよりて一句に他句を連続する連歌の何ぞ割合に興味多くしてまた容易なるや。殺伐の氣風に浸み、同情なく、血なく、涙なく、ひややかなる眼もて世を觀察したりし當時の人士が洒々落落皮想の觀察を歌へる連歌に執着したりしも決して無理にあらず。況んやこれに加へて和歌壇萎靡の極運はまさきに機を見て變轉せんと逼りしをや。

二俳諧の勃興。連歌の和歌に異なるところは短句を聯ねて長篇となすにあり。

しかれどもこの兩者措辭の艶にみやびやかなるにおいては則一也。着想の千篇一律たゞ平ありて奇あるを知らざるにいたりてもまた一也。ことに諸種の式目出できたりしよりは、さらぬだに歌人にのみ限られ易かりし連歌はいとゞ専門的になりぬ。衆人の喙を容るゝあたはざるものとなりぬ。こゝにおいてか和歌にあき足らずして代りて現れし連歌は、更にこれに飽き足らずして代りて現るゝものを侍つべくなりぬ。連歌に代りてあらはれしものは何なりしか。いはく俳諧これ也。

俳諧は俳諧の連歌を略したる名也。俳諧の連歌とは滑稽の連歌をいふ也。何故に滑稽の連歌といふか。これ普通の連歌とはことなりて通俗なる卑近なる言語を縦横に使用して滑稽なる可笑なる感情思想を吐露したれば也。かゝる風體をよこしたりしものを誰とかなす。いはく山崎宗鑑、いはく荒木田守武これ也。

宗鑑は氏を支那といひしも山城山崎に住みけるより又山崎ともよべり。もと武林の人、後剃髮して名を宗鑑とあらたむ。寛正六年(二千二百二十五年)生れ天文二十二年(二千二百三十三年)八十九歳もて身まかりし人なり。

守武は宗鑑よりやゝおくれ、世に出てたり。この人伊勢神宮の神官也。文明五年(二千百三十三年)を以て生れ天文十八年(二千二百〇九年)世を去れる人なり。年七

夢のうちにもいたくこそあれ

花にぬる胡蝶は雨にたしかれて。

きりたくもありきりたくもなし

ぬすびとを捕へて見れば我子なり。

これ宗鑑の句の一例あり。また

なのりてやそもくこれは秋の月

燈ふむばりはつがりの聲。

くつわ蟲ゆるす手つなやなかるらむ

こよやあちこちかけまはりつ。

これ守武の句の一例也。

兩人の句大體において差異なけれど詳しく視來れば宗鑑は大膽なる滑稽の解頤を價するもの多きに反し守武は品よくみやびたれど興味うすき感あり。宗鑑は短き連句に長じ守武は長大なるかたに手腕あり。一長一短容易に軒輊すべからず後世もたゞひとしく俳諧の二鼻祖を以て稱せりといへども吾人はなほ宗鑑を以て守

武の伯氏に擬せんと欲する者なり。

俳諧の連歌となりて連歌は全く平民的となれり。平民的となれる連歌は従ひて國民的とならんとせり。江戸時代滿天下に流布したりし俳諧は實にその源をこゝに發したりしを忘るべからず。

第五章 謠曲と狂言

一。謠曲の由來。我國古來敬神の風俗あつし。これを以て、しばしば祭神の事行はれたりしが平安朝時代にいたりて神事の式後滑稽なる舞樂をかなくて、以て神々の御心をすゝしめ奉る事ありたり。これを名づけて猿樂といふ。その滑稽を主としたることは當事戲笑するといふ意をあらはすにこの猿樂てふ名詞を活らかしてさるがふといふ語を以てせるにて明か也。この猿樂や實に謠曲の基也。

この猿樂以外に當時田樂といふ一の舞樂あり。こは田樂法師などいふ名あるにても知らるゝ如く専ら法師の業なりき。而してそのなすところは歴史上の事蹟をしくめる今日のいはゆる能の如きものなりし也。これに加へて當時元國との交通あり。わが國の僧侶などのしばしばかの國に往來するにつけてかの國に行はれたりし雜劇の興味を感じてこれをわが國に傳ふるあり。こゝにおいてかこの田樂の能と元の雜劇との二潮流は共にそゝぎて猿樂の上に波及するにいたり、遂に從來たゞ滑稽なる性質のみを具へたりし猿樂にまじめなる歴史上の事蹟をしくめるものを生ぜしめぬ。こゝにおいて猿樂はその性質より見て二種に大別せらるゝにいた

れり。いはく滑稽なるものいはくまじめなるもの、その滑稽なるものを猿樂の狂言といひ、まじめなるものを猿樂の能といふ。略してたゞ狂言ともまた能ともいふ也。この能の舞をなすときそれにそふる歌曲を謠曲とはいふ也。

猿樂の能や、從來の猿樂はいはずもあれ、田樂雜劇の長所を集めて大成し、また歌曲の如きもあまねく日本古來の文句事實を綜合して興味饒多ならしめられたればその流行まことにいちじるしく、日に月に隆盛の境にすゝみ、遂に應永年間(紀元二千六七十年代)にいたりては結崎次郎清次といふものこの猿樂の技を以て足利義滿に寵せられ觀阿彌の名をたまはるにいたりぬ。こゝにおいて猿樂は將軍家の事とある式場に用ゐらるべき式樂となるにいたれり。この事更に猿樂の發達にあづかりて大なる力ありしが如し。

猿樂の能はいふまでもなく舞と歌とより成る。さばれ舞としての能は吾人のこゝに説明すべき限りにあらず。吾人はたゞ歌としての能則謠曲といふ方面よりそのいかなる價值あるものなるかを一言せんとなす。

二。謠曲の種類。謠曲の材を探るところきはめて廣し。古來の歴史上の傳説にして詩的なるものほとんど網羅せられざるはなし。あるは名所古蹟によりて趣向を

かまへたるものあり。あるは古歌名句によりて仕組を設けたるもあり。その有名なるものゝみにても實に二百番の多數に上れる也。かくの如く多數なる謠曲なればその種類もまた千差萬別なれど大やう別ちて四種となすことを得べし。四種とは何ぞや、いはく神事能、いはく祝言能、いはく幽霊能、いはく人事能これ也。第一の神事能といふは神の縁起功德などを説明せんがために趣向をなせるものをいふ。そも、能は猿樂にはじまり、猿樂は神前にて舞樂をするにあつて。かく神事といふとが根本たりし以上はあつから神の事に關せる能のあまたあらはるゝにいたれるこれあつからなる理にあらずや、かの大社玉井などいふ能はこれに屬するもの也。

第二の祝言能といふは御代長久を祈るの意をこめたる能也。天下の太平を壽きたるもの也。能が將軍家の式樂となりて國家的の性質を帶ぶるにいたりては天下の泰平をことほぎ御代のとこしへならむことを希ふの情をこめたるもの、あらはるゝにいたりしもまたあやしむに足らざる也。

更に翻りて考ふるに當時室町の世はわが歴史上の暗黒時代なりき。氣風殺伐にして倫常の道すたればてたる時代なりき。親は子を捨て子は親に敵し、君臣相撃ち、

兄弟かたみにせめぐ。人は殺戮を以て尋常茶飯の事となし、敗徳を以てつゆあやしむに足らずとなす。天下はかくの如くにして果していかなる境遇にか陥らむ。世を憂ふるもの國を思ふものゝこゝにいたりていかてか衷心悶々たらざるものあらむや。當時の教育家たりし僧侶は甚だしくこれをうれひ、その救世の手段に思をめぐらせり。書をあらはして倫常の道をとかんか。當時の人民武士、眼中一丁字なきをいかにせむ。彼等をあつめて説教せんか。いかてさる乾燥無味なる理論に傾聴せむ。かれら教育に従事するものはこゝにおいて當時人々のあまねくもてあそびし猿樂の能を利用するに思ひあよびぬ。能を利用するとはいかなる意味ぞ。則因果應報の理をしくみたるものを演じ、彼等無智のものをしてあつから懺悔の心を起さしむるにあり。こは最ももしろき企てなりき。一例をあげんにまづこゝに恨を飲みて死したりしかの平家の將軍平忠度を點出し、その煩惱の絆につながれまだ娑婆にさまよふよしをのべしめ、次に僧侶を拈出し來りてこの幽魂の忠度たるを看破せしめ、こゝにその讀經の功德によりてかれ忠度を淨土にうかばしむるといふやうなる趣向なり。この種類の能には必ずや幽霊のあらはれきたらざるべからず。故にこれを幽霊能といふ。謠曲の第三種にかまへたるもの則これ也。

この三種にもれて種々なることをしくめるもの、これを總稱して人事能といふ。
 三、謠曲の文學的價值。謠曲はこれをいかなる種類の文學と見るべきか。いふところおほむね主觀的にして感情の流露せるところより考ふれば、これを叙情詩といふべきか。また事實をものがたるが一篇の目的なれば、これを叙事詩と名づくべきか。あるは篇中の人物自ら語り、自ら爲し、おほむね作者をして説明の要を取らしめざるところより考ふれば、これを戯曲といふべきか、皆その理なきにあらずといへども吾人はこれを戯曲—叙情的戯曲則歌劇—といはんことの最適當なるを信ずる也。謠曲を以て戯曲とすれば、その戯曲としての價值はいかなるものぞ。事件の起伏はいかん。性格の描寫はいかん。また果して戯形なるものをそなへたるか。謠曲を見るに事件の發端あり。また事件の葛藤あり。終に團圓あり。いはゆる戯曲の五部三點なるものは不完全ながらもそなはりたるが如し。しかれども性格の描寫にいたりては何等の活動を見ず、全く木偶の活動せるにことならず。事件にいたりても不自然にして突然なること多く撞着して氷炭相入れざるふし、決して少なからず。これを以て謠曲はその性質の上よりいへば戯曲に屬すべしといへども、しかも戯曲としての價值は甚だとほしといはざるべからず。然らばその文學として

の價值はいづれにあるかといふに吾人はむしろその叙情的なるところに優秀なる點を發見するもの也。則謠曲の言語の洗煉にして光彩の燦然たる、流暢にして圓轉流滑なる、あるはいひかけを巧に弄して趣味ふかき道行文をものしたる、殊に人間の眞情の流露せるところ少なからざる、感情の急所を捉へて一讀あはれと思はしむるところあるなどは最謠曲の長所なるべきか。吾人は一々こゝに例をあげていふ餘白をもたざればたゞ一斑を捉へ來りて全豹を窺はしめむ。

甘泉殿の春の夜の夢心をくだくはしとなり、驪山宮の秋の夜の月、終りなきにしもあらず。末世一代教主の如來も、生死の掟をば遁れたまはず。すぎにしきさるぎの頃申し、如く何とやらむこの春は年ふりまさる朽木櫻ことしばかしの花をだに待ちもやせじと心よわき老の鶯、あふ事もなみだにむせぶばかりなり。たゞ然るべくばよきやうに申し、しばしの御いとまを賜はりて、今一度まみえおはしませ。さなきだに親子は一世の中同じ世にだにそひ給はずば孝行にもはづれ給ふべし。たゞかへすくも命の内に、いまひと度見まわらせたくこそ候へとよ。老いぬればさらぬ別のありといへばいよく見まくほしき君かなと故事までを思出の涙ながらかきとむ。

こはこれ謠曲熊野中に見えたる熊野の母より熊野につかはせる書簡也。文章の技倆といひ情緒の纏綿といひまことに絶妙のものにあらずや。

しかれども謠曲の全部はことごとくこの一唱三歎の文字もて満たされたるにあらず。いな古歌古詩を補綴餽釘し藍縷百結何の獨造もなく人をして観るを厭はしむるところ甚だ多し。ことに謠曲の文章の一缺點は言語配列の統一なきにあり。無關係なる言語を挿入し順序を轉倒し無理なる言ひかけを用ゐ過多なる綺語を用ゐなどして意味の何たるかを疑はしむるものしばしばあり。この意味において謠曲の文章は功過相半すといふを以て妥當なりといふをはゞからじ。

四謠曲の作者。謠曲の作者につきては二三篇を除くのほかは全く不明なり。しかれども當時文學の覇柄を執れるものは緇衣の徒なりしを考ふるにもまた謠曲にあらはれたる思想のほほむね佛教に關するものなるを考ふるにも謠曲の大部分が當年の僧侶の手に出たりしものなること疑ふべくもあらず。苦佐之波良などに内百番諷作者名簿とて

高砂(相生公御門御宇姫小松西洞院殿作)

卒都婆小町(定家卿作)

熊野(高安の里小野寺上人作)

羽衣(吉田兼好作)

松風(山科太郎殿作)

蟬丸(西行法師作)

安宅(比叡山能辨作)

などすべて九十一番の作者を皆しるしたれど必ず信すべきにもあらずかし。

五、狂言。狂言は前にもいふ如くむしろ猿樂の本體といふべきもの也。もど神意を慰め奉る滑稽の舞技より出て、やゝ趣向を構へ脚色を作りたる者となれり。その數いと多く合せて三百番ばかりあり。あるは祝賀に關するもの、あるは盜賊に關するもの、あるは大名に關するもの、あるは僧侶に關せるものなどこれ種類さまざまなり。しかれども分ちて三大別となすことを得じ。一にはただ祝賀の意味あるもの、二には滑稽の意あるもの、三には滑稽に加へて世と人とを諷刺する意あるものこれ也。

當時戦亂の世憂と涙とを以て満たされたる世に、かく可笑の趣味ある文學のあらはれしと甚だあやしむべしといへども、一方より考ふれば、かく兵馬倥傯の世人に廉

耻の心なくして、賄賂は公行し、心に菽麥を辨せずして、大人も小兒の如く世をぞりて痴態を演ぜしはいかに識者の眼目には滑稽に映ぜしぞ。そのさながら反映せられて、こゝに狂言の生じたるもまた理なしとはいふべからざる也。

狂言の價値は文體の作らずかざらず赤裸々にして天真を得たるところその一也。駄洒落もあれど、多く滑稽の本旨にかなひ後にいたり江戸時代の滑稽作者を益したること多きその二也。佛教の傳來以來悲觀的傾向のみ流行せる日本文學に健全なる滑稽の精神をふるひおこしたる、その三也。わが國言文一致體の最古の標本とも見るべきこと、その四也。

世人は謠曲に對して狂言をいやしめぬ。しかれども、狂言の價値は決して謠曲の下におつるものにあらず。いな時としてそれ以上のものあり。狂言は室町文學中必ず忘るべきものにあらざる也。

第六期 江戸時代

第一章 總説

一、江戸文學の七特質。江戸時代は日本文學の歴史において最隆盛をきはめたる時代なりき。たゞに隆盛なりしのみならず、これを他の時代における文學にくらぶるに、その性種々の點において異なるを見る也。

そも日本文學は前にもいへりし如く七期にわかつことを得べし。而して江戸時代の長さはそれら諸時代の間においてさまで珍らしといふにあらず。しかも上下三百年、些の間斷なく隆昌の運をつゞけたりしこの時代の文學の如きは決して他の時代において見ることを得ざるべし。これをこの時代の文學の特質の一となす。

況んやこの三百年の間における文學の生産力は極めて旺盛にして、産出せられし文學の總量はきはめておびたゞし。この産出力の大なりしこと、これを是時代の文學の特質の第二となす。

江戸時代の文學は分量において豊富なりしのみならず、種類においても豊富なりき。奈良時代の長歌短歌は眞淵千蔭春海の吟詠によりて復活せられ、平安時代の物

語は京傳馬琴の述作において再現せられぬ。室町時代の能や狂言や則江戸時代の浄瑠璃也脚本也。平安時代菅丞相都良香の漢文學はやがて白石南海山陽拙堂の漢文學なり。この他前時代にあらはれたる文學の諸種類はことごとく之を江戸時代の文學に於いて發見せざることなし。江戸時代は實に他の時代の文學における精粹をあつめたる時代也。これをこの時代の文學の第三の特質となす。

江戸以前の時代にありては貴族もしくは僧侶は文學の主權者なりき。かれらは封建の世に生れ門閥を重んじ大平の夢より夢に葬られて自由革命の何たるものあるを知らざりし也。しかるに江戸時代にいたりては文學の權力は移りて平民の手中に歸しぬ。平民の眼中はたゞ平等あるのみ進取あるのみ。こゝにおいてか從來保守的繼承的なりし文學の精神變じて革進的進取的となりぬ。文學の價値は畢竟個人の表現にあるなれば先人を模擬するよりも自我を發現すべしといふ精神はこの時よりあこるにいたりぬ。これまことに江戸文學の第四の特質にかぞふべきものにあらずや。

文學が活潑なる運動をなすべき動機の一は自由といふことにあり。自由とは何ぞやといふに思想の發表に束縛掣肘を被らざることをいふ。江戸以前の時代において文學が目ざましき活動をなすあたはざりしは全くこの自由といふとなかりければ也。さるるを江戸時代に入りて文學の主權が貴族僧侶の手を離るゝ結果として從來の拘束主義もまた文壇を知れり。こゝにおいてか自由意思といふことと自由研究といふことは油然として夏雲の如くあこり來れり。あゝこの自由これたしかにこの時代の文學の特質にかぞふべきものゝ一つ也。

文學に尊ぶべきは個人を表現したるにあり。故人の模倣をなさざるにあり。個人を發現するには則わが獨造の思想を出す也。これ實に文學に缺くべからざるもの也。江戸以前の時代に於けるわが國文學はおほくは模擬的文學なりき。江戸時代に入りてより自由意思の發表せらるゝにいたりし結果文學は個人を表現するにいたれり。獨造的となるにいたれり。これまた以てこの時代の文學の一の特質にかぞふることを得べからずや。

貴族か主權者なりし時代の文學がものづから貴族的性質を帶ぶべくば平民が主權者なりし時代の文學が平民的性質を帶ぶるにいたるべきは理のまさに然るべきところ也。江戸時代の文學は江戸以前の時代の文學の貴族的なりしに引きかへて平民的となりぬ。社會的となりぬ。何人にも理解せらるべき普通性を備ふるに

たりぬ。そも文學が有すべき性質の一はこの普通性といふこと也。貴賤老少を問はずひとしく讀みて興味を感ずべき性質也。しからばこの普通性をほく備ふるにいたりさといふことはまた江戸文學の第七の特質なりといひて可なるべきにあらずや。

二、江戸文學の四期。これらの特質をそなへたる江戸文學はその種類さまざま也。和歌あり。俳諧あり。狂歌あり。淨瑠璃あり。小説あり。雅文あり。俳文あり。その發展盛衰のあとはおの／＼ひとしからずといへども文壇潮流の大勢にしたがひ、一高一低の波瀾をおこしたりし大體の趨勢はおほやう同じかりしが如し。その大體の趨勢とはそもいかなるぞ。

慶長十八年(紀元二千二百六十三年)徳川家康が征夷大將軍となりけるより慶應三年(二千五百二十七年)徳川氏が大政奉還にいたりけるをこの時代の終としてこの間二百七十有餘年間の大勢、幾多の變遷を來しけるあとにしかがひて吾人はこの時代を四期にわかたむとす。

江戸文學の創業者はいふまでもなく徳川家康也。これより秀忠、家光、家綱、綱吉、代々の將軍みな崇文の志ふかかりしかば文運日を追うて盛なりきといへどもなほ戰國の後をうけて當年の文學界未だ桃源のねむりをさますこと能はざりき。

たゞ大勢の鬱起するところ五代將軍の始頃よりして自由革進の精神次第におこり、そのみなぎるところ、遂に江戸文學の高潮たる元祿時代の盛觀をあらはすにいたり。かく慶長八年頃よりして貞享の末年(紀元二千三百四十七年)頃までを劃して吾人は江戸時代の第一期として名づけて元祿以前の時代といふ。

第一期の終においてあらはれる文壇革命の氣運は次第に發展し、綱吉執政の中頃、元祿年間において最盛況を呈したり。これよりつゞきて家治將軍の執政時代則明和六年(紀元二千四百二十九年)頃までの間を第二期とし名づけて元祿時代といふ。さて第三期はこの後をうけて文化八年(紀元二千四百七十一年)頃をもて終る、これ江戸時代文學の第三期にして、名づけて天明時代といふ。徳川氏の天下もここにいたりて二百年、士民は太平を謳歌して眞に文事をたのしむの餘裕を生じたりき。もし元祿時代をもて、一陽來復、江東の梅園叢を破りしにたとふべくんば、天明時代は春風駘蕩、滿都皆花なるになぞらふことを得む。

江戸時代最後の時期を吾人は名づけて天明以後の時代といふ。則文化九年(紀元二千四百七十二年)頃より慶應の終までをふくめる也。人心の悠々たるが文學に隆

昌の運を來すとともに胸裏の匆忙たるが文學に萎縮をあたふるも争ふべからざる事實也。嘉永六年(紀元二千五百一二年)黒船の渡來は、たしかにわが文壇の大打撃なりき。浦賀灣頭一發の砲聲はわが國民を挑源の夢より驚かしたりしや疑なし。この時代の文學がおしなべて萎靡し沈滞するにいたりしは自然の數とぞいふべき。

江戸時代第一期 元祿以前の時代

第二章 當時の一般

一文學と代々の將軍。洋の東西をとはず文學の勃興するはこれを時代の太平に歸せざるべからずといへどもまた一方に大なる勢力となるは文學保護者の出現也。江戸文學の興隆は實に三百年の燕安無事に基すること論なしといへどもまたなしかに文學保護者の出てしによらずんばあらず。

それら保護者のうちにも殊に忘るべからざるは徳川家康也。家康思へらく治國平天下の要は倫常の道を奨励するにあり。これを得るに武を以てしたりし天下はこれを保つに文を以てせざるべからずと。こゝにおいて家康は専心文教の奨励をつとめたり。あゝ文教の奨励口には輕くいひ出づべきも當時これを行はんことのいかに困難なりけるよ。この間にありて百難を排して家康が執りし方法に五つのものありき。一には講書の禁をとぎ何人にも讀書し書を講ずるをゆるしたりし事也。二には學者を優待せしこと也。三には書籍を蒐集せしこと也。四には蒐集せし書籍を刊行せしこと也。五には文庫を設立せしこと也。

二代將軍また右文の志を継ぎ、三代將軍もまたこの方針を失はざりき。あるは學者を優遇し、あるは文庫を擴張し、あるは書物奉行をよくなどいづれか文教の獎勵に貢献せざることありし。四代將軍もまたこれと同じ。ことに五代將軍の非常なる學問ずきなりしことは有名なる事實なり。

將軍の好むところは臣下の好むところ也。將軍文事に志して諸侯また斯道に進むもの少なからざりき。尾張家の祖たりし徳川義直を見よ。水戸家の先なりし徳川頼房を見よ。あるは藤原惺窩に弟子の禮をとりし淺野幸長を見よ。林道春に師事せし黒田長政を見よ。あるは池田光政が出仕の途上經書を釋てざりしが如き保科正之が山崎闇齋をまねきて優待せしが如きいつれか適例ならざらむ。ことに正保年間長崎の人和泉屋半三郎といふもの江戸に來りて始めて書籍商を營みきといふことはいかに幕府の事業が延いて民間一般の出版界に興奮をあたへしかの明證となすべきにあらずや。

二文學と革進。徳川家康の文治に尊むべきことになほ一の忘るべからざることあり。則自由研究の精神を鼓吹したりし事也。家康がかつて船橋秀賢の羅山の新註を用ひしをとがめしを嘲りけるは厭るが如きわが學問界に自由研究の警告をあ

たへし曉鐘にあらざりしか。この自由研究の精神やこの元祿以前の時代の末頃より最束縛少きところを擇みて漸々に發動するにいたりし也。

束縛少きところとはいかにといふに第一には漢學也。惺窩出て、程朱の學を傳へしといへども土佐なる南村梅軒は自由なる研究によりていはゆる南學派をもちし、近江なる中江藤樹はまた自由なる研究によりていはゆる王陽明學派をもちせり。いづれか自由精神の結果にあらざらむ。

漢學につぎてこの精神の爆發地となりけるは俳諧也。俳諧の歴史は和歌に於いて見たりしが如く門戸と束縛との歴史にあらざりき。されば宗祇と宵柏とを倒して松永貞徳あり。貞徳を排して西山宗因あり。宗因にかはりて松尾芭蕉あり。これはた自由精神の發動せる現象にあらずや。

小説界戯曲界またつゞきて革命の氣運をひかへたり。而して最もそこの活動を始めたるを和歌壇となす。太宰春臺いはく、

われ八九歳の時より三十一文字をよみぬるすべを知り十歳ばかりより十二三までに腰折歌凡三四百首よみたり。……其時愚心ひそかに思惟せしは和歌をまなびてたとひ上手になりたりとも公家を越ゆる事なるまじければいつも公家の

下にかがみなむことを口をしけれ……いざ歌よむことをやめて詩作る事を習はゞやと思ひ定めてかきつけおきたる和歌の反故をことごとく焚きすてたり。元祿の初年の頃和歌壇にはなほ壓制束縛のきびしかりしこと、これにておしはかるべし。しかれども天運のむかふところ人力のいかんともすべきにあらず、戸田茂睡、荷田春滿、僧契沖の輩いで、始めて自由なる研究をなし、陋見を打破し、僻見を排撃し、以て五里霧中に彷徨する歌人を覺醒せんとせり。こゝにいたりて文壇おしなべて新氣運の席捲するところなり、新思潮もてみてる海洋の朝なご清き元祿の新天地は、まさにあらはれんとするにいたりし也。

三、この時代の文學の特點。元祿以前の時代の文學をもて、これより以後の時代のそれと此するに三の異りたる點あるが如し。一には文學に十分の分業の行はれざりし事也。和歌者流連歌師をかね俳諧師小説家をかね漢學者の國學に詳しかりしものなど決してめづらしからざりき。第二には文學の中心點のなほ上方にありて江戸にうつらざりしこと也。漢學界和歌壇の巨擘が京都にすみたりしはいふまでもなし。小説家、戯曲家、俳諧師、狂歌師などおほむねその居の京都もしくは大阪にあらざるはなし。寛文十二年芭蕉始めて江戸に來り天和二年木下順庵東下し、元祿二

年北村季吟幕府の召聘に應じて歌學方となりける頃までは文學の中心點はなほ依然として上方をはなれざりし也。第三には文學の性質一般に幼稚にして實用的なりしこと也。戰國殺伐の氣風は一朝にして撲滅せらるべきものにあらず。徳川時代の初期においては天下の大衆おほむね眼中一丁字なきものなりしや疑ふべからず。これらの民衆に應ずべき文學が單純となり、幼稚となり、實用的となりけるもまたあやしむに足らざるべき也。

第三章 和歌

一、細川幽齋とその門流。この時代は前にもつたりし如く和歌壇は戦國衰退のありさまをうけて何等の活動をなすこと能はざりきといへども、しかも一方にいは歌道に熱心せさせたまふ天皇の上になすあり、また一方にありては堂上家にも俊秀の才の輩出するありて歌壇は決して委靡の状態に陥りてあらざりし也。和歌を業とする家なども、この時にあたりて陸續として出てきたるにいたりしはその現象の一也。西三條家、鳥丸家、水無瀬家、中院家、清水谷家など、あるは新に家をおこし、あるは従前よりいと榮え來りしも實にこの時也。歌集の撰ばるゝことしばしばなりしはその現象の二也。慶長千首の撰ばれたるもこの時にあらずや。新編古今和歌集に終りし勅撰集の跡をつぎし類題和歌集の撰ばれしもまたこの時にあらずや。

かゝる歌壇のうちにありて、衆人の仰きて當時の山斗となしゝものを誰とかなす。いはく細川幽齋これ也。幽齋は天文三年(紀元二千九百九十四年)に生る、長じて將軍義藤の一字をたまはりて藤孝とあらたむ。身武門に生れたりといへとも心を詞林に

あそばせ、遂に西三條實澄につきて古今集の傳授をうけぬ、されど天正十年(紀元二千二百四十二年)織田信長の弑せらるゝにおよびて悲痛おく、あたはず髪を薙ぎて幽齋また玄旨と稱せり。後豊臣秀吉にしたがひて、九州道の記、東國陣道記の著あり。慶長十五年(紀元二千二百六十年)丹後國田邊城にありける時、石田三成にかこまねて危かりしを後陽成天皇きこしめして古今傳授のたえなんことをうれひたすひて使を城中に遣はしてこれを受けさせたまふ。さて圍解けけれど後出て、仕へず、慶長十五年(紀元二千三百七十年)遂に身まかりぬ。年を享くること七十七也。その家集を衆妙集といふ。詠歌大概抄、幽齋翁問書、耳底記などの著あり。皆幽齋が歌論を知るに足るの書也。

幽齋の歌、堂上家の剪裁を離れず。たゞ武人だけありて、たまゞ、壯大なる趣あるを特色とすべきのみ。武門に生れ亂世に長じ、壘を横たへ戈を枕とするの間にありて、かくまで風詠に心を傾けたるを更に珍とすべきのみ。ことにまさるに絶えなむとせし古今傳授の命脈をつなぎとめたるその功績は、かれをしてとこしへにその名を歌壇より忘れしめざるべき也。

幽齋に教を乞へるもの多かりし中にことにかくれなかりしを一に中院通勝とし

二に烏丸光廣となし、三に松永貞徳となす。

中院通勝は永祿元年(紀元二千二百十九年)を以て生れ、慶長十五年(紀元二千二百七十年)五十三才を以て薨じける人也。わかきより聰敏、才識人に超ゆ。西三條實澄、細川幽齋にしたがひて歌道の奥底をたゞさぬ。その著岷江入楚は源氏物語を註釋したるもの、最通勝の蘊蓄をうかかふに足る。家集は今傳らず。

烏丸光廣は天正六年(紀元二千二百三十八年)を以て生れ、寛永十五年(紀元二千二百九十八年)六十一歳もて薨じたまふ。資性風流、繩墨に拘泥せず、常に身を一室にこめて吟咏をこれ事とす。家集あり、黄葉和歌集といふ。

徳川氏が和歌の顧問を堂上にもとむるや、幽齋特に光廣をぬきいて、撰にあてぬ。光廣が重望を負ひける事推して知るべし。

松永貞徳は松永久秀の子也。元龜二年(紀元二千二百三十一年)を以て生れ、八十二歳の高齡を保ちて承應二年(紀元二千三百十二年)遂に身まかりぬ。貞徳わかきより風雅にあつく、あるは和歌に、あるは連歌に、あるは俳諧にいづれもその指を染め、當時の名流ことごとく取つて以て師とせざるはなし。これを以て名聲次第に高く、かたじけなくも朝廷より花咲翁の號をたまはり、宗匠の勅許をたまはりぬ。俳諧に宗匠

ある實に貞徳を以てはじめとす。俳諧師としての貞徳は俳諧の條下にとくべければこゝにはたゞ歌人としての貞徳につきて一言せむ。貞徳に家集あり、逍遙集といふ。貞徳は逍遙軒と號したりければ也。また師事せし人々のことゝもをしるしたるものあり。戴恩記といふ。その歌道の經歷を知るに足る著也。

貞徳の歌には

昔たれ雲拂へとて植ゑにけむ月のいてくる峯の松風。

何事も時ぞと思へ夏きては錦にまざる麻のさころも。

などの如く一興ある者なきにあらざれど、おほかたは、なほ清新の風に乏しく、未だ歌壇に新貢献をなせる者あるを見ず、吾人は歌人としての貞徳よりも寧ろ狂歌師としての貞徳をとる。狂歌師としての貞徳よりもむしろ俳諧師としての貞徳をとる。

その多才多能にしてよく奇才縦横なるところ、吾人のことに敬して服するところ也。この他當時の歌人を以て目すべきもの、あげてかぞふべからず。鷗巢集を著はしたまへりし後水尾院あり。ことに天皇が武家の跋扈をにくませたまひて、御鬱憤の氣をもらさせたまへりし御詠の如きは、最人の心脾に沁むに足るものあり。

あし原よしげらはしげれ武藏野にとても道ある世にしあらねば。

の如き一斑となしたてまつるべし。あるは

吉野山花さく頃のあさなあさな心にかゝるみねの白雲。

とよみて白雲の喜助とよばれたる佐川田昌俊あり。あるは冷泉家を再興したる冷泉爲景あり。皆當時において名聲を振はせけるもの也。

二、和歌革新の先登者。大なる革新は突如として来るものにあらず。江戸時代第一期の和歌はこれを大觀すればほとんど革新の氣運をみとひること能はざるも、なほこまかに察すればこの期の末においてわづかに革新の曙光のたなびきたるを見るべし。而してこれら革新の曙光をもらしたるものを誰とかなす。一にいはいく木下長嘯子、二にいはいく深草元政、三にいはいく下河邊長流これ也。

木下長嘯子は名を勝俊といふ。元禄十二年(紀元二千二百二十九年)を以て生れ元和元年(紀元二千二百七十五年)四十七才もて身まかりける人也。英武の資を以てかねて詞藻におよび干戈を事とするのいとま吟咏するところおほかりき。官左近衛少將まで昇りけれど、大阪の役去就を決せざりしたため、戦後徳川氏のために所領を奪はる。これより東山に潜居し、長嘯子と號し悠々和歌にかくれたりき。長嘯子、その家集舉白集中に歌うていはいく、

しきしまの道すぐにしも踏みわけむ人はよもぎのあさましの世や。

これ當時堂上家の拘束おほき歌風にあかざりし心を吐露せるものか。長嘯子が中院道勝をそしり、細川幽齋にも屬せざりしといふ事實はます／＼その心を證すべきならずや。

舉白集中の歌堂上家が制詞の禁をやぶりて清新なる言語を用ゐたるもあり、風情をもとひること縦横に、思をかまふるときはめて自由也。これをもてその風いたく、當時にもてはやされきと見えて、堂上派の意見をうけて長嘯子の歌風を排斥したる雞舉白集といふもの出てたり。長嘯子が自讃の歌といはるゝ

よもの雲はふけ静りて花の上にとおぼろなる月獨のみ。

といふ歌の如きはよくその風體を表はせりと思ふ。

深草元政は法名日政といふ。元和九年(紀元二千二百八十三年)生れ寛文八年(紀元二千三百二十八年)四十六歳もて寂しける人也。元政詩に詳しく、佛に明かに、かねて歌道にふかし。その詩を集めたるものに草山集あり、和歌をおつめたるものに草山和歌集あり。

元政は歌を以て身を立てんとしたるものにあらず。故にかれに傳授秘訣の必要

なく師承の必要なく、したがひて又流派の考なかりき。思ふまゝ興ずるまゝを歌ひいて、かゝはるところなき、これかれが歌の風體也。しかれども、もとこれ佛者の吟、おのづから、しめやかに、ものさびたる吟詠の多數を占めたるは免れがたき勢といふべし。

つひに身の烟りとならむはてはまた花に立ちそふ霞ならまし。
など以てその一例となすべきか。

下河邊長流は寛永元年(紀元二千二百八十四年)を以て生る。ひと度青雲の志を絶ちける後はひたすら國學に心を傾けて、ことに歌道に執心す。而して最萬葉に深かりきといふ。中年僧契冲と交をむすび、生涯かはるとなし。その家集を晩花集といふ。時として

富士のねにのほりて見ればあめつちはまたいくほとも分れさりけり。
などの如く壯大なるものもあり、もしくは

たづぬれば雪まの若葉七種の花からよりこそ得かたかりけれ。
などの如く清新なるものもあれど、大體よりして觀察すれば未だ纖巧にしていはゆる古學派歌人の、後の世ぶりを免れざるもの多し。

しかれどもその革新の志ふかゝりける事はその長嘯子が清奇の風體に私淑せしにてもしるく、また累座集、萍水、和歌集などいふ歌集をえらびて地下の歌人を傳へんとしたるにてもしるかるべし。契冲かつて長流と長嘯子とをくらべていふ、

今この翁にくらべてたとふるに、山をぬく力はたとひまさりたまふとも弓を引き大刀をぬくわざは翁や(長流をさす)くはしからむ。

けだし雄大は長嘯子あるひは長流にまさることあるも變化の手腕あるにいたりては長流、長嘯子にまされるをいふなるべし。

長流とならびて僧契冲あり。契冲と雁行して戸田茂睡あり。ともに革新の氣運を熾ならしめたるものなりといへども、その生涯元祿時代にまたがること多きを以て吾人はこれをかの期において述べべき也。

第四章 古風の俳諧

一松永貞徳と古風の俳諧。日本武尊に始まりし連歌は連綿としてたえず文壇の一詩形として傳はり來りしが、室町時代の末にいたりて山崎宗鑑荒木田守武の力によりて、一變して俳諧となりけることは吾人これを前章にいへりき。

しかれども宗鑑守武の俳諧は、ひたすら千遍一律の連歌に反抗して滑稽をひねとし卑語俗語など何の遠慮もなく詠みこめりしかばその風體卑陋にして何等の品位なく、心あるものはかへりてこれを顧みざるにいたりし也。その頓挫をなげき再興の志を抱いて、おこりたりしものをこゝにいふ松永貞徳となす。

この際における貞徳が態度はそもいかなりしか。かれはよく連歌と俳諧との長所を合せ得たり。特色を湊合したり。そはいかにといふに貞徳は俳諧流の滑稽をやるに連歌流の品格ある言語を以てせり。俳諧の卑俗なる點をのぞくと同時に連歌の千遍一律てふ缺點を去りたる也。その門弟池田是誰が

貞徳老人の俳諧はやさしきを體としてをかしきを用とす。正風體を根ざしとして狂言を花とす。されば花實そなはりて一偏なる事なし。

とあるもやがてこれをいへりし也。

貞徳の著したるものに新增犬筑波集あり。一名淀川といふ。これ宗鑑の犬筑波集を評したるもの也。また油粕あり。これ犬筑波集の前句にみづから附句をつけたるもの也。また俳諧御傘あり。これ俳諧の法式を定めたるもの也。從來連歌には法式ありけるも俳諧にはなかりき。貞徳にいたりてはじめて俳壇の人々に向ふところを知らしめたる也。

しかれども貞徳の俳才を知らんとするものは去つて貞徳が發句をうかがはざるべからず。かれが發句のみをあつめたるものはなけれど俳諧の子集には多くこれを收めたり。その一二を抽けば

花よりも團子やありてかへる雁。

七夕のなかうどなれや空の月。

など以て例とすべし。

貞徳は宗鑑守武が卑俗を除去するに於いては確に成功せり。しかれどもこれを除去して後、眞の滑稽を發揮することは成功せざりき。貞徳の俳諧は品よきところはこれあらむ。しかも人をして捧腹し絶倒しあるは心よりうなづかしむるに起

るものなし。貞徳が滑稽をなすや、たゞいひかけの手段によるのみ、縁語の遊戯を弄するのみ。まゝ心より入りたる滑稽なきにあらずといへども、そはほとんど異數と稱すべし。これを以てその滑稽や淺薄にして眞の解頤を價せず。したがひてその俳諧や未だはるかに宗鑑守式の上に出てたりといふ事を得ざる也。

しかれども、貞徳の多才と多能と博學とはいたく世人の尊信をきたし、當時俳諧をまなばんとする者おほむねこの門にあそばざるはなし。それらの中において殊にかくれなかりしもの七人あり。一にいはいく野々口立圃、二にいはいく安原貞室、三にいはいく山本西武、四にいはいく北村季吟、五にいはいく鶏冠井令徳、六にいはいく高瀬梅盛、七にいはいく松江重頼これ也。これを貞門の七俳仙といふ。この他齋藤徳元、石田未得、半井ト養など皆かくれなし。

野々口立圃は家、雛人形を賣りければ雛屋ともいふ。俳諧にかねて和歌をもまなび鳥丸光廣の門に入る。寛文九年七十一歳もて身まかりける人也。其著書あまたある中に俳諧はなひ草ことに名高し。これ四季の景物を十二月に按排し、以て初學に便したるもの也。

安原貞室は一囊軒と號す。貞徳に従ひて俳諧をまなぶこと二十年。貞徳が高足

の門弟也。これをもつて遂に貞徳の後をうけて二世花の本の號を嗣ぐにいたりぬ。延寶元年(紀元二千三百三十三年)遂に身まかりぬ。年六十四歳也。

七俳仙のうち吾人はことに貞室をとる。その句師の淺薄なる滑稽をはなれてまゝまじめなる正風に近きもの多ければ也。こは

これはく／＼とばかり花のよし野山。

松かげや月は三五夜中納言。

などの什にて見るべし。三宅嘯山が

此叟在古風中也。稍開天真之端。貞元諸子實有依焉。可以稱正始也。

とあるもうべなる評也。

鶏冠井令徳は陀隣庵と號す。延寶二年(紀元二千三百三十四年)六十八歳もて歿しける人也。かつて守武の獨吟にならひて千句を聯ねしかば貞徳いたくその才を稱しけりとかや。

松江重頼は維舟と號す。性剛腹にしてしば／＼同門の士と諍ふことあり。遂にその師の譴責をうけて破門せられぬ。しかれども俳才拔群、その名ことに世にかくれなかりき。かつて古今の發句附句を集めて犬子集あり、これ實に江戸時代に於け

る俳諧集の權輿ともいふべきもの也。貞徳一流の俳風を知るに最たよりよき書也。延寶八年(紀元二千三百四十年)七十四歳をもて身まかりぬ。

山本西武は蚤歳より貞徳に師事してその俳諧の執事たりき。されば貞徳にいたくめてられてことごとくその秘事故實を授けらる。歿年明かならざれど貞享の末より元祿の始めなるべきは疑ふべからず。

高瀬梅盛また陀心子とも號す。俳諧にかねて歌道にふかし。さればかつて幕府より招聘ありけれど齡すてに傾きたりといふ故を以て辭して北村季吟をしてそのれに代らしめぬ。その名のかくれなかりしことは以て察すべしにあらざや。元祿十二年(紀元二千三百五十九年)八十九歳をもて歿しぬ。

最後に北村季吟につきてのべむ。季吟は寛永元年(紀元二千二百八十四年)を以て生る。拾穂軒湖心齋七松子などの號あり。若きより文學のわざを嗜み、安原貞室につきて俳諧をまなびしか後、轉じて貞徳の門に入れり。かたはら飛鳥雅章などにつきて歌道を攻む。季吟生れて精力つよく博覽洽聞國學の書おほむね涉獵せざるはなし。これを以てその著源氏物語湖月抄、枕草子春曙抄、八代集抄などみな文壇の寶典たり。皆その造詣のふかきを證するに足る。

元祿二年(紀元二千三百四十九年)幕府にめされて歌學方となりぬ。後法印に叙せられ再昌院と號しぬ。別墅を小石川關口にいとなみて疏義莊といふ。寶永二年(紀元二千三百六十五年)遂に易簣しぬ。年八十二歳なりき。

季吟はあとなしき學者なりき。またあとなしき詩人なりき。その師貞徳の俳風を遵守してあへて新風を出さむともあらず、生面を開かむともあらず、よくあとなしくその師の風體を忘れざりき。これを以て拔群の聲名を馳する事能はざりきと同時になまなかに奇に走りて人の誹議に陥ることもあざりし也。季吟がその師に似たるところのなほ一つはその多能なるにあり。かれは歌人たりしと同時に俳諧師なりき。俳諧師なりきと同時にまた學者なりき。しかれどもその價值のあるところ、歌人にあらずしてむしろ俳諧師にあり。俳諧師にあらずしてむしろ學者にあり。その湖月抄、春曙抄、八代集抄の如きは實に不朽の名著といふべければ也。

以上七俳仙以外にかぞへたりし齋藤徳元、石田未得は江戸に古風の俳風を擴めたるにあづかりて力ありし人也。江戸の俳壇貞徳に風靡するにいたりしは全くこの兩人の力也。この内徳元は俳諧初學抄の著者を以てことにかくれなし。この書は江戸時代に於ける俳論の最古きもの也。未得は俳諧師としてよりもかへりて狂歌

において不朽の名あり。その吾吟我集の如き江戸三百年の狂歌壇に容易に他に發見すること能はざるなるべし。半井卜養もまた狂歌の才あり。その文學者としての價值かへりて俳諧にあらざして狂歌にありといふ事を得べし。さればこの兩人につきては更に狂歌の條下に再説すべし。

二、貞門の俳諧の特質。貞徳その著御傘の序にいへらく、

俳諧はおもしろき事ある時興に乗じていひ出し、人をも喜ばしめ我も樂む道なれば、治まれる世の聲とはこれをいふべき也。

これ實に貞門の俳諧貞徳派の俳諧を名づけて貞門の俳諧といひ、又古風の俳諧ともいふ。の理想なりき。夫たゞ興に乗じてわれ人を樂まするを目的とす。故にいづくまでも座興的なり。夫たゞ座興的也。沈思冥想しづかに人間の弱點、人生のをかしみを捕ふるにあらず。故に自から當意即妙を尙び、言ひかけ縁語の小枝に陥らざるを得ざりし也。かれら門流、人によりて多少の體を異にせりと雖も精神に於ては皆座興的性質を帯びざるはなし。一言にしていへば貞門の俳諧はいとあどけなき。無邪氣なり、しかも全國に影響波及して寛永正保慶安承應明暦の俳壇を獨占せるは當時の社會が未だ高尚なる文學の嗜好なく甚だあどけなく無邪氣なりければ也。

第五章 狂歌

一、狂歌の發達。狂歌は犬平の反響也。怡々たる人心の鏡也。元和偃武の後、昇平うちつゞきて人々やうく鼓腹の樂にふけるにいたりては狂歌のづから起らざるを得ず。されど狂歌必ずしも江戸時代をまちて始めて起りしものにあらず、萬葉の戲咲歌、古今の俳諧歌、軍記物の落首などいつれか狂歌ならざるものぞ。たゞこの涓々たる細流江戸時代に入るに及びて、やうくとほじうき河水となるにいたりし也。

かの細川幽齋の如きも、またあまた狂歌を詠じたりき。烏丸光廣しかり、松永貞徳もまたしかり。ことに貞徳にいたりては狂才いちじるしく、しばく人の頤を解くに足るものあり。鶯を詠じて、

錢かねて直をさすならば鶯のほうほけ經は一ぶ八卷。

などの如き何ぞおもしろくしてしかも品よきや。貞徳百首、貞徳狂歌集などは皆その狂詠をあつめたるもの也。

貞徳につぎて有名なるを京都建仁寺の住僧なる永雄となす。世の人また呼びて

雄長老といふ。著はすところ雄長老百首あり。風體俊爽にして後年天明風の始をなせるものか。

二石田未得と半井ト養。未得は俳人としてよりもその價值むしろ狂歌師としてにあり。その自詠の吟をあつめたるものを吾吟我集といふ。縦横の狂才端倪すべからざるものあり。若菜を詠じて

春さむみ雪の下なるうくひす菜ねは細うしてはをも廣げず。

よし言語より入りたる狂歌とはいへ、如何に自然にして自在なるや。述懐に

まじらへば七重の膝を八重に折りはかまのひたのむづかしの世や。

など最かくれなし。天明時代にいたりて橘洲赤良がこの風體を尙ひしもまことに故ありけりとやいはむ。綠竹園主人が吾吟我集を再刻する時の序に

近體の狂歌諸題をそなへよくよみかなへしかも、句々おもしろきはこの集にすぐるはなし。

とありしはうべなりといふべし。

未得に雁行して當時世に鳴りけるものを半井ト養となす。この人もと醫を業として幕府の御番醫なり。しかれどもかたはら滑稽の才あり。時に臨みて吟詠をほ

しいまゝにす。しかれどもト養の吟詠はその後裔和氣瑞成がいへりしが如く

醫療のあまり人の心を慰ましてその助に據す。これ道を助くるならずや。

などありて、かれは、ある程度まで病客の苦悶をなぐさめんとて狂筆をふるへる也。

これを以てかれが狂歌はおほむね即吟也。をりにふれ時にあたりて管座の興をたすけんためによみたるもの也。あらかじめ題を設け、思を構へ、鍛練苦心を費すが如きはその本領にあらざりし也。左の如きはその一例也、

床のうちにも何やら黒く見えぬるは烏丸殿手跡かあゝ。

ト養狂歌集、ト養狂歌集拾遺はその狂詠をあつめたるもの也。しかれども十中八九は言葉のいひかけもぢり等より入れるものにして意味の滑稽あるものにいたりては甚だ僅少也。吾吟我集と比べて數等を下らざるべからざるは止むを得ざるところなるべし。

三、豊藏坊信海と生白庵行風。時代はうつりて萬治寛文延寶となりぬ。この時にあたりて京都に豊藏坊信海あり、大阪に生白庵行風あり。ともに狂歌師としてかくれなかりき。信海は男山八幡の社僧にして寛永十二年(紀元二千二百九十五年)を以て生れ、元祿元年(紀元二千三百四十九年)五十五歳もて歿したりき。號を玉雲翁とい

ひければこの派の狂歌を玉雲流とよべり。鳩の杖はその狂詠をあつめたるもの也。
 三教一致堂たて、人歌よめとあるに」とありて

三つの教一つの胸におちかねて咽喉につまつた釋李孔かな。
 などよくその風體をあらはせりとやいはむ。

單にいひかけ縁語にのみたよるは信海の本旨にあらざりき。かれはいづくまで和歌の心をもととして滑稽をふくめたり。則風體言語はよし通俗のものをを用ゐるにせよ心は誠情を失はざらむことを力めたるものゝ如し。かれ自らの風體を箔の小袖に繩帶姿とよべり。これ心はまことをこもらせて姿は俗に近きものを採りたるをいへるなるべし。信海この一風を廣めて上方の狂歌壇に雄視せり。故に人は信海を以て狂歌中興の祖となふ。

これと並びたる生白庵行風は大阪の人也。この人自作の狂歌にはさまて勝れたるはあらざりけれと、かつて古よりそのかみに至るまでの狂歌を撰みて古今夷曲集後撰夷曲集、銀葉夷曲集などを著はしたるを以てその名著し。これより以前一二の狂歌の撰集なきにしもあらざりけれど、かときあたりの御手にふれて無上の譽をあげたるにいたりては、これらの書を以て始とす。七種を詠じて、

朝市に賣る七種の中にまづ鶯菜より音をやたつらむ。

とよめるなどその風體の一斑となすべし。

しかれども狂歌師としての行風はその價值甚だとほし。六樹園が「狂歌百人一首」を撰ふにあたりても秀逸なして行風をもらし、奇々羅金鶏も闇雲愚抄に

かくつたなきをのこ故生涯のよみ歌にも、一首として三歎すべきものは見えず、實に下手の横ずきといへるぞ行風が事なるべき。

これ何ぞ必ずしも貶にすぎたりといはんや。これを以て秀いてたる門人なく、その風遂に行はれず元祿にいたりて鯛屋貞柳の出づるまでは狂歌壇や、落葉の威あるにいたれり。

第六章 檀林の俳諧

一檀林の俳諧と西山宗因。貞徳の俳風は品よきに失して滑稽にとぼし。ただに滑稽にとぼしきのみならず、心より入りたる眞の滑稽にいたりては甚だ乏しといはざるべからず。この缺點を觀破し新に旗幟をたてたりしものを西山宗因となす。宗因は本名豊一、慶長十年(紀元二千二百六十五年)を以て肥後に生れぬ。加藤正方に仕へて主人と共に連歌俳諧を修む。さるに一朝主家退轉により豊一暇をたまはりければ京都に來り薙髮して宗因と號しぬ。その花月に吟情をばせ風流の生涯を送るにいたりしはこの時を以て初めとす。後大阪に來りて天滿天神の境地に住し、梅翁とぞ號しける。

宗因京都に出て來りてより貞門の諸子と交りその風體をまなびたり。しかれども宗因は奇才の人決して貞徳の餘睡をねぶりて甘んずる者にあらずりき。ことに貞徳の俳諧の趣味少きを見これを脱して一の新風を建設せり。いはゆる檀林風これ也。

檀林風とはいかなる意味ぞ。宗因の門弟に田代松意なるものあり。松意談林十

百韻と序していふ、

こゝに入九人……鍛冶町といふところへ時々會合して、向後の初心、惡にそまらむ事をかなしみ端々此事をのべて多くまよへるを助くる其中に、この席を我等ごときの俳諧談林とこそ申しけれなど戯るゝよりおこりて皆人談林といひならはす。

これより考ふれば談林とは淵叢などいふと同じく多く會して談ずるところといふ義なるを、佛家に檀林といふ語もあるより、かよはして談林とも檀林ともよびならはすにいたりしなるべし。

宗因が俳風はいかなることを本領となし、か。これを貞門の俳諧とくらべて外形内容ともに異なるところあるを見る。外形においては

頭巾寒うして北に峨々たる青山なし。

などの如く十七音より數多き音數になれる句あることその異なりたることの一也。また、

花に吹く曉風殘念この時也。

などの如く漢語をあまた挿入したる、異りたる點の二也。また

花むしろ一見せばやと存じ候。

などの如く謠曲を加味したるものあること、異りたる點の三也。

更に内容の上より察すれば言ひかけ駄洒落をはなれて心から入れる滑稽を詠ずるにいたりしこと、その異りたるふしの一也。即ち

新春の御慶は古き言葉かな

などの如し。たゞに心の滑稽あるのみならず、大膽なる思ひ切つたる滑稽をよみこめたること、またその異りたる點の二也。則ち、

もちにきゆる氷砂糖か富士の雪。

天も酔へりげにや伊丹の大燈籠。

の如き一例となすことを得む。かく大膽なる滑稽を吐露するところ、甚だ守武宗鑑の風味に似たり。いな宗因は心中たしかに守武宗鑑に私淑したりしや疑なし、ある人に贈りし句に

末しげれ守武流義總本寺。

などいふ句を以てしたるにても察すべし。

されど宗因を以て宗鑑守武の輩とともに滑稽以外何等の詩美をも解しあたはざ

りしものとなすことなけれ。宗因はこれら以外に人生社會につきて、たしかにまじめなる觀察をもなし得たりし也。その

白露や無分別なるおきどころ。

うつりゆく、はやいかのぼり紙のぼり。

など、やがて正風の先驅と見るべきものにあらずや。芭蕉が宗因を評して

先徳多かる中にも宗鑑あり、宗因あり。白炭の忠知あり。上に宗因なくば、われわれの俳諧今以て貞徳老人のよだれをねぶるべし、宗因はこの道の中興也。

とあるもよく宗因がいさをしを知悉せるの言也。

宗因は天和二年(紀元二千三百四十二年)七十三歳を以て遂に身まかりぬ。

二、宗因の門人。生川春明が専ら新意を吟ず。依之門子となる人潮のわくが如しとありける中にて最すぐれたりし者を誰とかなす。いはく井原西鶴、いはく菅谷高政、いはく田代松意、いはく岡西惟中、その他數ふるに違あらず。

この中最すぐれたるは井原西鶴也。寛永十九年(紀元二千三百〇二年)生れて元禄六年(紀元二千三百五十三年)身まかりし五十二年の生涯はさまで長きにあらざりきといへども、あるは俳諧に、あるは小説に縦横に技倆をふるひし文學界の貢獻はまこ

とに多とすべきものあり。その俳風大膽なる點において一層師翁にまされりとやいはむ。

西鶴が大阪における檀林派の領袖たりしが如く菅谷高政は京都における檀林派の牛耳を執り、田代松意は江戸におけるこの派の首領なりき。高政議論に長じ他流を攻撃してあますところなし。松意一意檀林風の擴張につとむ。江戸にこの風が行はるゝにいたりしは誠に松意の力多きに居りといはざるべからず。

かくの如くにして檀林の俳諧は一時天下を風靡したりきといへどもしかも古風の俳諧が流行なりし如くにまた流行なりき。流行は更に來るべき流行をまつ。茲において檀林の俳諧はやう／＼に衰へゆきて他の新風は更に世人の渴を醫すべくなりぬ。何ぞや次の時期なる元祿時代に於て起り來りし正風の俳諧これ也。

第七章 歌舞伎と淨瑠璃

一、歌舞伎の起源。すべて文學は人間心中の三つのはたらきよりおこり來る。三つのはたらきとは何ぞやといふに人間天賦の性として吾人が目睹したる外界の事物を物語らむとするはたらきその一也。また吾人が胸中の思想感情をあらはさんとするはたらきその二也。人間もしくは人生といふものに付、それをあらはさんとするはたらきその三也。これらのうち最早く生ずるはわが外界の事物を物語らむとするはたらき也。このはたらきより成る文學、故に最早く世にあらはる。これ則ち叙事詩也。吾人は次に内界の事がら則ち思想感情をあらはさんとするのはたらきを生ず。このはたらきになれる文學、故に次におこり來る。これを叙情詩となす。かく人間が内界外界の事につきてそれをあらはすの働をもつにいたりてよりは自然の勢として次には或感情思想をいだきて、この外界に行動する人間もしくは他の事物につきてそれをあらはさんとするのはたらきおこるべし。この働によりてなれる文學、こゝにおいてかあらはるゝいはゆる戯曲これ也。

吾人は奈良時代においてすでに古事記てふ叙事詩を得、平安朝時代において八代

集といふ叙情詩を得たり。今この江戸時代に入りて順序としてこの戯曲を得むとせる也。而してまづいふべきは歌舞伎の起源也。

慶長年中出雲國のお國といふもの京都に來りて五條の橋づめもしくは北野の境内などにおいて舞臺をきづき踊を興行す。人よびて歌舞伎といふ、また後世男子がこれにならへるより區別して女歌舞伎ともいふ。人々めづらしがりて、ためにこの風大に行はれて江戸にも傳播するにいたれり。しかれども人々これによりて遊蕩の風をかもすの恐ありしかば江戸まづこれを禁じ京都においてもつゞきてこれを禁じたりき。さはいへ、おこりはじめし演劇の氣運はいかんど挫折すべき京都にありては若衆歌舞伎の名のもとに再びあらはれきたりぬ。これ女子にかはりて男子が舞蹈を演じたりし也。これはた風俗壞亂のおそれありければ官ふたゞひこれを禁じたりしを更に承應年中にいたり、その道のもの、哀訴により物眞似狂言盡ものまねの名のもとにその興行をゆるしたりき。これいたく行はれ、京都より大阪におよびぬ。上方の劇場はけだしこれに基したりといふべし。

これよりさき江戸にては寛永元年(紀元二千二百八十四年)猿若勘三郎といふもの官の免許を得て京都中橋に猿若狂言盡といふものを始めて芝居を行へり。後三た

び移轉して堺町にうつりぬ。更に寛永十一年(二千二百九十四年)村山又三郎といふもの許を得て堺町に芝居を開く。つゞきて萬治三年(紀元二千三百二十年)森田太郎兵衛といふものまた公許を得て木挽町に芝居を開く。これいはゆる後世江戸芝居三座の基にして中村、市村、森田座として近代まで連綿としてつゞき來れるもの也。

これらの芝居は能を一變してやゝ時様になへたるものにて、鳴物の如きも始めは三絃もなく、太鼓もなく、たゞ小唄に合せて舞ふのみなりけるを市村座率先して三絃をまじへ、右近源左衛門來りて、美々しき衣裳をかざり又女形をさへ、よそほふこと始むるにいたりたりき。つゞきて續狂言あり。引幕あり。道具立あり、いはゆる大芝居の名稱も出て來るにいたりきと知るべし。

二、淨瑠璃の發達。かく一方において歌舞伎の源をおこすあり。他方においてかねて起りをれる淨瑠璃ますくその發達をなし來りぬ。

そもく淨瑠璃とは何ぞやといふにこは淨瑠璃節を略せるにて室町時代の末頃よりすてに行はれけるものなるが、かの淨瑠璃御前が三河國矢矧のやどにありける時、牛若丸とかたらひしことをしたる物語世に十二段といふものを語れる曲節の名なる也。この淨瑠璃はやう琵琶法師などの語りそめたるを永祿の頃三絃の琉

球より渡來せるあり、これと淨瑠璃との調和をはからんとて小野お通といふもの種
種工夫したる結果遂に今日の淨瑠璃節なるものの基を開きぬ。

この技非常なる速力をもて世に流行しそのわざに通達せるものあまた世にあら
はるゝにいたりしが、ことに慶長の頃澤住檢校といふ盲人あり。淨瑠璃の名手にし
て從來の淨瑠璃御前の物語以外に他のなにくれの興味ある物語をかたりぬ。こゝ
においてか淨瑠璃御前の物語にあらずとも、この曲節を用ゐて歌ひたるものは何の
物語たるにか、はらず、皆これをよぶに淨瑠璃を以てするにいたりぬ。

澤住檢校の門人に目貫屋長三郎といふものあり。この人淨瑠璃ぶしに合せて人
形を操ることを始む。まことに新機軸を開きたるものにして、後、後陽成天皇の教覽
にそなふるにいたりといふを見てもいかに世に愛好せられしかを知るに足るべ
し。

淨瑠璃に人形を使ひたりといふ事は作中の活動を耳に訴へずして目に訴ふるに
いたらしめしものにして、則淨瑠璃に演劇的の性質をおびさするにいたりし事とし
て淨瑠璃の發達上忘るべからざる事實也。

京都の文明は當時さかんに江戸に注入せられたり。淨瑠璃ひとりいかにその風

潮にもれんや。果せるかな。泉州堺の人薩摩淨雲といふものあり、はじめ澤住檢校
にしたがひて淨瑠璃をまなび一家をなすに及びて元和の末江戸に下りぬ。江戸に
淨瑠璃の行はるゝにいたりしは實にこの人を以て始とす。

淨雲の淨瑠璃に貢獻したる一事は段淨瑠璃を始めたりといふ事にあり。そも従
來の淨瑠璃はたゞ一節づゝを語るにすぎざるいはゆる端淨瑠璃といふものなりき。
よし十二段より出來たる淨瑠璃御前の物語を語るとしても全部一時に語るにあら
ずしてただその中の一段のみを語りし也。さるに淨雲にいたりて一篇を六段ばか
りに分ち、一時にこれをつゞけて語ること始むるにいたりぬ。こゝに於いてか首
尾ととのひ前後相應じ一部の劇として見ることを得る淨瑠璃を見るにいたりし也。
されば淨瑠璃はいたく上下に流はれて諸大名さへこれを樂むもの甚た多きにいた
りぬとぞ。

淨雲の門弟にすぐれたりしもの四人あり。一は源太夫、二は丹波太夫、三は丹後太
夫、四は長門太夫也。これを淨雲門の四天王といひぬとか。中につき丹波太夫最淨
雲が秀技を傳へて情聲を凌けり。櫻井和泉太夫といひしが後受領して丹波縁とい
へり。

そもく、浄雲のがたりぶりは壯快にして豪放なりき。戦國の餘風を受けたる當時、殊に三河武士の淵藪たる江戸において浄瑠璃の樂風が上方の嫺雅婉美を離れてををしきいさましき傾向をもてりとはおのづからの結果なるべし。ことに丹波太夫にいたりては浄雲が樂風の精粹をつたへて快活豪宕なるを以てその特色とせり。浄雲の一門が語りける浄瑠璃あまたありけるうちに最世の歡迎を受けたるはいはゆる金平物語也。金平物語とは阪田金時の子金平の一代をしるしたるもの也。當時江戸に岡清兵衛といふものあり。勇力無双なる金平一代の奇事壯行をつづりてこの物語を作りぬ。あるは金平法問論あり、あるは金平天狗問答あり、あるは金平千人切あり、あるは金平大酒論あり。皆金平が一生の出來ごとをしるしたるものこれを總稱して金平物語とはいへる也。後世金平本といふもの則これ也。殺伐の世にその殺伐なる浄瑠璃を以てす、群衆鼠木戸を歴し、満場立錐の地なかりきといふもげにしかなりけむ。

江戸に於ける浄瑠璃のおぼよそはかくの如し。吾人をして更に眼を轉じて上方の浄瑠璃を一瞥せしめよ。

前に浄雲の四天王にかてまへられたる源太夫、姓を虎屋といひけるが寛文の頃京

都にのぼりゆきて操芝居を興行しぬ。この門に一人の秀才あり。井上播磨縁といふ。この人出藍のほまれ高く、みづから大阪にゆきて種々の新曲を工夫して操をおこならぬ。大阪に浄瑠璃の盛になりけるもの實に播磨の功によれりといはざるべからず。勇將のもと弱卒なし。播磨の流に竹本義太夫あり。獨特の妙技をよるひて遂に後世のいはゆる義太夫ぶしなるものをおこしぬ。かの近松門左衛門が天稟の靈筆をよるひしも更にこの義太夫のためにしたりし也。しかれども吾人はこゝにしばらく浄瑠璃につきて擱筆すべし。これ義太夫の生涯は元祿に屬せるものなれば也。

第八章 小説

一小説界の大勢。元和偃武の後次第に大平の春風に和らぎきたりし民心はその無聊をなぐさめその徒然をたのしみますべき娛樂的文學の出でんことを渴望しぬ。これに合せて上には文教獎勵のさかんなるあり。したがひて文學を知り翰墨にたづさはるものこの民衆の需用に供給すべき才あるもの次第に多くなるにいたりぬ。小説もこらざらむとするもいづくんぞ得んや。

小説の性質は時代の性質に相應するもの也。よし大平の氣風やうく天下に瀰漫するにいたりきとはいへ、なほ人々復讐にさわざ、勇俠をたふとみ闘争これ事とせし當時の時代は決して人情の機微を捕へたる人情小説を味ふの時代にあらざりき。これを以て當時の小説は平安時代におこりたりし人情小説の徑路をふむこと能はずして半ば以上、傳奇的傾向をたもたざるべからざるにいたれり。あるは當時を教化するを目的とせる教訓小説、あるは幼稚なる民心にかなふ滑稽小説、あるは人格の描寫人情の琴線などをかへりみざる短篇小説若くは童話的小説など一言して評すれば小説としては價值劣等なる程度ひくき小説まづ世にあらはるゝにいたりし也。

二軍記小説。これら小説を大觀するにまづそのいちじるしき種類の一にかぞへらるゝは軍記小説也。織豊時代より徳川時代にかゝりては最歴史上の花やかなる時代也。その間幾多興亡盛衰のあとを去ること遠からざりし當時の武士にはいかに多大の感興を惹起したりしぞや。こゝにおいてかこれらの史實を材料とせる歴史的物語則軍記小説まづ生るゝに至れり。小瀬甫庵か大岡記、三浦淨心が北條五代記などことにそのいちじるしきものとす。甫庵は關白秀次につかへたる人、後前田侯の聘に應じて祿二百石をたまはりぬとぞ。天文二十三年(紀元二千二百四十四年)生れて、寛永七年(紀元二千二百九十年)七十七歳もて歿したる人也。淨心は北條家の臣也。永祿十一年(紀元二千二百二十九年)生れて、正保三年(紀元二千三百〇六年)七十九歳を以て身まかりたりき。

三教訓小説。第二にかぞふべきは教訓小説也。室町時代において佛教が謠曲によりて民心を教化せんとしたりしが如くにこの時代においては佛教は小説によりて氣風を醇化せんとしぬ。これを以て此教訓小説といふも多くは佛の功德をとぎ、縁起を説き、因果應報の理をのべたる也。一例をいはば鈴木正三の因果物語、淺井了

意の三井寺物語などその最なるもの也。鈴木正三は天正十四年(紀元二千二百四十六年)生れ、明暦元年(紀元二千三百十五年)歿しぬ。歳七十。淺井了意は寛永十七年(紀元二千三百年)を以て生れ、寶永六年(紀元一千二百六十九年)死去せり。時に歳七十也。

四怪談小説。人智の發達せざる世は人おのづから怪力亂神を語らざるべからず。况んや戰國殺戮の後をうけて鬼哭啾々を目撃したること遠からざりし當時の社會は自然に幽魂精靈を畏敬すると深かりき。これに乗じておこりたるを怪談小説となす。淺井了意が御伽婢子の如きは最傑出したるもの也。こは支那の剪燈新話を翻案したるものなりしが當世の嗜好にかなひていたく行はれぬ。ある人の新御伽婢子の出てたるも淺井了意に倣へる也。

五、少年文學と滑稽小説。怪談小説とならびて少年文學あり。からく山猿蟹合戦、鼠の嫁入などその一例也。これらの童話は當時はじめておこりたるものにあらず、すでに室町時代に製作せられけるものなりといへども、この時にいたりかのエソツフ物語などの翻譯せられ、志とともに復活し來りて世にもはやさるゝにいたし也。兵馬の間に馳駢せし當年の三河武士、その心のあどけなさは小兒と稱ぶとこそななければ也。

少年文學とともに最幼稚なる社會の好に投じやすきものは滑稽小説なりき。涙をかわかすには笑を以てせざるべからず、戰亂の世の結果は涙也。大平の時の飾りは笑ならざるべからず。滑稽物いと多かりし中に最かくれなきを安樂庵策傳の醒醉笑となす。後世江戸時代滑稽作者の根據となりしもの甚だ多かるが如し。百出の諧謔人をして捧腹絶倒せしむるものしばしばあり。策傳氏を平林といふ。天文廿三年(紀元二千二百十四年)を以て生れ、寛永十九年(紀元二千三百〇二年)年八十九もて歿したり人也。

六、假名草子。主として假名を以てかきつづりたる小説なるより名づけて假名草子とはいふ也。人心の教化には讀書を第一とす。志かも學識卑陋なる當時の民衆にいかでか高尚にして難解の書籍を強ふべき。こゝにおいてか、そのかみの操觚者流が世の知識を啓發せんがために、教訓となるべき漢書、和書を翻案し、あるはよみ易く逐字的にかきあらためたるものを製作せり。言語の平易なるは勿論文字までも最平易をたふとみ、主として假名を以てつづり出せる也。

以上かゝり來れる小説中最研究の價值あるはこの假名草子となす。その作者にも有名なるもの少なからず、その二三を云はば一に如備子あり。本名を湯村式部と

いふ。もと武士なりけれど浪々の身となりてより剃髪して文筆にかくれたるが如し。その著はすところ可笑記あり。短篇なる話説をあつめたる事は大和物語宇治拾遺の如く、きはめて俚耳に入りやすき筆を以ておのが見聞の物語をつゞりなせり。あるは主君が臣下を虚待せしこと、あるは武士が覺悟のたらざりしことなど多く世を諷諫するにたるものをあつめたり。毎篇むかしさる人のいひけるはと冠したれど實は自個の言を古人に託したる也。

この書いたく時好にかなひ世に行はれたるは、そのしばく板を重ねけるを以ても察すべく、またこの風體をまぬるもの後にあまたあらはれけるにても察すべし。如鶴子は江戸時代假名草子の祖といふべし。まかれどもその傳を詳にせず、たゞ可笑記の末に寛永十三年とあるより察すればその頃主としてさかえける人なるべきか。

次に鈴木正三あり。この人は教訓小説の作者としてすでに擧げたり。されど假名草子の作者としての方ひときは價值重きが如し。正三氏は穂積天正七年(紀元二千二百三十九年)を以て生れぬ。代々弓箭の家に生れ、身づからも徳川家康につかへて武功をたてたれど、はやく佛に歸して因果の理を觀じたりしかば意を決して仕を辭し、剃髪してかたはら文學に身を委したり。三河國にありて久しく行ひすまじりしが後江戸に出て來りて淺草に草庵を結びぬ。明暦元年(紀元二千二百十五年)身まかりぬ。年七十七歳也。その著書あまたありけるうちにて假名草子としてことに有名なるは二人比丘尼也。文章流暢とところく和歌などまじへや、雅文體にちかきところ多し。二人の比丘尼を拉し來りて人生の如露亦如電の意をものがたらしめたる也。

三には山岡元隣あり。商賈の家に生れけれどつとに身を學業につとめぬ。俳諧國學ともに指をそめて、かねて醫をもまなぶ。これを以て中古文學を註解せる著書なども二三あり。まかれども最この人を傳ふべきはその假名草子なるべきか。そのうちかくれなきものに誰が身の上あり、小さかづきあり専ら近世の出來事をおつめ、あるは諷刺の意あるあり、あるは教誨の意あるあり、人をも戒め自らをもかへりみんとの意より出てたる作なり。寛文十二年(紀元二千三百三十二年)四十二歳もて身まかりぬ。

四にかぞふべきは淺井了意也。この人すでに教訓小説の作者として前に出したれど本領はこの假名草子にありしが如し。この人その傳紀を詳にせず、たゞ諸國を

流浪してあまねく人情風俗を察したりしはその著東海道名所記などにも知られり。元祿四年(紀元二千三百五十一年)身まかりき。

了意の著はすところ狗張子あり、本朝女鑑あり、大和二十四年孝あり、新語園あり、また可笑記評判あり、東海道名所記あり。ともに平易の文致時に人の頤を解くものあり。假名草子作者中の自眉たるにそむかずとやいふべき。

小説の種類につきてかく分類せりといへとも假名草子にして教訓小説と見るべきものあり。童話にしてまた假名草子と見るべきものもあり、その間の區別明らかならざるものありといへとも、たゞその傾向多きにつきて、その方に類屬せしめたるのみ。

江戸時代第二期 元祿時代

第九章 當時の一般

一文學の保護者。元祿時代とは前にもいひしが如く元祿の元年(紀元二千三百四十八年)より明和六年(紀元二千四百二十九年)に及ぶまで約八十年の間をよくみ將軍を以ていへば五代綱吉の後半より十代家治の前半にいたる。そのうち殊に元祿享保のころにあたりて奎運日に盛なりければこゝに名つけて元祿時代とはいへりし也。

もし江戸文學が日本文學の精粹といふべくんば元祿文學はまた江戸文學の精粹なりといふを得べし。あはれ當年の武藏野見る目あやなる八千草の姿をしてさながら文學の上にもあらはさしめたるもの、いふまでもなく時代の太平のあづかりて力ありといへども又文學保護者の力多きに居らずといふべからず。

これら文學保護者のうち最忘るべからざるは第一に五代綱吉也。第二に八代吉宗也。綱吉將軍が諸侯をあつめて身づから經籍を講じ、あるは弘文院に臨みて釋奠の禮を行ひ、林春常を束髮せしめて大學頭となしけるが如き皆特筆大書を價すべき

ことならずや。吉宗にいたりては在職三十年の間武道の奨励とともにふかく文備にも心を止めぬ。而して吉宗の奨励はたゞに漢學に止らざりき。あるは國學にあるは有職故實にあるは蘭學にすべての方面にわたりてその保護を怠らざりき。これ吾人が最吉宗に多とするとするところ也。

しかれども直接にわが文學の興隆につくしたりしは實に徳川光圀を以て初めとす。光圀が學問に熱心なる、匹夫下河邊長流を辭を卑うして招きたり。また貧僧契沖をうやくしく優遇せり。思へば吉田令世が

近き世に皇國まなびの盛になれるは皆此君の恩頼なり。

とあるも証言にあらずとぞいふべき。

二、漢學興隆と國學復興。漢學の興隆せしと同時にこれに關聯して國學の隆盛にあもむきしも忘るべからざる事實也。則ちその反動として國學の研究のさかんなるに赴きし事となす。荷田春滿が天下の人をぞりて孔孟のほか他を顧るものなきを見て

しきしまの大和にはあらぬ唐鳥の跡を見るのみ人の道かは。

とさげびしもこの反動の叫聲にはあらざりしか。

儒教の本旨は仁義忠孝にあれども儒を尊び支那をあがむるのあまり、當時の漢學者は日本を卑むにいたれり。日本の事物をあしざまに考ふるにいたれり。天皇を何王とするし、日本語を侏儻缺舌と稱することはしばしば、儒者の文中に用ゐられたるもの也。こゝにおいてかこの大義名分を直すの説にはかはその氣焔をますにいたりぬ。大義を重んじ名分を正うするが故に我を先にして彼を後にせざるべからず。國學を先にして斯學を復古せざるべからず、少くとも漢學とならびて國學をおこさざるべからずといふ主義はこの頃よりさかんに人々の頭腦に深く印せらるゝにいたれり。

かくの如く漢學の尊卑は種々の點において國學の奮起をうながし、さらぬだに光圀契沖などによりて、あこしそめられし氣運に合して、こゝに雲蒸龍騰の壯觀を呈するにいたりし也。

三、唐詩と禪。元祿の文學に影響せしもの、あまたありといへども、ことに注意すべきは唐詩と禪と也。そも徂徠の學一世を風靡してよりその仰ぎける李于麟の名わが文壇にとゞろき、從ひてその選にかゝる唐詩選は當時文壇の最大の愛讀書となりぬ。江戸時代圖書の賣高の多かりしもの一九が膝栗毛に加へてこの唐詩選なるを

見るにも、おのづから知らるゝならずや。

更に思ふに當時は禪宗の流行せる時代なりき。澤庵、白隱がこの道に深かりしはいはずもあれ、隱元、心越などのおのゝ宗派を開きしもまたこの時代にあらずや。當年名ある俳諧家などの、必ずや參禪せざるものなかりしを見てもその流行のおほよそは知るべき也。

四、この時期の特質。元祿時代を以て元祿以前の時代と比するに異りたるは文學の二の點あり。一には文學にやう／＼分業のおこなはるゝにいたりしこと也。二に文學の中心が江戸にうつるにいたりきといふこと也。

當時いまだ俳諧家にして小説をつくるものあり。漢學家にして國學の嗜みありしもの決して少なかりけれどその兼業の甚しきこと元祿以前の如きは全くあることなし。文學の各種が精巧の域にすゝむにいたりしはこの故也。

第十章 國學復興

一、契沖と茂睡。國學復興の活舞臺の序幕にあらはれし大立物はいふまでもなく僧契沖と戸田茂睡となりき。

契沖は下川元善の子にして寛永十七年(紀元二千三百年)を以て生れぬ。少年にして佛に歸し、造詣群に超ゆ。徳望また高かりければその師のあとをうけて攝津妙法寺の住職となりぬ。後元祿の始大阪東高津にかくれて圓珠庵を結びぬ。かれが研究の生涯は實にこの時より初りける也。

あらはすところ厚顔抄、勢語臆斷、和字正濫抄、古今餘材抄、源注拾遺など皆かくれなし。萬葉代正記これらの中にありていふまでもなく、拔群の著にして契沖が渾身みな學なりしを證するに足るもの也。かくて元祿十四年(紀元二千三百六十一年)遂に遷化したりき。年六十二歳也。

歌人としての契沖は註釋者としての契沖におよはざること勿論なり。しかれども、かれとへども、決して當年堂上家の無味乾燥なる風體の下に甘んずるものにあらずき。その歌集なる漫吟集をよむに契沖はその眞朋長流と同じく木下長疇子の

崇拜者なりき。したがつて契沖が歌の理想もまた草根集もしくは玉葉集風雅集になどにありけるものゝ如し。これをその歌に徴し見よ。

もしほやく難波の浦の八重かすみ一重はあまのゑはざなりけり。

野べやとき袖やおそきと比ふれば露も涙もあなじ夕ぐれ。

誰か新清流暢の特質あるを認めざらむ。しかれども清新の極纖細におち入りて情味なきにいたりいたづらに縁語いひかけをのみ弄して潑刺の想なきことたしかにその一缺點なり。村田春海が契沖を評して

難波の契沖法師は世にすぐれたる才ありける人にて古の歌を解き得る事の正しきすぢはこそ始めとはすめれど歌よむ事の上まては心及ばすやありけむ今漫吟集の歌どもを見るに細に巧なる歌は見ゆれど古の高くのとかなる姿をまねびいてたりとおぼゆるふしは見えず。

とあるはうべなりといふべし。

契沖が萬葉集を研究しながら萬葉集の詩美を感得せざりしは未だ十分歌の天分なかりしことを證するに似たり。然れども従來の堂上家眼中たゞ三十一音あるを知りて他の詩形あるを忘れたりし時に、ひとり萬葉の長歌を再興し、かの三百十三句

の長篇無常歌をつゞけたる如きはまことに驚くに堪へたりといふべし。この點のみは契沖はたしかに眞淵一流に先鞭を着けたるものといふべからずや。

契沖と並べていふべきは戸田茂睡也。茂睡は寛永十二年(紀元二千二百九十五年)を以て生る。性恬淡名利に心をとめず。世を遁れて一庵を結びあるは梨のものともしもとめぬ橋とも號す。皆其居所によりて名けたる也。ある時よめる歌に

ちりの世と思ふ心のつもりては世のかくれ家の山となるらむ。

とこの歌世にきこえて人よびてかくれ家の茂助といふ。

元祿五年(紀元二千三百五十二年)時人の歌をあつめたる和歌鳥の迹出て元祿十一年(紀元二千三百五十九年)かくれなき梨本集出てぬ。而してその身まかりけるは寶永三年(紀元二千三百六十六年)七十二歳の時なりき。

そもく茂睡が一身の心血をそそぎたるものを梨本集となす。この書堂上家の頑陋固執なる僻見を説破して痛切きはまりなし。而してその論じたりしは主として制詞の弊にあり。茂睡いはく

いづれの頃よりか歌の詞に制といふことをかき出して五でんの詞主ある詞よむまじき詞等といひて詞に多くの關をすゑて人のおもむきかたきやうに道をせ

まくするは以てのほかの邪道歌の零廢すべき端かと思ふといひて一々例をあげて、これら公卿歌人の陋説愚論を打破したり。

當時二條家六條家の説は九鼎大呂よりも重く、もし歌道に於て定家を難ぜん輩は冥加もあるべからず罰を蒙るべきこと也とまでまじめに標榜せられたりし當時にありてかくまで思ひきりて打つて出てたる獻身的行動の勇氣はまことに感ずるにあまりありといふべし。

茂睡の歌論は消極的にして積極的にあらず。從來の法則は打破したれども新に法則を定めたるにあらず。したがひて歌學上における價值さまで大なりといふ事を得ずといへども、これによりて歌界の五里霧中にまよへる人々に一道の光明をあたへ、以て革新の曙光をもらしたる功は決して忘るべきにあらざる也。

二、春滿と眞淵。契沖茂睡がこの改革に於ける先陣の奮戦は更につづくべき勇者を要しぬ。この援軍の將としてあらはれけるものを荷田春滿と賀茂眞淵となす。

春滿は氏を羽倉といふ。寛文九年(紀元二千三百二十九年)を以て生れぬ。幼にして聰敏歌をよくす。長ずるにおよびて歌文國史律令の書ことごとく涉獵せざるはなし。聲名一代に高く諸侯を始めとして將軍に至るまでこれを聘するもの多し。

そもく春滿が精神は神ながらの我國の大道をさきはめて以て國體を發揮せんとするにありき。その手段として皇學創啓を將軍にたてまつり、皇國の學校を京都に建立せんとしたりしが未だその志を達するに及ばずして元文元年(紀元二千三百九十六年)遂に身まかりぬ。年六十有八也。春滿の著書今日に傳はれるもの甚だ少し。その歌をあつめたるを春葉集といふ。

歌人としての春滿はひたすら後世ぶりの模倣にして未だ三代集の渾厚なく萬葉の高古なし。

春にけさ吹くも音せぬ谷風にこほりとけゆく水の白波。

宛然三玉集の口吻にあらずや。しかも春滿が詠歌のことにつきて一度も公卿の門を叩きしとなかりし事と當時の歌人の優柔にながるゝ事を慨して一生戀歌を詠ぜざりきといふ事とは明にその俊邁にして硬骨なりしを證するに足る。たゞ十分に古歌を味ふにいとまあらずして歿せしかばその風體未だ綺麗婉美の菴を脱せざりし也。

かれはかく詠歌に於ても活眼を開くあたはざりきと同じくまた國體の發揮につきても事業のなかばにして歿したりき。頑陋の迷霧未だ全く一掃し終るに及ばず

して泉下の客となりぬ。この時にあたりて一道の光明四方を照耀し、天色水光つゆまかふところなきにいたらしめしものを賀茂真淵となす。

真淵は近江の人元祿十年(紀元二千三百五十七年)を以て生る。一度出て、逆旅の主人となりけれど、志をおこして身を學問に投じ、享保十九年(紀元二千三百九十三年)京都に出てきたりて、荷田春滿の教をうけぬ。然れども四年の後春滿身まかりければ、元文三年(紀元二千三百九十九年)江戸に下りぬ。蓋し京師は行樂の地なれども、英譽の地にあらず、真淵が大に爲すあらむとするは、當時江戸を以て他にあらざればなるべし。延享三年(紀元二千四百〇六年)田安宗武にめされて、其一家中の師範となりぬ。これ真淵の一身にとりて忘るべからざる紀念なり、これこの保護者のために、真淵はうしろやすくその研究に心を専にするを得るにいたりければ也。

かくて寶曆七年(紀元二千四百十七年)冠辭考を著しけるを始めとして、あまたの著述ありけるが、明和五年(紀元二千四百二十八年)祝詞考を著しけるを終として、明和六年(紀元二千四百二十九年)遂に六十三歳もて身まかりたりき。

真淵の本旨はその師春滿の志をうけて、日本固有の大道を發揮するにありき。されどわが古への大道を發揮するには、わが古の人情風俗を知悉せざるべからず、わが

古の人情風俗を知悉するには、古の書籍に精通せざるべからず。こゝにおいて、真淵は大道を發揮する手段として、わが古書の研究に着手せり。古書のうちにも、最人情風俗のあらはれたるは、萬葉集也。真淵が萬葉集を研究し、その釋義につとめ、風體をまねびたるは、まことにこの故也。しかれども、惜いかな、真淵はこの手段たる古書の研究の業をなすに止りて、大道の發揮を成就せずして、歿したりき。されば、今日その著作のあとより考ふれば、なほかれを以て普通の歌人の列に位せしめざるを得ざる也。

真淵の歌をあつめたるもの、これを賀茂翁家集といふ。その風體は、そもいかなるかといふに、時期によりて、おのづから三段にわかれたるが如し。第一期はその師春滿をまねて、未だ後の世の手ぶりを免れざりしもの、第二期は春滿の死後、おのれと古歌の渾厚にして、氣魄ある風體を發見し、ひたすらこの趣を得んとつとめたるもの、第三期は晩年ますます、高古の歌風に酔ひ、あまりに險奇なる歌風に傾きたるもの也。

この三期につきて、最真淵が價值を知るに足るべきは、第二期の歌也。中古時代の艶麗をすて、萬葉集の高古を取り、崇高に壯大に、詩才縦横に煥發して、天馬空をゆくが如し。しかのみならず、これに六歌仙時代の典雅清麗を加味したれば、華あり實あ

り殆ど間然するところなき秀逸多し。

見渡せば天のかく山うねび山あらそひたてる春かすみかな。
信濃なる菅のあら野をとぶ鷺のつばさもたわに吹く嵐かな。

など、以て見るべきにあらずや。

真淵が歌壇における他の功績は長歌の生面を開きたるにあり。契沖長歌を詠せざりしにあらず。しかれども真淵にいたりて新生面を開きたり。又萬葉集の形式を傳ふとともにその精神をも復活せしめたり。真淵の後春海出て千蔭出て短歌に於いては真淵以外に新幟をたてけるものありきといへども長歌に於いては一人としてその右に出づるものあらざりき。その秀拔なる技倆のほど以て證すべき也。

かくの如く實行に於いて真淵が當時の和歌壇に大なる貢獻をなしけると同時に言論に於いて宿弊の一洗新風の鼓吹につとめたる他の一人あり。荷田滿春の子荷田在滿則これ也。

在滿かつてその主田安宗武の命によりて國歌八論を撰ぶ。一に歌源論二に詠歌論三に擇詞論四に避詞論五に正過論六に官家論七に古學論八に準則論そのうち正鶴を失したるものなきにあらずといへども、到るところ精銳の筆鋒、歌壇の宿弊を説

破し、當年歌人の姑息を譏り、ことに堂上家の本據に突撃して洵に破竹の勢あり。

歌は堂上のよむものにして地下の知るべからざること、稱す。たとひ地下堂上といふも差別往古よりあることにせよ、歌に於いて祖とし宗とし仰ぐところの人、磨赤人をいかばりの人とやは思ふ……兩人ともに賤官もしくは卑位の人也。

また古今集の撰者にも甲斐目凡河内躬恒、右近衛府生忠岑あり。並に卑賤の人ならすや。何を以てか歌を地下の知るものにあらずといふか。

これ歌の公卿の掌中に歸して布衣の隊を容るゝ能はざるを慨せる也。一篇これを貫徹するに皆この氣焰を以てす。議論風生、まことに快心の筆といふべし。

在滿に歌なし。しかも國歌八論の一篇よくかれが名を傳ふるに足る。歌のあらす田鋤さかへし、來るべき天明時代において爛漫として花にさかせし培養の功績は契沖茂睡とならびて上下しがたしといふべき也。在滿は寶永三年(紀元二千三百六十六年)生れ寶曆元年(紀元二千四百十一年)身まかりぬ。年僅に四十六。

國學また古學ともよぶ。日本古代の典籍を研究することをいふ。契沖と茂睡とは始めより國體の發揮を以て自ら任じたるにあらず、従て未だ意識的に國學の復興といふことを努めたるにあらず。たゞその古代の歌學の攻究が自然に國學の復興

にさきがけをなしたるのみ。春滿と眞淵とにいたりては眞に古代の國體を美とし、その國體の真相を今日にあらはさんがために古代の典籍に心を深めたる也。世の人國學の三大人をかそふるに常に春滿を頭におき契沖茂睡などを加へざるはこの故也。

三當時の歌人。契沖眞淵時代にありて、この他に有名なる歌人甚だ多し。その少しをいはくはく有賀長伯、いはく井上通子、いはく祇園梶子、いはく僧似雲、いはく武者小路實蔭、いはく中院通躬、いはく松井幸隆、これらその主なるもの也。

第十一章 正風の俳諧

一松尾芭蕉。芭蕉は伊賀の人松尾宗行の子にして正保元年(紀元二千三百〇四年)を以て生れぬ。上野城代藤堂良精の子良忠につかへけるが良忠風雅の志深かりければ、共に季吟に従ひて和歌俳諧をまなぶ。號を蟬吟とよべり。さるに寛文六年(紀元二千三百二十六年)良忠死去したりければ世をはかなみて仕を致し翌年京都に出てきたりて全く吟詠の道に一身をゆたねたり。後また江戸に出て來りて深川に住す。家に芭蕉の樹ありけるより人呼びて芭蕉庵とよび自らもしか號しぬ。

芭蕉季吟にまなびて古風の俳諧をもてあそびけれど當時江戸に行はれたる談林風を見てやうくその流を追ひぬ。しかれともその輕薄にして誠實の風なきを看破して更に新風を創めんとしぬ。新風とは何ぞや。いはくまじめなる風體也。駄洒落を用ゐるにあらずまた大膽なる滑稽談諺をなすにあらずして誠實なる心を以て天然を觀察することをいふ。後世この風をなづけて正風また發音の同じきより蕉風といふ。延寶九年(紀元二千三百四十一年)枯枝に鳥のとまりけるかな秋の暮の吟をなしたるは實に談林風より正風にうつる過渡時代をあらはせるもの也。而し

て貞享三年(紀元二千三百四十六年)古池に蛙とびこむ水の音にいたりては全く正風にかはりたるを示すものといふべし。

芭蕉の生涯は行脚の生涯なりき。由來行脚と俳諧とはその因縁深かりきといへとも芭蕉にいたりては更にその關係を一層密接ならしめたり。その貞享四年(紀元二千三百四十七年)鹿島にあそびけるを始めとしてあるは芳野に、あるは信濃に、あるは奥州に、あるは京都に。席の暖ること誠に少なかりき。而して元祿七年(紀元二千三百五十四年)京都より大阪に出てけるが遂に同年末病にかゝりて旅寓にして歿したきりき。年五十一歳なりき。

前にもいへる如く芭蕉は始めよりして正風を唱導したりしものにあらず、はじめは古風と談林とを模倣し。次にはこの舊風より正風にうつりかからむとし、次には純然たる正風となれり。而してその最價值あるは實に第三期の俳諧とす。

芭蕉の不朽なるは正風の開祖たるに由る。正風なければ芭蕉なき也。そもそも正風とはいかなるものぞ。

芭蕉いふ俳諧に千載不易といふことあり。一時流行といふことありと。思ふに千載不易とは詩の精神の誠實なるべきをいへるならぬ。誠實の精神は實に千載に

易はらざるものなれば也。一時流行とは風體の時にしたがひて推移すべきをいふなるべし。詩の風體言語はそのをりくのすがたあるべければ也。げに詩歌をして永く世に埋れざらしめんとば頓才利口を捨てし思ひのまゝのまことを吐露せざるべからず。これを以て貞室は鶉船を見て、

あもしろうさらしきばくる鶉船かな。

といへるを芭蕉は同じものを見て、

あもしろうてやがて悲しき鶉船かな。

といへり。芭蕉が精神は實にこゝにあり。吾人はうはの空に自然を見ずしてまじめにこれを觀察せざるべからず。俳諧をして一時のもてあそびにせしめずして永久の價值あるものならしめざるべからずこれを正風の本旨となす。

そもく自然の景象は千差萬別なりといへども最いぢるしく吾人の心胸を刺激するはその靜寂といふ事にあらずや。自然には無論活動あり。しかも幾多の活動を容れてあまりあるはこの靜寂にあらずや。此生物も活動を得ては壯嚴の姿態を生すべし。しかも生物をして一層壯嚴ならしむるはこの靜寂の力なるべし。思へよ、義心鐵石よりも堅く、秋霜の下に毅然たる時、煩惱を排して泰然自若たる時、情念の

羈絆を絶ちて無慾無念なる時、則すべての動くべく移るべく變すべきものを去りて動かさる移らざる變すべからざる状態、則この靜寂にいたる時、人は一層壯嚴となるものにあらずや。芭蕉が自然を大觀して得たる觀念は實にこの靜寂なりき。芭蕉が

うき我をさびしがらせよ閑古鳥。

きぬたうちて我にきかせよや坊が妻。

などの句を読むもの、誰かこれを疑はむや。

芭蕉はかくして閑寂を以てかれの理想とせり。この故に芭蕉はその師を撰ぶにあたりても定家を探らずして西行を探りぬ。白樂天をとらずして杜子美をとりぬ。閑寂を以て理想とせるが故にかれは質素を好み、また柔順をこのめり、温良を好み、寡欲をこのめり。詞花の道にあはせてこの質實なる躬行、これを合せて風雅の道とはいふ也。

芭蕉が俳諧は座輿的遊戯にあらず。こゝにおいてかその句には鍛鍊あり、工夫あり、沈思冥想あり。そのかつてといふのは、舌頭に千轉せよといへりしはみづからこれを證せるならずや。種々の比喩を使用して繪畫的なる變化に富みて平板單調を避けたる、簡潔にして、無量の感慨をこめたるなど多きは、けだしこれに基すといふべし。

思ふに俳諧の精神は滑稽にあり。芭蕉にいたりては俳諧を滑稽なるものになさずしてまじめなるものになしぬ。世の人芭蕉を以て俳諧の精神をつたへたりといふはあやまれり。芭蕉は俳諧より滑稽の精神を除去し、それをして十七音詩となしたる者也。

二、上島鬼貫。芭蕉の門人をいふにさきだちて一言すべきは上島鬼貫となす、この人談林風を酌みて松江重頼の門人なり。しかれども俳風輕佻にして渾厚の美なきを觀破し、はやく感情の誠實といふことに思ひ及びぬ。享保三年(紀元二千三百七十九年)に出だしたる「ひりごと」といふ俳論はよく鬼貫がこの悟入につきての證左たり。いはく

句を作るに姿詞をのみ工にすれば誠少し。たゞ心を深く入れて姿言葉にかからぬこそよけれ

と。これ實に芭蕉が不易流行と符合するものにして、以て鬼貫の見解高く時流をぬきけるを知るべし。これを以て鬼貫の俳諧はありのまゝをのべて真情流露せり。

春の水とところ／＼に見ゆるかな。

行水のすてところなし蟲の聲。

など一例となすに足らむ。この點において芭蕉とかはらざれど芭蕉の主として詠出せしは深奥閑寂の美にあり。鬼貫はたゞ心のまことを歌ふ。故に無常を觀じては閑寂となり、快樂を思ひては花やか也。鬼貫は縦横なり、これを兩者のけぢめとなす。

しかれども鬼貫は芭蕉の才なく、芭蕉の徳なく、芭蕉の門人なし。その正風の體制を創めたるの功は決して芭蕉の下にあらずといへどもその名さまで天下を動すにいたらざりしは憾むべき也。

三、蕉門の俳人。元祿七年紀元二千三百五十四年、芭蕉身まかりける時の俳壇はいかにといふに江戸に其角あり、嵐雪あり、杉風あり、破笠あり、京都には去來あり、近江には評六あり、丈草あり、尾張には越人あり、美濃には支考あり、その他畿中の錚々たる者諸國に散在して、その數千を以てかぞへたり。

これらの門人は、おのがじし一流の新風を卓立せむとせり。そも芭蕉が門人にさとしたる流行とは俳諧の風體の時とともに移るべきをいへるにて強いて珍らしきを競へよとはあらざる也。しかも門人の多くはこれを聞きひがめて風體は常に變化あるべく、目新しからざるべからずと信ぜり。こゝにおいて芭蕉の歿後かれら門人はおの／＼先師の遺教を楯にして門戸を張らむとしぬ。其角は磊落なるいはゆる江戸風をおこし、支考は豪放なる美濃風をおこしぬ。素堂は葛飾風をととなへ嵐雪も雪門を以て家をおこしぬ。

これら門弟中少年より芭蕉の門に入りて聲望高く同輩を抜きけるものを其角となす。其角氏は榎本寛文元年(紀元一千三百二十一年)を以て生れぬ。卓落の才吟詠を絶たず。著書はなほだ多し。その句をあつめたるものを五元集といふ。收むるところ延寶天和享元祿寶永の五元に亘りたれば也。また續五元集あり。これ其角が附合の集也。其角は豪爽にして濶達なる人也。當年江戸兒の摸型なりき。かれが俳諧はさなからにこの性質をつたへて極めて豪壯にきはめて快活也。

思ふことなげぶしは誰月見船。

夕涼みよくぞ男に生れける。

其角が句飄然として來り飄然として去る。雕章琢句に屑々せず、これを以て晦澁にして難解のもの多きは、その缺點の一とやいはむ。また伊達風流をこのみて幽玄

閑雅の趣を知らず。故に一讀駭心のものあれども再吟いよく味あるもの甚まれ也。これその缺點の二也

芭蕉が雨の手に桃とさくらや草の庵と歌ひて其角と並べたゝへたるは、服部嵐雪にあらずや。嵐雪は名を治助といふ。承應三年紀元二千三百十四年を以て生れぬ。もと諸侯につかへたれど諫争して容れられざりければ致仕して俳諧に一生を送りぬ。寶永四年紀元二千三百六十七年、もて身まかりき。年五十四歳也。

嵐雪性温厚。同門の人々皆臂を張りて相争ひし中にひとり平然としてこれに與みせざりき。これを以てその句體また極めて温厚也。をしむらくは芭蕉の才なく識なかりしを以て超俗俊異の質に缺けたりといへど、とにかくに正風を繼承して輕佻になかれず、藹然たる和氣の吟中にみてるにいたりては同門のうち多くその比を見ざる也。

四海浪魚のさゝ耳あけの春。

初秋の心うごきぬ繩すだれ。

の如きは皆一時の名句也。玄峰集はその句を集めたるもの也。

嵐雪とならびて芭蕉の衣鉢を傳へしものを去來とす。去來氏は向井通稱と平次

郎といふ。承應元年紀元二千三百十二年はその生れたる年也。もと武林にありけれど出て、芭蕉に名簿を送りぬ。よく師風を會得して京都蕉風の冠冕たりき。寶永元年紀元二千三百六十四年歿しぬ。年五十三。

去來の句をあつめたるもの去來句集ありその俳諧の意見を窺ふに足るべきもの去來抄あり。去來句を作るに常に鍛鍊す。これを以てきはめて遅吟なりけれどよく風雅の精神を捉へ得て中正なるものおほし。

花守や白き頭をつきあはせ。

岩はなやこゝにもひとり月の客。

秋風や白木の弓に弦はらむ。

許六が去來にあたへて

先生(去來をさす)の風雅を論ぜばその器すぐれてよし。花實をいはゞ花は三にして實は七也。この不易體の句は多けれども流行の句は少し。とあるは吾人のいはんとするところをよく言ひ得たり。

許六支考ともに蕉門の高弟ならざりしにあらず、しかも吾人はこれを一々評傳するの餘白を有せず、たゞ前の三人に加へて僧丈草につきて一言なさんとす。丈草姓

は内藤寛文三年(紀元二千三百二十三年)を以て生れぬ。佛門に歸依し、かたはら雅道に心をかたむく。近江粟津に一庵を結びて佛幻庵といふ。元祿十七年(紀元二千三百六十四年)病床に坐化しぬ。四十二歳なりき。

丈草が句はさびしくしてしめやか也。去來とならびてその師の風體を傳へ得たりといふに耻ぢず。

鶯や茶の木畑の朝月夜。

清うして些の俗氣なきにあらずや。人は芭蕉にこの四人を加へて一翁四哲といへり當れるの評とやいふべき。

俳諧師としての價値はさておき俳諧家また俳文の撰者として記憶すべきを各務支考となす。その著にかゝる俳論あまたある中に俳諧十論の如きはことにかくれなし。また俳文をあつめたるものに本朝文鑑あり、和漢文操あり、ともに世に名高しこの人寛文五年(紀元二千三百二十五年)を以て生れ享保十六年(紀元二千三百九十一年)身まかぬ。年六十七。

蕉門の俳人決して以上につきたるにあらず、志田野坡あり、小川破笠あり、僧惟然あり、また卯七あり。また蕉門より離れて有名なりしものに大淀三千風あり、女流には渡會園女あり、智月尼あり、而してその句まゝ、男子をしてしりへに瞠若たらしむるものあり。

そも俳諧は平談俗話なり。あへて繁縟なる言語使用上の拘束あるにあらず。武士と町人とを問はず少しく文字あるもの何人か爲し得ざらむ。こゝにおいてかいはゆる風雅の道は當時の社會に大なる流行をきたせり。しかれども記憶せよ芭蕉が風雅の道はたゞ指に十七音をあやつる事をのみいふにあらず。精神に躬行に温良の風を養ひ、質素にして儉薄なる、これを風雅の道とはいへり。しかれども芭蕉の歿後は門人互に相排擠し、競ひて黠業をなし、俗人にこび弟子に諛ひ、たゞ門弟の多きを欲してあへて風雅の理想と主義とを問はず。俳諧俗化せざらむとするもいかで得べけむや。先師が一椀の澁茶一片のあらごもの風流は全くそのあとを止めざるにいたりし也。

三、俳諧の詩壇になせる貢献。俳諧が當時の詩壇に勢力を占むるにいたりし者よく俚耳に入りやすかりしによるとはいへ、また一方において詩としての價値特色のありければ也。俳諧の特色とは何ぞや俳諧が和歌の對象とするところを離れて別に感想の範圍を廣めたるこれ特色の一也。たゞに廣うせしのみならず一層皮をは

きたる清新の觀察をなすにいたれる、その二也。見よ花を見て雪にまかふるは和歌也。櫻見て乞食にゆきあたると詠みしは俳諧にあらずや。梅の鶯を描くはこれと歌也。枯樺の鶯を思ふは俳諧にあらずや。梅が香に戀人のうつり香をしのぶはこれと和歌也。酒の通の新しきを興するは俳諧にあらずや。また君が代をことほぎて八千代を祝ふは和歌の慣手段也。筑摩祭も鍋一つを喜ぶはこれ俳諧ならずや、俳諧の詠するところ廣うして新しきを知るべし。

なほ一つ忘るべからざるは俳諧がよく感想の急所を捉ふるに巧なりといふこと也。散漫ならず、寸鐵殺人的の性質あるは、たしかにその一特質に數へつべし。同時にその缺點とも見るべきは一に意味の不明瞭にち入りやすき事、二に統一を缺くこと多きこと也、詩は含蓄の言語なり。したがひて意味の幽深なるものもとよりこれあるべしといへども曖昧なるもの不明瞭なるものは断じて不可也。俳詠師が意味の平明を嫌ひ、しひて晦澁難解ならしめんとする、まことにその大なる弊害の一とすべし。また俳諧の思想はしばしば何の聯絡なく關係をたもたざることあり。例せば史邦の句に

廣澤やひとりしぐるゝ沼太郎。

といふ句あり。これは廣澤の池に沼太郎がしぐれにぬるゝさまを詠めるなれど廣澤と沼太郎との間に何の必然の關係あるか。聯絡あるか。廣澤といはても猿澤にても勝間田にもよかるべきにあらずや。則この一首、思想上有機的團體をなせりといふべからず。これを統一なしとはいふ也。

第十二章 鯛屋貞柳と正親町公通

一、正親町公通。信海行風の歿後しばらくありてあらはれける狂歌壇の勇將は一は正親町公通にして二は鯛屋貞柳也。

公通は承應二年(紀元二千三百十三年)を以て京都に生れ享保十八年(紀元二千三百八十三年)八十一歳もて薨じぬ。公卿にして狂歌をもつて立てるまづ奇なり。况んやよく人情に通じ下流の状態を知悉せるをや。その狂吟をあつめたるものを雅集醉狂集といふ。福祿壽をよみて

つく／＼と見れば短きあたまかな命長きに思ひくらべて。
また始戀の心を

まよはじなあふ阪までと思ひつ三里のもぐさもゆる戀路は。
の如きその風體を知るに足るべし。

公通の狂歌あるひは和漢の故事を引きあるひは古歌により、おほむね典據するところあるは、その博學洽聞を證すべし。されど毎首しいて縁語秀句をもとめ纖巧に陥れるものあまたあるはその缺けたるところ也。したがひて落想のをかきみうす

く、たま／＼これあるも品よきにすぎてなべての人に可笑の念を起さしむるあたはざるは身雲上の人にして思ひ切りたる滑稽を述ぶるあたはざりければなるべし。公通は俳句もあはせ詠じ狂句もものしたり、公卿にしてこの多能なるます／＼感ずべし。

二、鯛屋貞柳。貞柳氏は永田、名は良因また信乗、承應三年(紀元二千三百十四年)を以て生れぬ。代々製菓を業とし家號を鯛屋とよべり。貞柳若くして狂才あり。豊藏坊信海に従ひて狂歌をまなぶ。十四五歳の時元日の詠あり。

かきぞめはあら玉章か惠方なる神さままゐる年男より。
などその生ひささきのゆかしきものありしにあらずや。

貞柳の知友奈良古梅園大さ車の榻ばかりの墨を作りて靈元法皇に奉りける時
貞柳

月ならて雲の上まですみのほるこれはいかなる油煙なるらむ
とよめることありしが、これより人貞柳を油煙齋とよべりとか。

貞柳の狂歌はその師信海のいはゆる箔の小袖に繩帶姿を遵奉したるもの也。辭は俗ならしむるもいづくまでも和歌の本體をはなれず、心の誠をあらはさんとす

これその本旨也。これを以て貞柳は誹謗の意あるもの則落首を嚴禁せり。元日を詠じて

百人一首にどうありとても元日のあかつきはかりよきものはなし。

春雨をよみて

つく／＼とはるのなかめにあくびしつ隣もあられ煎る音のして。

のかきその恰好の例とすることを得べし。

これを以てその秀でたるものいたりては滑稽あり餘韻ありやすらかにして野卑ならざるもの甚だ饒也。しかれどもその流弊理におちて興越の索然たるものあるにあり。これを以てその風いたく行はれけむは、林鮎主が狂歌辨に

延寶より享保の間に信海法印貞柳ありて詞を體用ともに俗語によみなしたればいたりて鄙俗の徒までもよく耳に入るをもつて、大にこの風儀流行し云々。

とあるにて知らる。家土産、續家土産、置みやげ拾遺家づとなど皆その狂詠をあつめたるもの也。享保十九年、紀元二千三百九十四年、遂に身まかりぬ年八十一。

貞柳の門下あまたありける中に栗柯亭木端桃縁齋貞佐などことに名あり。木端はむしろ歌學に詳しく、貞佐は詠吟に名高かりき。而して貞佐は玉雲翁三世の詞宗

とたゞへりれぬ。しかれども要するに拔群の秀才なく遂にその勢日に月にあとろへて安永天明の復興をまたさるべからざるにいたりし也。

第十三章 浮世草子

一西鶴物。江戸時代における元禄時代は平安朝時代における寛弘時代なり。大平の春風はやう／＼社會にあまねくして人は安靜をむさぼり逸樂をたのしむのあまり風俗は奢侈におちいり人情は輕佻にかたむけり。かくの如き時代の傾向に生れたるいにしへの小説は源氏物語なりき。同じ傾向ありし元禄の時代に生れたる小説はいかなりしぞ。いはく西鶴物これ也。

西鶴物とは主として西鶴の作にかゝる小説をいふ。井原西鶴吾人はこれを談林風の俳人としてすてに以前にかぞへたりき。かれは俳人なりきと同時に小説家なりき。いな、その小説家の價值かへりて俳人の上にあるといふを適當とす。貞享の末は談林の俳諧やう／＼すたれて芭蕉の新風のやう／＼勃興せんとする時代なりき。談林の俳諧に十分の手腕をふるひつくしたる西鶴はこの俳諧の轉機を見て小説にうつりぬ。天和二年(紀元二千三百四十二年)その好色一代男成りしを始として貞享元年(紀元二千三百四十四年)好色二代男出て、同三年(紀元二千三百四十五年)好色三代男一代女出てぬ。いふところ人においては放蕩の遊治郎にして、所においては

狹斜の巷なり。その間における痴態と狂狀とを書きたるものこれを西鶴物の材料とす。趣向に奇あるにあらず。思想に純潔あるにあらず、言ふところたゞよく當時を描き得たるにあり。元禄の中流以下の社會は宛然として西鶴の小説にあらはれたり。その當年のパノラマをものせし記體的な手腕にいたりては信に驚くべきものあり。洗煉の言辭、俳諧よりつたへきたれる簡潔輕俊の妙を加へて優に一家をなし、靈活の着眼、當年社會の人物景致を捉へてよく活動せしむ。吾人は西鶴の小説を以て元禄時代の源氏物語なりといふに躊躇せじ。

しかれども西鶴には何等の理想なし。かれはたゞ當時を書きたりしのみ。源氏物語における光源氏は紫式部が理想也。その情にとみ、藝にふかく學に秀てたりしは則理想的人物なりける也。しかれども西鶴にいたりては、かばかりの用意なし、たゞその見聞したりし淫靡なる景致をうつしたりしのみ。これを以て人は西鶴をのしりて無學となし、文盲となし、その述作世に害毒をながせりとなす。一面より考ふればまことにうべなり。小説の目的は教訓にあらず、善をすゝめ惡をこらすこれ必ずしも小説家の理想とすべきところにあらず。しかれどもこれと同時に淫靡を教へ敗徳をすゝむるはまたその避けざるべからざるところ也。いたづらに美とい

ふ逃詞のもとにみだりかはしき卑陋なる戀愛を説くが如き文學の賊といはざるべからず。西鶴はこの點においてのがるゝところなし。たゞ筆を青年の男女が演出せる狂態にそめて、何等の理想とするところなし。これその小説としての大なる缺點也。

吾人は小説家としての西鶴をとらずして文章家としての西鶴をとる。平坦なる單調なる在來の國文調を離れて變化多からしめ簡勁ならしめ俊爽ならしめたるところ容易に企及すべからざるものあり。西鶴は思想において紫式部の源氏物語に似たるが如く、文章においては清少納言の枕草子に似たり。その文まことに元祿文學に一機軸を出せりといひべき也。

二。八文字屋物。元祿以前の時代における小説はその種類ありき。しかれども、世文化にうるほふにつれて人は奇怪を語れる怪談物もしくは英雄譚を好まずして人情の機微を畫けるものを好むの風尚を生じぬ。こゝにおいてこれにかなへる假名草子のみひとり發達してその他は次第にそのあとを止めざるにいたれり。假名草子の發達したるものを何とかなす。いはく浮世草子これ也。浮世草子とは浮世則世間の人情を描寫せる小説の總名にしてさきに述べたる西鶴物とこゝに述べんと

するに文字屋物とこれに該當す。

八文字屋物とは八文字屋自笑の作にかゝるものをいふ。八文字屋自笑氏を安藤といひ名は八左衛門とよぶ、寛文六年(紀元二千三百二十六年)を以て生れぬ。書肆の主人なりけれど文筆の才ありて小説を作る。自笑と並びて江島屋其磧といふものあり。若くより稗官小説を好み、甚だ寫實の文才に富む。されども性游蕩に耽り常に花柳のちまたにのみあそびければ家産を蕩盡して、衣食の道に窮しければ、こゝにひたすら小説を以て身の糊口となしぬ。而してこれを安藤自笑にはかり、自らの名をあらはさずして自笑の名を以て世に公にしぬ。いたく當時に行はれて自笑の名とみにかくれなく、いはゆる八文字屋本はいたるところに歡迎せらるゝにいたれり。さるに其磧はあのが小説のいたく世の嗜好に投じたるにかゝはらず、利潤はおほく自笑の手におつるを嫉みて、自笑と離れ、みづからの名を以て著作しぬ。自笑は更にあのが黒幕の作者として多田南嶺なる者を拉し來れり。其磧の作ほどの傑作なかりきといへども、また世の好評を博し得たり、自笑は延享二年(紀元二千四百〇五年)を以て世を去りぬ。年八十。其磧は寛文七年(紀元二千三百二十七年)生れ、元文元年(二千三百九十六年)歿しぬ。年七十、南嶺は元祿十一年(紀元二千三百五十八年)生れ、延

享三年(紀元二千四百〇六年)歿しぬ。年四十九歳なりき。

八文字屋物はやがて西鶴物を模したる也。材を狹斜のちまたに採り、人物を放蕩の野郎にとるも兩者ともに一也。想に理致なく、たゞ實際をうつすを以て目的としたるも兩者ともに一也。また人物の口吻、主客の行動よく眞に逼りて宛然元祿の世相を描き出せるにいたりても兩者ともに一也。只寫實の範圍やや廣く自由に縦横に當時をうつし得たる、これ西鶴物と異りたることの一也。またその文章、輕快に於いては兩者大に相似たりといへども、西鶴物の俊爽と簡潔とを失へるかはりに輕妙と委曲とを加へ得たる、これまた西鶴物と異りたることの二也。西鶴には寸鐵人を殺す如き文致ありといへども、八文字屋にはこのことなし。たゞ周匝の筆を以てよく人物の性格をうつし出せるこれを八文字屋に見て西鶴に發見せざるところ也。八文字や物は前にもいへるが如く材をとること花柳のちまた也。故に傾城禁短氣といひ傾城歌三昧線といひ多くは傾城の形容詞ある作多し。また人物の性格をうつさんことをつとむ、これにおいて浮世親父氣質あり、世間息子氣質あり、世間手代氣質あり、世間名を附せるもの甚だ多し。かゝる種類を世に氣質物ともいふ。

要するに西鶴物といひ八文字屋物と云ひ元祿小説の双生兒也。一を評したるの言はやがて他を評するに足らむ。吾人は小説を以て八文字屋物を見るよりもむしろ文章を以てこれを見る。その洒脱にして輕妙なる江戸時代後期の小説家の容易に近づくべからざるものあり。ほのかに天才のおもかげをあらはしたりといふに耻ぢず。

第十四章 近松門左衛門と元祿の淨瑠璃

一、近松門左衛門の略傳。元祿時代にありて、いな江戸時代にありて淨瑠璃の大王とも見るべきは近松門左衛門なるべし。門左衛門はその生地と祖先とを詳にせず。されど普通に信ぜらるゝところによれば、門左衛門は寛文三年(紀元二千三百廿三年)を以て長門國に生れぬ。氏は相森、名は信盛、その家は世々武家なりしが如し。幼より肥前唐津の近松寺に入りて薙髪したりき。強記にして聰明、經典に合せて漢籍にも通じたりき。これ實に彼が他日作者としての基礎を形造りし者也。學業のやうに進める後、寺を辭して京都に來り、髮を蓄へて公卿に仕ふ。そも當時はとにかくに文學の中心點のありし所なりければ、近松は日夜諸種の典籍に眼をさらしたりき。しかれどもその才能はまじめなる學者的傾向ありしものにあらずして詩的なる文學的傾向ありければ、近松はその年來の修養蘊蓄を傾倒して淨瑠璃の製作を思ひたりぬ。當時京都には都半太夫、宇治加賀椽など最淨瑠璃がたりとして有名也。これを以て門左衛門はまつこれらのためにその手腕を揮ひぬ。世繼會、一心五戒魂遊君三世相の如きその頃の作なりと傳へらる。

さて貞享三年(紀元二千三百四十六年)その三十四歳の時始めて竹本義太夫のために出世景清をもものしぬ。これより義太夫との交情、日に親密を加へ、一が靈活の手筆をふるへば、一は絶妙の技を以てこれを語る。元祿三年(紀元二千三百五十年)近松門左衛門は遂に大阪に來りてひたすら淨瑠璃のためにその一身をゆたねたりき。かくて毎年作を出さざるなく、元祿十六年(紀元二千三百六十三年)には會根崎心中あり、寶永二年(紀元二千三百六十五年)には雪女五枚羽子板あり、寶永四年(紀元二千三百六十四年)には丹波與作あり、正徳元年(紀元二千三百七十一年)には冥途飛脚あり、正徳五年(紀元二千三百七十五年)には國性爺合戦あり、享保三年(紀元二千三百七十八年)には會我會稽山あり、享保五年(紀元二千三百八十年)には心中天網島あり、享保九年(紀元二千三百八十四年)には關八州繫馬あり、さるに同年瀝焉として身まかりぬ。年實に七十二歳なりき。

二、近松門左衛門の淨瑠璃。近松は博學多識加ふるに曠世の文才を以てしたれば、その作あしなべて靈妙にして活動せり。淨瑠璃界に一新生面を開きたりしことは、之を金平本と比較一番する者の直に發見するところなるべし。一作の出づるごとに好評噴々、滿都の男女をして手の舞ひ足を踏むを知らざらしめしもの決して偶然

にあらざるべき也。

近松の淨瑠璃は有名なるもの實に八十八種の多きにのぼれどこれを二に大別することを得べし。一は古の歴史上の事實をふくめるものにして之を時代物といひ二は當年市井の出来ごとを基として作りたるものにしてこれを世話物また心中物と號す。これらの作中に用ゐられたる文章や詞藻豊富、才華煥發、ことに言語應對は躍動し風采態度はまのあたり接するの思あらしむ。また道行の文などにいたり言ひかけ縁語を縦横に使用し、婉轉流麗珠玉を盤上に走らすの趣あり。曾根崎心中に

この夜のなごり夜もなごり死に、ゆく身をたとふればあだしが原の道の霜一
足づゝにきえてゆく夢の夢こそはかなけれ。あれ數ふればあかつきの七つの鐘
が六つなりて残る一つが今生の鐘のひびきの聞きをさめ寂滅爲樂とひゞく也。

とあるが剛腹荻生徂徠をだに嘆賞おかさらしめしは人の知るところ也。
近松の文辭の絶妙なるはその苦心の結果也。かつていふ、淨るりは語り物にして聲の長短緩急を尊ふものなれば文句を作るにも必ず七五にあはせて、しかとつめ過る時はかへりて關わるく口にかゝらぬもの也。のみならずしひて七五にする時は

無用のてには等を挿入して語勢をぬるうするもの也。たとへば年もゆかぬ娘をばといふべきを年はもゆかぬ娘をばといふが如き也と。かくして近松はなるべく無用の言語を省きたれば言葉づかひひきしまりて勢力頓に加はりたるところ多し。又曰く

某若き時大内の草紙を見侍りける内に節會の折ふし、雪いたうたかう積りけるに衛士に仰せて橋の雪拂はせられければ傍へなる松の枝もたわゝなるがうらめしげにはねかへりてとかけり。これ心なき草木を開眼したる筆勢也。これを手本としてわか淨るりの精神を入るゝことをさとれり。

とあり。されば博多小女郎浪枕にも
千艘出つれば入りふねも日に千貫目萬貫目小判走れば銀がとぶ。金色世界もかくやらむ。

の如き好妙なる擬人法も用ゐられたり。

かく文章の上より見れば世話物時代物ともに傑然としてすぐれたるものありきといへども内容の上より見ればこの兩者の間において大なる用意のけちめあるを見る。

そもく、淨瑠璃則戯曲は世間人生をうつしたるの詩也。さればその描くところは、いづくまでもこの人間の社會ならざるべからず。こはなほ一般の美術家がその描くところいづくまでもこの天然ならざるべからずと同じ。しかれどもこれと同時に忘るべからざるは美術家が天然を畫けとも天然のありのまゝを描かずして天然の醜汚を去りたる正眞なる天然を描くが如く戯曲もまた人生をさながらうつすにあらずして人生の精髓をのみうつすべしといふこと也。換言すれば戯曲は人生をうつして人生を離れざるべからず人生を離るゝも人生にそむくべからずといふこと也。例せば戯曲において正成を描かんとするに延元のむかしの正成をそのまゝしるべきにあらず、更に正成の正成たるところを撰びて詩化せる正成を躍らせざるべからず。

これを近松の著作に見るに作の種類によりてその用意異りたるが如し。則世話物にありてはよくこの美術の原理にかなひたるものありといへども時代物にありては全くこれにそむきたり。近松が世話物は義理と人情との衝突をえがき道義と情念との軋轢を叙し、よく世態をして躍動せしむ。しかれどもその時代物や、眼をこの人間心胸の機微にそゝがず、いたづらに事件の奇と趣向の珍とにそゝぎ、つゆ世相

の眞面目をうつすの意なし。人はこれを見て人物事件の變幻出沒を喜ぶべしといへども、つゆ同情の涙と隨喜の思とをあらはすあたはざる也。人は國性爺合戦と雪女五枚羽子板と曾我會稽山とを近松が三傑作といへど、これその時代物においての傑作のみ。之を世話物に就きて求むれば、心中天網島、丹波與作、博多小女郎、浪枕など、確に以上の三作と肩をならふるに足らむ。

近松が淨瑠璃の滔天の勢もて世に行はれたるは一つには竹本義太夫の力なり。義太夫はもと攝州の農夫なりしが性來淨瑠璃を好み、播磨掾の門人清水理兵衛につきてこの技を學ぶ。天稟の美聲、量あり、幅あり、これに加ふるに甲乙よく合ひて調子よかりければ、技藝日にけに發達せり。しかれども、彼なほ甘んぜず、當時の日の出太夫、宇治嘉太夫につきて修行し、刻苦鍛練晝夜をわかず。始め京都にて一座をかまへ、後大阪に來りて竹本座をおこしぬ。時に貞享二年(紀元二千三百四十五年)也。竹本座と號せしは當時、かれ始めて竹本義太夫と改名したりければ也。義太夫が名世に喧傳したりしはたゞに播磨の藝風を傳へたりしのみにあらずして、獨特の技を出したれば也。獨特の技とは何ぞや、いはく播磨の音を本として節を平とし、加賀の節を主として音を客とするの長短あるを觀破し、音と節と兩つながら輕重を加へず、花實

兼備の樂風を創めたるにあり。さればその師加賀椽だに遂に義太夫に及ぶあたはずなりしは宇治が下阪して義太夫に對抗せしも遂に敵せずして歸京したるにても明か也。元祿十三年(紀元二千三百六十年)近松が世話物の最初なる長町女腹切を興行したりしが翌年遂に受領號をうけて竹本筑後椽と呼べり。義太夫ありて近松あり、近松ありて義太夫あり、天受の活手腕もて兩々相提携したりしはまことに千載の一遇なりきといふべし。

三。紀海音。竹本座の設立後十七年にして元祿十五年(紀元二千三百六十二年)義太夫の門人竹本采女豊竹座をおこしぬ。これ竹本座の流行を見てそれに倣ひたるもの、これよりこの兩座相並びて淨瑠璃界の二雄鎮と稱せらるゝにいたれり。

竹本座に近松ありしが如く豊竹座には紀海音ありき。海音は狂歌師油煙齋貞柳の弟也。寛文三年(紀元二千三百二十三年)を以て生れ、寛保二年(紀元二千四百〇二年)八十歳を以て歿したるの人也。僧となり法橋にまで叙せられたる人なれど後還俗して淨瑠璃作者となり、元祿の初年より述作あり。生涯の著數十種ことに心中二つ腹帯、鎌倉三代記、八百屋お七歌祭文最有名也。

海音は近松と比べていふまでもなく遜色ありといへども、とにかく竹本座と對し

て一座の作者として立ちたるはその枝倆の凡ならざるを證してあまりあり近松は天才也。海音は大才也。海音小なりしにあらざ、近松が大なりし也。

四。その他の淨瑠璃作者。近松海音の歿後、淨瑠璃界に雄を稱したるもの、竹本座にては竹田出雲あり、松田和吉あり、長谷川千四あり、三好松洛あり、豊竹座にては西澤一風あり、並木宗輔あり、並木丈輔あり、皆鐵中の錚々たるもの也。それらの人々の作のく、特質ありきとはいへ、おほやうは二人三人の合作に成れるもの多し。今その作の名を列擧すれば竹本座にて興行せられたるにては。

檀浦兜軍記。鬼一法眼三略卷。平假名盛衰記。菅原傳授手習鑑。義經千本櫻。假名手本忠臣藏。戀女房染分手綱。源平布引瀧。

などを有名なるものとし、豊竹座にて興行せられたるは

一の谷嫩軍記。苅萱桑門筑紫家苞。などをかくれなしとなす。

ことにこれらの作者中にて一頭地をぬきいてたるは竹本座にありては竹田出雲にして豊竹座にありては並木宗輔也。

出雲は號を千前軒とよぶ。近松の後をうけて佳作甚だ多し。假名手本忠臣藏管

原傳授手習鑑の如きは傑作中の傑作にして興行今日にいたるもなほ衰へず、出雲は寶曆六年紀元二千四百十六年遂に歿しぬ。年六十六歳也。

宗輔ははじめ田中千柳と號す。一谷嫩軍記、那須與市、西海硯、苜蓿桑門、筑紫家苞の如きその秀作と稱せらる。その下世しけるは寛延三年紀元二千四百十年(五十七歳)の時なりけり。

第十五章 當時の散文

一、散^〇文^〇の^〇作^〇者^〇。和歌が歌人に作られ、狂歌が狂歌師によりて作られ、俳諧が俳諧師によりて作られしが如く、當時の散文が作られし、ある特別の散文家といふものあるにはあらざりき。當時の散文はあまたの作者によつて作られたり。漢學者も作れり。國學者も作れり。俳諧師も作れり。漢學者の文章は漢學の分子おのづから多く加味せられざるを得ず。かゝる散文を和漢混交文といふ。國學者の文章はいふまでもなく純粹の國文也。これを雅文とも擬古文ともいふ。俳諧師の性質洒落にして俊爽也。その文章またその特質をおびきたるはもとより自然の勢なるべし。この種の文章を俳文といふ也。

二、漢^〇學^〇者^〇の^〇文^〇章^〇。當時の漢學者は漢學に兼ねるに必ず國文を以てせり。文學獎勵の結果としてかれらは和となく漢となく文學を研究せり。これを以て當時の漢學者の文章、漢文の骨格にまじふるに國文の氣脈を以てし、を、しくしてみやびやかに、さかんにしてなまめかしきふしなきにあらず。剛柔相まじはり、漢文の詰屈におちいらず、國文の優柔に失せず、まことに普通文の好模範となすに足るべきものおほ

し。なほ一の特質にかぞふべきは當時は社會文化の十分に發達せざりし時代なれば、民衆が文章の力も甚だ薄弱也。これら民衆を相手としてあらはれたる文章なるを以て主として文辭簡單、意味の平易ならんことをつとめたり。この通俗的にしてつゆ險難のふしあらざること、また當時漢學者の文章の長所といふべし。

和漢混交文の作者中これを古くしては林羅山あり。徒然草野槌などの文まことに暢達にして周到也。大家の文たるに耻ぢず。朱子學派の中にては第一となすべし。陽明學派にありては中江藤樹、熊澤藩山その傑出せるもの也。藤樹は翁問答の著あり。藩山は集義和書集義外書の著あり。ともに文章を以て立ちしものにはあらざりきとはいへ、滿腹の蘊蓄あらはれて意味深長なるところあまたあり。古學派にありては荻生徂徠と伊藤仁齋とあれとも當時よりはやうく儒者の國學をいやしみはじめたる頃となりしかはわか國文學の素養次第に少なく、和漢混交文として傳ふるものほとんど無し。

たゞし木下順庵の門に出てたる新井白石は誠に一代の文豪也。學殖の深遠はいはずもあれ、文才俊逸儕輩のうちたえてその比を見ず。その發してあらはれけるもの、あるは讀史餘論あり、折たく柴の記あり、あるは藩翰譜あり。前の二書においてそ

の議論文解説文の技倆を見るべく、後の一書においてその叙事文の手腕を見るべし。室鳩巢も白石とならびて稱せられたる人なれど、文章の才は一段を減じたりといはざるべがらず。たゞ鳩巢の傳ふべきは駿臺雜誌の一篇にあり、よく和漢の故事古諺によりて卑近の道理を談じ、穩健の論、平正の筆、一絲亂るゝところなきはさすがに鴻儒の筆也。

これに加へて忘るべからざるは貝原益軒也。益軒また文才あり。最平明周到をきはめ諄々としてうまさるところ、まことに篤學の士の倂を見る。その大和俗訓、家道訓、樂訓、養生訓以下十訓の如き、名文也。

然れども國學と漢學との反目甚しきにつれて漢學者の文章は日にけに見るべきもの出てざるにいたれり。

二國學者の文章。國學の復興は漢學の復興におくれたるを以て、國學者の文章もまた漢學者の文章におくれざるを得ざりき。賀茂真淵出てはじめて國學者の文章あり。よしその文章は完全にして無缺なりといふを得ずといへども、眞に中古の文學を味ひ、かねて上古の文學にもおよび、よく融通和會して一家の文章を作りたるにいたりては實に彼を以て權輿となさざるべからず。その東歸西歸などの記行文

を始として賀茂翁家集にあらはれたる文章の如きともにもその非常の筆力を示してあまりあり。たゞその流弊は奇古になかれ險難にかたむくにありき。

眞淵以前細川幽齋あり、北村季吟あり、松永貞徳ありといへどもいちじるしき文章なし。たゞ長嘯子と契沖との文や、注目するに足るといへども到底眞淵の比にあらず。元祿の國學者の文章界は眞淵一人の檀にしたるところといふも誣言にあらざるべき也。

三俳諧師の文章。典雅なれど氣力なきは國學者の文章也。氣力あれどまじめにすぎたるは漢學者の文章也。氣力を失はずまじめすぎたるを去り之に加ふるに輕俊と飄逸とを以てし文辭を簡結にし思想を清新にし、一新生面を開きたるものを俳人の文章則俳文となす。

當時の俳諧師皆俳文をものせり。これをあつめたるもの、森川許六の風俗文選あり東花坊支考の本朝文鑑あり、和漢文操あり。元祿俳文の大觀といふべし。

江戸時代第三期 天明時代

第十六章 當時の一般

一いはゆる天明時代。題して天明時代といへど實は明和六年紀元二千四百二十九年頃より文化八年紀元二千四百四十一年頃まで四十二年ばかりの間を含むその中にありて、殊に天明は文運蔚乎として興隆せる時なればこゝに取り出でて時代の名には負はせたる也。

そもこの時代は泰平二百年濠ばたの松がえ千歳の春をちぎりて梢をわたる風の音たゞ萬代を歌ふと聞え、二千七百七十餘町百三十萬の人々は皆大平に酔ひて桃源の夢をむさぼれり。ことに松平定信の出づるにおよびて節儉を行ひ奢侈を禁じ宿弊を打破し新政を行ひ、八代將軍吉宗の治にならひて武道を奨勵し文教を鼓吹したりき。こゝに徳川氏の天下はますく泰山のやすきにいたれり。後世寛政の治といふもの則これ也。

しかれとも吾人はこの時代を以てあへて健全なる時代といはず。見よ、この時代の小説黄表紙菫蕪本などがいかなる世態と人情とを反映せるかを。いはゆる十八

大通のおこりしもこの時代にあらずや。料理屋髪結ひ、その他奢侈の機關のおこりしもこの時代にあらずや。されどこれらの現象は民心に餘裕ありけるしるし也。民心に餘裕のありけるはやがて文運興隆の基にはあらざりしか。

この時代の太平とともに忘るべからざるは文學の保護者也。文學保護者とは誰ぞ。いはく松平定信これ也。定信は田安宗武の子つとに崇文の志ふかく、しばしば時の歌人をめして優待せしことはいちじるしき事實也。かつみづからも文才いみじくかの花月草紙の散文における、三草集の和歌における、皆逸品といふべきものにあらずや。

堂上にありては後桃園天皇の第七の皇子眞仁親王は一品妙法院宮と稱したてまつりて、いたく歌道に志を深めさせたまひ、最ふかく文學をはげませたまひし君也。かつて御詠に

これもまたむかしにかへせ諸人の心を種のしきじまの道

とあらせたまひしが如き、よく御心のかたはしを窺ひ奉るべきものにあらずや。

二忠愛の精神の發揮。漫々として鏡なす海洋も下には暗流の往來あり。しつかやにして眠るが如き天明時代の裏面には果していかなる趨勢かひそみける。いは

く忠君愛國の精神のますく、磅礴するにいたりきといふこと也。そも元祿におこりけるこの精神はこの時代に入りて、漢學者が文辭の謬妄、幕府が王室に對し奉りての暴戾のために、いとどその焰を強めたりしが、更にこの時代の末葉外國の來襲ありしたためにますく、その火勢を熾にしたるが如し。寛政四年(紀元二千四百五十二年)にはロシア船の初めて東蝦夷に來着せるあり。文化五年(紀元二千四百六十八年)には英船の長崎沖に來るあり。こゝにおいてか對外硬の精神は從來のものと合體していよく、忠愛の念を喚呼したりしや疑なし。かくして林子平は出てぬ。高山彦九郎もあこりぬ。蒲生君平も立ちぬ。しかもこれらと相並びて最よくこの精神を發揮したりしは實に本居宣長にあらざりしか。かれが著にかゝれる古事記傳、三大考、玉鉾百首などいづれかこれをうかがふに足らざらむ。ことに

しきじまのやまと心を人とは、朝日に匂ふ山ざくら花。
の絶唱によりて始めて大和だましひてふことを説きそめしは最いちじるしくこの精神を示せるもの也。

要するに光國、春滿、眞ぶちなどによりて唱導せられたりし尊王愛國の精神はこの時代にいたりてますく、具體的に表はされたりといふべき也。

三。この時代の文學の特點。この時代を以て元祿時代と比するに異りたる特點のあまたあるを見る。一には文學の中心がほとんど江戸に集中したりきといふこと也。小説しかり、和歌しかり、狂歌しかり、俳諧もまたしかりき。思ふに京都は閑居すべくして奔馳すべきの地にあらず。京都は因襲保守の地。江戸は革新進取の地也。これを以てすべてのものその権力の江戸に移らざる以上は眞に革新進取の氣運にむかふべくもあらざりき。天明時代に諸種の文學が活潑なる運動をなすにいたりしはひとかたはこれがため也。

第二には諸種の文學がます／＼専門の作家によりて作らるゝにいたりしこと也。一例をいはゞ同じく國學者といふも和歌を以て任とするものあり、歌學を以て任とするものあり、語學を以て任とするものあり、大道の發揮を以て任とするものあり、あるは考證家あり、あるは有職故實家あり、分業のさかんなる、これより甚しきはあらざらむ。

赤穂の四十七士が霜刃をふるひ、吉良上野介を鎗玉にあけしは元祿時代なりき。武士が紅絹裏をつけて通人を氣どりしは天明時代ならずや。撥鬢の寛濶姿が大道せましとあゆみしは元祿時代なりき。女子は遊女をまなび、男子は俳優を模せしは天明時代ならずや。この父にしてこの子あり。文學またいかてかその風を具へざるを得む。元祿の文學はあつから氣骨あり。雄健あり。壯大あり。天明にいたりては、ひたすら華美となれり。優麗となれり、典雅となれり。元祿時代は創業の時代なりしを以てあつから意氣剛健にして筆鋒峻鋭ならざるを得ざりき。しかれども天明時代は守成の時代也。勢ひ、優美にながれ、氣魄の失はるゝにいたらざるを得ず。これをこの時代の第三の特點となす。

第十七章 當時の和歌

一平安の四天王。天明時代の始における東西の歌人を一瞥すれば京都にはいはゆる四天王あり、伊勢には鈴門の一派あり、江戸には加藤千蔭、村田春海の一派あり、三方に鼎立してゐの、その勇を競ひし時代なりし也。吾人はまづ京都の歌人より見む。

京都の歌人あまたありける中にて最世に響きたるを四天王となす。四天王とは何ぞや。一に僧澄月、二に小澤蘆庵、三に僧慈延、四に伴蒿蹊これ也。

澄月は正徳五年(紀元二千三百三十五年)を以て生る。少時にして佛に志し、比叡山にのぼりしも心になよ高徳碩學のなきをうれたみて、志を變じて風流韻事にのが。著すところ澄月千首垂雲軒和歌集あり。寛政十一年(紀元二千四百五十九年)竟に入寂しぬ。年八十五也。澄月、その澄月千首に跋して

正しかれたやさしかれ言の葉は心をうつす鏡なりけり。

と。げにこの歌にある如く、澄月は思ふまゝを吐露したり。その歌作るところ、かざるところなきは誠によみすべし。たとすら、とありのまゝをいへるにすぎ、平

易率直なるの極奇なく、水を呑む如き感あるものもしばしばあるはその缺點とやいふべき。

小澤蘆庵名は玄仲、享保八年(紀元二千三百八十三年)を以て生れぬ。かつて某の卿につかへけるが故ありて致仕し洛東岡崎にすみて吟詠の中に優遊せり。その和歌をあつめたるもの六帖詠草といふ。この他ふるの中道の著あり、これその歌論をあつめたるもの也。享和元年(紀元二千四百六十一年)身まかりぬ。年七十九

そも、賀茂眞淵曠世の偉人を以て雄を文壇にとなへしより、これに和するもの水の低きに就くが如く、いはゆる古學派の勢力いたるところにあまねく、その流弊や歌ふべきまごころの如何をとはずして險を据し僻を據し、古調をのみまぬるを以て歌の能事畢れりとなすにいたりぬ。これを矯正したるを蘆庵とす。

蘆庵がまづ標榜して世に示したるは歌は平語を以て詠めといふことなりき。蘆庵いはく今の歌の拙きはかざりおほき言語もて偽れる心を歌へば也。されば秀でたる歌を詠せんとならば虚飾ある言語をすて、虚飾ある性情を去らざるべからず、あはれ

すなほなる心詞を行末に残らむ道の姿なりける。

と。これを以て蘆庵が用語には漢語あり、俗語ありいふまでもなく古語あり、想にふさはしき言語は取つて以てその用に供せざるはなし。また歌ふところには風雲あり、山海あり、金殿あり、わらやあり、天地間の萬物ことごとく歌はれざるはなし。たゞ詩的なる思想は取つて以てその詠とせざることなかりし也。

梅

日のめぐる南の枝の霜とけてぬれてほゝるむ梅の初花。

玉

みがきなば誰か光の出でざらむ心のたまは石ならめやは。

これその一例也。六帖詠草の歌十中七八は皆端詞あるもの則實感のものにして題詠のものにいたりては甚だまれ也。その空想にはせ迂遠なる辭意をのぶる歌人にあらざりしことは察すべし。

蘆庵の歌、これをたとふれば溪流の如し。その石山と曲折するにもよびて、あるは飛湍となり、あるは瀑布となり物にしたがひて形を賦す。俯仰百變、しかもつゆ人爲の痕を見ざる也。

僧慈延は大愚、また吐屑庵と號す。その生卒の年月を詳にせず。著はすところ隣

女晤言あり。これ歌の隨筆にして、すこぶるその博洽を證するに足るものあり。そのうち

契沖といふもの出て、歌よみの風卑しくあしざまになりし云々。

先輩にもねらざるところまつ胸次の豁落を見るべし。その所詠いまだ全く堂上の風體をのがれざるものありとはいへ、温厚にして一ふしあるもの多きは、その歌才の凡ならざるを見るに足らむ。

伴蒿蹊名は資芳享保十八年(紀元二千三百九十三年)を以て生れぬ。家商賈なりけれど、文筆をもてあそびて歌文に妙也。年四十に滿たずして家を退き一庵を結びて閑田蘆といふ。文化三年(紀元二千四百六十六年)七十四歳を以て身まかりたりき。

文を集めたる者に閑田文章あり、歌を集めたるものに閑田詠草あり。隨筆に閑田耕筆と閑田夾筆とあり。共に世にかくれし。蒿蹊は温厚の士也。その歌と文章と共にまた温厚にしてすなほ也。奇に流れず怪に走らざるかはりにまた光燭と氣魄となし。しかれども典雅のうち時として古學派の眞率と自然とを具へたるはたしかに蘆庵につぎて澄月と慈延と伯仲の間にありといふべし。この他京都には僧涌蓮あり、富士谷成章あり、冷泉爲村あり、また大阪には上田秋成あり、ことゝ爲村は拔群の

才あり、幽婉清麗、後の千種有功と待つて堂下歌人の双壁なりといふべし。吾人をして更に首をめぐらして江戸の歌界を一覽せしめよ。

二、縣門の歌人。清水濱臣かつていはく。

天の下たかきもみじかきも、老いたるも若きも、しるしらぬ、歌よむといへば千蔭春海と口にははざるものなきやうにはなりおはしにけり。

とげにや縣門の人才、百を以てかぞへきといへども、歌才においては吾人は第一にこの二人を推さざるを得ず。

加藤千蔭は加藤枝直の子也。享保二十年(紀元二千三百八十一年)を以て生れぬ。幼より歌才人にすぐる。賀茂真淵につきてまなび、捷才の人を驚かすものありき。

村田春海と刎頸の交を結び、師の歿後、衣鉢をつたへて江戸歌壇の重鎮たりき。寛政の頃萬葉集略解の著あり、解釋の簡にして要を得たる、湖月抄とならびて國文の寶典なり。享和二年(四百六十二年)その家集うけらが花成り、文化五年(紀元四百六十八年)同二編出でけるが同年遂に逝きぬ。年七十四歳なりけり。

千蔭真淵にしたかふと二十六年、その間におけるかれが歌風おのづから萬葉の調にあらざるべからざりきといへども、然れともひとへに上代の高古なる難險なる言

語のみを以て萬般の思想を述ぶることの不可能なるを察しけむ、千蔭はその基を三代集の花實兼備せる風體におき、これに加味するに上古高渾の風と後世の優麗なる風とを以てしたるが如し。これ實にその歌の長所也。

霞中春雨

隅田川箋きて下す筏士にかすむあしたの雨をこそしれ。

の如き語をとること極めて直く思を構ふる又甚た深からずといへともかく天地の美を捉へて妙を不言の間に寄す。これ詩家のいはゆる自然高妙なるものにあらずや。又

霞む夜の月見よとてや枕つくつまやの軒の梅かをるらむ。

の如き前後の今やうぶりの語調に三句の古へめきたる辭句を插みたる、その歌風の一斑を示せりとぞいふべき。

千蔭と蘆庵とは江戸時代における心からの歌人也。しかれとも蘆庵はもと武士しひて胸中の霸氣をおさへて歌にかくれたる人也。千蔭は醇乎として歌人也。その歌つゆすねたるところなく天真爛漫として櫻花の旭日にほへる概あり。

千蔭とならびて雅名を文壇にはせたりしものを村田春海となす。春海は江戸商

賈の子延享三年(極元二千四百〇六年)を以て生れぬ。性豪放家産ををさめず、ひたすら操觚の事業に従事せり。文化八年(紀元二千四百七十一年)身まかりき。年六十六。家集あり琴後集といふ。號を琴後翁といへりければ也。

もし千蔭を以て蘆庵に比すべくば、春海は蒿蹊になぞらふることを得じ。千蔭の胸中がより多く詩的なりしが如く、春海の頭腦はより多く散文的なりき。これを以て千蔭の歌は天下に無比なるもその文章は裝飾あまりありて氣慨なかりき。春海の文章にいたりては縦横奔放闊達自在なりといへども歌は理に流れて没趣味なるがまゝあり。

春海の尙ふところは清新にありき。正徹の草根集はその私淑するところなりしが如し。元日雪を

雪なからあくる朝戸にさく花のおもかけ見せて春はきにけり。

めづらしく新しきふしは多けれどたゞそれにのみ心ひかれて、餘味なく餘韻に乏しきものまゝ存したり。これ春海の歌の千蔭に一籌を輸する所以なるべし。

この他の縣門の名家には加藤美樹あり、楫取魚彦あり、小野古道あり、女子にしては弓屋倭文子あり、鶴殿よの子あり、土岐筑波子ありしかれどもこれに一頭地をぬきいど、儼然として大家たりしものを伊勢の本居宣長となす。

宣長もと春庵といふ。鈴のやとも號せり。享保十五年(紀元二千三百九十年)を以て生れぬ。強記絶倫よく書を讀む。始の盤を専業としたれど契沖眞淵の著を讀みて決然として志をおこし一身を國學にゆたねたりき。かつて眞淵の伊勢を巡廻するにあいて師弟の約を結び爾來郵筒往來研磨たゆむことなし。年を追うて有益の著書なりけるが寛政十年(紀元二千四百五十八年)には不朽の大作たる古事記傳成りぬ。かくて享和元年(紀元二千四百六十一年)遂に逝去しぬ。年七十二歳なりけり。そもく宣長の學眞淵に出でたれど詠歌につきては大にその見解を異にせり。

宣長思へらく歌は世々の姿あるものなれば、その世にてはその世の姿を學ぶへきもの也。こゝにおいて宣長は詠歌に古體今體の別をたてたり。古體といふは萬葉記紀の言語にて詠歌するもこれ今日の人がしひて古人の風體を模するのみ。故に古體となづく。今體とは今日の言語もて今日の風體をつくるにて則新古今集の如きものを指せり。世のいはゆる萬葉家が、ひたすら奇僻なる古語を根據とし難澁なる風體をよみいづるを排したるは、たしかにその卓見なり。しかれども全く古今の言語の融和を禁じたるは極端にはせたるならずや。宣長の歌の宗とするところ

ろは一に新古今集也。二に草庵集也。これを以てその文辭のまま繪瀟にして燦爛たるものありといへども、風韻に乏しく剪裁にちいり、美は美なるも造花の美なるもの甚だおほし。歌人として大宗たるあたはざる所以也。

しかれとも學者としては識見卓絶、學殖富贍まことに曠世の偉人にしてその威風とほく三都の文壇を歴したりし也。

宣長につぎて伊勢にありてかくれなかりしものを荒木田久老となす。この人延享三年(紀元二千四百〇六年)生れ、文化元年(紀元二千四百六十四年)五十九歳もて身まかりぬ。身伊勢外宮の神官にして神典に深し。宣長の身まかりけるを聞きて、

天地の神もうづなへん我なくば誰か説かむよあたらふる言。
その抱負を見るべし。

かく觀察し來れば天明の歌壇にゆける京都派は平淡自然を標榜し、江戸派は萬葉を骨子として近體を皮肉とし、伊勢派は新古今の綺麗を極致として旗幟正明堂々として革新の潮流をさかまさ來れるありさ。まは雲蒸龍騰眞に一大壯觀を呈したりとやいはまし。

第十八章 俳諧の中興

一、俳壇の趨勢。芭蕉歿してより俳諧は俗化して風流の本旨を失へるにいたりしとはすてに之を言へり。而して人によりて風體異なりきといへども最勢力ありけるは其角がのこしける洒落風也。この洒落風の特質や磊落にすぎてその意味捕捉すべからず。ことに水間沾徳にいたりては晦澁にして一種の謎也。その風まます極端にはせていよく詩的價值に乏しくなれり。時人のよびて化風となししもの則これ也。

しかれとも一張一弛は天地の理也。かゝる詩魔一時俳壇を横行せしといへども蕉風精神は全くそのために枯死したるにあらず。たとへば霜雪に蔽はれし草木の枝折れ葉しほめるもなほ一陽來復をまちていさましく咲き出でむとするが如し。されば天明時代の初期にいたりてこの脈々たる春風に乗すべき六人の俳客こそあらはれたれ誰とかなす。いはく三浦楞良、いはく與謝蕪村、いはく大島蓼太、いはく加舎白雄、いはく加藤曉台、いはく高桑蘭更これ也。

二、與謝蕪村。これら六人のうち吾人はこれを代表するに足るべき三傑につぎて

一言せむ。三傑中の第一にかぞふべきを與謝蕪村となす。

蕪村は本姓は谷口、名を寅といひ享保元年(紀元二千三百七十六年)を以て生れぬ。江戸派の俳風を好みて早野巴人を師とす。煙霞の癖ありて足跡東海東山の廿餘國にあまねかりきとぞ。ことに天橋立を愛して止ると三年、これより氏を與謝と改めぬ。天明六年(紀元二千四百四十六年)病を以て歿したりき。年六十歳なりき。

蕪村は俳諧もて業としたれども世の宗匠の如く點業に醒寤たるを屑とせざりき。故にかれは天稟の詩才ありし割合に當事盛名なかりき。その人にもてはやさるゝにいたりしは近く明治の中頃にいたりて也。

蕪村の俳諧はその性をあらはして磊落なりき。その豪放にして俊爽なる、たしかにそのいちじるしき性質の一也。

秋風の吳人はしらじぶくと汁。

鞘はしる友切丸やほとゝぎす。

蕪村が特質はその内容に止らずして外形にもあらはれたり。措辭法の普通なる模倣以外にめづらしき言ひかたを用ゐたる、あるは漢語を用ゐる漢詩を用ゐるこなしたる種々の修辭を用ゐて思想の表白を具體的ならしめたる、またその大なる特色なりといふに躊躇せじ。

蕪村は芭蕉の理想なし。しかれども自然を愛して物外に超然たるは甚だ芭蕉に相似たり。蕪村は其角の才あり。しかれども放縱の極卑俗にながれざるは全く其角はことなりたり。かれは芭蕉につきて其角に下らずといふべし。

三、大島蓼太。蓼太名は陽喬、享保三年(紀元二千三百七十八年)を以て生れぬ。壯年禪をまなび、またまた櫻井吏登の門にあそびて俳道に心をかたむく。雪中庵三世の俳燈をつぎてその名遠近にかくれなし。雲水に嘯放すること多年、東海道の往復十九返におよびぬとぞ。

人はいふ蓼太の俳諧は俗氣ありと。しかれどもかれは平俗なりしのみ。卑俗なりしにあらず。おしなべて俳人の措辭のひがみて、晦澁なるに反して蓼太のは比較的にすなほ也。平易也。平易となすほとを以て直に卑俗なり、價值なしとなすは、これ詩の精神を知らざるもの、李杜の詩人なるを知りて无白もまた詩人なるを知らざるもの也。

世の中は三日見ぬまにさくらか。

ひとつとしてかへれば門の柳かな。

蕪村が豪放まことにこれを蓼太にもとむべからず。しかも通俗にして平坦の境に詩味を發見する、これ蓼太の獨擅にあらずや。かれが俳諧中興の大立者の一人なる、何ぞ故なしとせむ。

四、加藤曉臺。京の蕪村、江戸の蓼太に對衝して名古屋の金城に隆名のかくれなかりしものを加藤曉臺となす。曉臺號を暮雨庵また龍門といふ。享保十七年(紀元二千三百九十二年)を以て生れぬ。美濃派の俳諧をまなび、後二條殿にめされて花のものと號をたまはりぬ。寛政四年(紀元二千四百五十二年)遂に身まかりぬ。年六十一歳也。

そもく俳諧中興の氣運ははじめ、いづこにさざし、か詳ならずといへども、蕪村が

柳ちり清水かれ石とく。

と詠じて新風をほのめかし、はその二十三歳の頃にして則ち曉臺がわづかに十歳前後の時なりければ、年代の上より考へて京都よりちりきといふを適當とすべきが如し。而して尾張は上方江戸、上り下りの要衝なれば、この革新の氣運はいつしか傳へられて、この金城の俳豪が心をや動しけむ。遂に立ちて蕪村と東西相應ずる

にいたりしなり

この時代に生れたる著名の俳人以上六人のほかにあるは炭太祇あり、横井也有あり、五升庵蝶夢あり。而してまた加賀千代尼あり。而してあるは中興の業をたすけあるはこれを受けて守り、ちのく功なきにあらざりきといへども、遂に以上の六俳人の上に立ちてその名を走するものはあらざりし也。

第十九章 狂歌の嚮興

一狂歌はいかにして江戸にうつりしか。おもふに狂歌の妙はその敏活にあり、輕快にあり、機智にあり、活腕天外の奇想をとらへて人の頤を解く。これ實に狂歌の狂歌たるところ也。江戸男子が特性は敏活にあらざや。輕快にあらざや。機智にあらざや。狂歌の中心が寛濶なる緩漫なる京阪人士の世界を離れて江戸に移りしこと、故ありといふべきにあらざや。

二唐衣橋洲と朱樂菅江。安永四年(紀元二千四百三十五年)唐衣橋洲、四方赤良、平秩東作等同好の士二三人相集りて狂歌を詠じたるを江戸に狂歌會のおこれる始なるべき。これより狂歌の氣運は次第に當時の文壇にせまり來り、その道の達人傑士項背相のぞみて生るゝにいたりぬ。

これらの中に就きて狂歌の先驅をなしゝは唐衣橋洲となす。橋洲本名は小島源之助、内山椿軒につきて和漢の學をまなぶ。椿軒狂才あり、その師風を繼ぎて狂歌師として世に立ちたるを橋洲となす。かつて自らいはく

かくて世にひろまれるは實に赤良菅江がいさをしにて、予はたゞ陳涉が旗上のみ也。

かれ自身すでに先登の功を以て許したりしを知るべし。またいはく

俚は鄙俚とつゞきていやしとよむ也。狂歌はいかにも和歌に詠まぬ俗語もてつゞり侍れど、樂天が俗にして俚ならずといふところが肝要也。をかしみを詠まむとて戯場の道外かたの如くはあるまじき也。

その狂歌に對する態度を見るべし。鶯を詠じて

鶯は竹に生れし故やらむ聲のびやかにふしの程よき。

の如き、その風體を窺ふに足らむ。著すところ狂歌醉竹集あり。

橋洲とならびて朱樂菅江あり。また内山椿軒にまなびて橋洲と同窓の友たり。

また狂才ありて一方の將たるに足りき。川を

高野山たが毒ありと教へけむはてのみこめぬ玉川の水。

されどおしなべて變化少く、才情足らず、橋洲と比べて一等を減じたりといふべし。

この他平秩東作、奇々羅金鶏大屋裏住、元の木阿彌、手柄岡持、つぶり光など皆かくれなかりけれど、ことに鶏群の一鶴とも見るべきを大田南畝とす。

三大田南畝。南畝名は眞、蜀山杏花園と號す、寛延二年(紀元二千四百〇九年)を以て生

れぬ。天京の奇才よく人の頤を解くものあり。始め狂名を四方赤良といひ後蜀山人と改めぬ。推名一世に高くとゞろきたりしこと、かつて大島蓼太の、赤良のもとを訪ひて

高き名のときは四方にわき出て、あからく、と子供まで知る。

と詠じて興へけるにても知らる。(天明三年萬載狂歌集を選びけるを始めとしてまたの狂歌集をえらびけるが文政元年(紀元二千四百七十八年)蜀山百首のなりけるを最後として文政六年(紀元二千四百八十三年)遂に身まかりぬ。年七十五年也。赤良性豪放濶達、はやく青雲の志あり。しかれども意の如くならざりけるを憤りて忽然として身を風流の巷に投じ、鬱憤を狂詠によせ、酒々落々以て一世を茶にしたりき。その狂詠の二三を見よ、

生酔の禮者を見れば大道を横すぢかひに春はきにけり。

世の中はさてもせはしき酒の爛ちるりの袴きたりぬいだり。

の如き何ぞ洒落にして逸氣の迸れるや。

要するに赤良の狂歌は巧を文字の間に求めたるにあらずして心を眞の滑稽にほせたるにあり。而してその心の滑稽や實感にして、しひて装ひたるものにあらざる

を以て最自然にして力強し。しかれどもまた時としては言葉より入りて滑稽を弄し自由自在にして才力端倪すべからず。

あなうなぎいづくの山のいもとせをさかれて後に身をこかすとは

橘洲を狂歌壇の陳涉とすれば菅江は樊噲也。赤良は韓信也。張良也。韓信あり張良ありて漢の天下はじめて定る。赤良ありて當年の狂歌壇を勢のを四方に光被したりといふべき也。

第二十章 川柳の勃興

一川柳の前驅。宗鑑の犬筑波集に「さりたくもありさりたくもなし」といふ句に附けて「盗人を捕へて見れば我子なり」といへるは前句の意に對して意想外なる意味を詠じたるに興味の存せる也。江戸時代に入るにおよびてこの種の狂じたる連歌は天和貞享の頃普通なる俳諧より分れて一派をなしぬ。これを名づけて前句づけといふ。則宗匠あとの句則下の句を出せばこれに對して人々が上の句則前の句を附るよりいふ也。例せば

浮世なりけり浮世なりけり。

といふ句に對して

死にたいといひく庵をたて直す。

といふが如し

後、元祿の頃にいたりて更に冠附といふもの起りぬ。これは俳句の始めの五言を出して下の七言五言の二句を附けさする也。例せば

早いこと。

といふ句を出して、これに

お弓町より矢の使ひ。

など附けさするが如し。これまた一轉して三笠附といふものになりぬ。三笠附とは三個の題句を出してこれに皆つけさするをいふ。而してこの遊戯や、やうやう賭博的性質を帯ぶるにいたりしかば官の禁制あり。されば一旦その跡を絶ちけれど寶曆のころよりしてふたゝびこの前句附さかに行はるゝにいたりぬ。従ひて専門の笠附の作者あまたあらはれける中に、一頭地を抜きたを柄井川柳となす。川柳が功は前句を離れて附句を獨立せしめたるにあち。則俳句の形もて自由に世態人情を吟詠するにありき。かゝる前句づけを川柳趾の俳句とよびけるが後略してたゞに川柳とよべり。而してこれら川柳を集めたるものを俳風柳楯といふ。

二川柳の特質。吾人の見るところにして誤らずば川柳の特質は俳諧よりも一層自由に漢語、俗語、卑語を使用し、くだくじき切字の法則を無視し、意味なき季込の拘束を排し、以て縦横に人生を描くにあり。たゞ人生を描くにあらずして奇警なる觀察を以て人間の弱點を指摘するにあり。峻鋭なる筆鋒を以て人生のをかしみを捕ふるにあり。時にあるひは飄飄の筆法によりて世と人とを戒むるにあり。これ實

に川柳の特質也。精神也。骨髓也。

笑ふにも泣くにも袖は道具也。

賣据と唐様で書く三代目。

上下をぬぐと無常も戀になり。

案内者てにはのあはぬ歌をよみ。

月雪花ほとよきすのみびやかなる天然を歌へるには當時すてに和歌あり。和歌にもれたる天地人間の美を歌へるにはすてに俳諧あり。しかれども俳諧にもれたる隠微なる詩美にいたりてはこれを歌ふものあらざりき。隠微なる詩美とは何ぞやいはく下層社會の詩美也。人生裏面の詩美也。人間の暗黒面の詩美也。この必要に應じておこれるが川柳にあらずや。すてに下層社會をうつし暗黒面をうつす。卑俗の傾向あるは自然の理數といはざるべからず。卑俗なるは川柳の以つて生れし特質也。卑俗なりとて川柳を捨つるは未だ川柳の精神を知らざるもの也。卑しきが故に價値なしといふは吾人の問ふところにあらず。卑しきを卑しきとしていかにその卑しきを描きたるか。これ吾人の問題也。

吾人が川柳に見る第一の長所は人生を描寫することの寸鐵殺人的なるにあり。

よく感想の急所を捉へて可能的僅少の言語のうちにも可能的集中せる感想を寓托せるにあり。第二には感想の深長なること也。いかに簡潔にあらはしたりとも餘韻なく含蓄なからば絃外の音はあるべからず。しかも川柳は味長く感深く吾人が心脾に沁む句にとめる也。

表彰の警拔にして一讀人を刺激する、これ川柳の第三の特質也。山椒は小粒てひりりとからし。辛くして小粒よく人を驚す也。川柳は多くこの思想のからみあり。ためによく人を刺戟するの力あるはよみすべし。

第二十一章 當時の小説

一小説壇の趨勢。天明時代の小説界は全く江戸人士の專領するところとなれり。上方の藝苑においてかつて賑はひたりし假名草紙浮世草紙實録物の枯木は今や江戸の文壇にその萌芽をあらはしたりき。假名草紙の系統を引きたりしものを草双紙となし浮世草子の體裁にならへるものを菫蕪本となし、而して實録物を前身としたるを讀物となす。

天明時代は前にもいへりしが如く徳川氏大平の中葉にして國民ことに江戸の人士が嬉々としてあどけなく生を送りたる時代なりき。生活の状態見戯に類したる時代なりき。この大平の結果として人情娯靡にながれ人々遊蕩におぼれしこともまたすてに之を述べたり。前の社會状態をあらにしたるものが草双紙にして後の世態を描きたるものがやがて菫蕪本なりし也。

しかれども大平にして文事の發達せる社會はいつまでも幼稚なる見戯的文學を以て甘ずるものにあらず。彼等は發達したる文學の好尚を持つにいたれり。高尙なる述作の供給を欲するにいたれり。ことに寛政の治ありて松平定信風俗匡正の

策をつとめしより勸善懲惡の主義は文壇の標榜となれり。この主義を鼓吹するまじめなる文字が小説家の理想となれり。これ讀本の起れるにいたりし理由也。

二草双紙。草双紙とは一巻僅かに五六枚より成れる小冊子にして繪を主として文字を客とし婦女幼少の嗜好にあてこみたる小説をいふ。これに用ゐたる紙の惡紙にして臭氣ありければ臭双紙といひけるを後に草双紙とかき改めたる也。これらの冊子はその表紙の色によりて種々の名あり。はじめに赤本赤き表紙ありしもの出て次に黒本出て次に青本出て最後に黄表紙出てたり。これらの作者としてはまづ觀水堂丈阿あり。寶曆明和頃の人にしてその著に署するに戯作の文字を以てす。後世戯作者の號あるこれに始まりし也。

これに續きて有名なるもの懸川春町あり。延享四年紀元二千四百〇四年を以て生れ、寛政元年紀元二千四百四十九年を以て歿したる人最滑稽の才に長ず。安永四年(紀元二千四百三十五年)に出したる青本の作金銀先生榮花の夢また翌五年に出したる高慢齊行脚日記は一新機軸を出して最よく世に行はる。從來の草双紙はこれに依りて全く賣れずと也。今日より考ふれば秀拔なる趣と筆とありしにはあらずれど、寓言的に滑稽を弄したる意匠の寶曆以來の作に異なりしところありし也。春

町につきて芝全交あり寛政五年(紀元二千四百五十三年)歿したり。天明五年(紀元二千四百四十五年)ものしたる大悲の千録本最世にもはやされ、戯名大にあがる。又市場通笑あり。元文四年(二千三百九十九年)生れ、文化九年(紀元二千四百七十二年)七十四歳もて歿す。この人述作の趣意を教訓におき勸懲を以て主義となす。故に人稱して教訓の通笑といへり。草双紙の風こゝにいたりて一變せりといふべし。その他喜二三あり。狂歌には手柄岡持といふその天明七年(紀元二千四百四十七年)に著はせる文武二道萬石通の如き古今未曾有の流行なりき。その他唐來三和といひ、森羅亭萬象といひ、この種の作者として鐵中の錚々たりしもの也。當時以上の六人を戯作六家撰といひぬ。

三山東京傳と蒟蒻本。蒟蒻本とはその形が半紙半切にして蒟蒻の大きさに恰當したりしより呼べる名にして、また洒落本ともいひ、また小本ともいふ。ひたすら青樓紅閣の娼話遊子野郎の痴態を描きたる者也。明和七年(紀元二千四百三十年)多田爺といふもの「遊子方言」を著して柳巷花街の情を綴りたるがその濫觴なりしが如し。

これら洒落本の作者極めて多かりきといへども、群をぬきて奇抜の技倆をあらはしける者を山東京傳となす。京傳は本名を岩瀬醒といふ。寶曆十一年(紀元二千四

百二十一年)を以て生れぬ。俗稱傳兵衛屋號を京屋といひければ取つて京傳といひて戯作の號とす。山東庵はその居京橋にして愛宕山の東にあたりければなり。若くして文才あり。年十九にして始めて戯作をなす。作者胎内十月圖これ也。つゞきて天明三年(紀元二千四百四十三年)御存知商賣物といふ草双紙の作あり。かれが山東庵京傳と署名して出したるはこれを以て始とす。しかれども京傳が最その力を注ぎたるは實に洒落本なりとす。京傳は江戸つ見の生粹也。意氣に勇俠に敏捷なるかれが性質は、當時の江戸つ見と同じく狹斜の巷にその日を暮さざるを得ざりき。當時の江戸つ見が遊蕩兒の替名たる以上はかれひとりいづくんど謹直敦厚の人たるを得べけむや。殊に京傳が拔群の才は年ともによく遊廓の事情と風俗とに通曉せしむるにいたれり。しかるに一方においてすでに非常の文才あり、いかにぞその積年遊廓に關する蘊蓄を傾倒して筆端に迸らせざるを得ざらむや。京傳は洒落本的人間也。その全力をこれに注ぎたる決して偶然にはあらざる也。

果せるかな、その輕妙の文致艷美の着想、筆神に入り、言語應對、眞に逼り、光景人物紙上に躍動するが如く讀むものして恍惚として足狹斜の巷にさまよひ歌吹の海に彷徨するの思あらしめぬ。こゝにおいてか京傳の名頓にあがり、兒童走卒もこれを知

らざるものなきにいたり、胡嗣氏は争ひてその作の出版を乞ふにいたりぬ。それら洒落本にてもことに世にもてはやされしは、「通言總籙」「古契三唱」「傾城買四十八手」「繁々千話」などを最とす。

かくの如くにして明和の末頃より天明を通じてはかれは天下に敵なく、勢旭日のぼるが如く文壇を獨歩せり。しかれども悲むべき運命ははしなくもかれの頭上に落ち來れり。何ぞや。いはく寛政に入るにおよびて老中松平定信が風俗の匡正は小説界にもたわりて、洒落本は風俗壞亂の恐ありとて嚴禁せられぬ。さはいへ従來この種の述作に大利を占めし書肆は直にこれに従ふべくもあらず、法網をくゞり京傳に依頼して仕懸文庫といふを作らしめぬ。この事遂にあらはれて京童は手鎖五十日の刑に處せられぬ。これよりして京傳の態度は一變せり、かれは艶靡の筆を絶ちて着實の文致を用ゐぬ。洒落本を捨て、讀本にうつりぬ。讀本とは前はもいへりし如く以前の實録物より脱化して普通の物語をしるせるものにして草双紙と反對して本文を主とし繪畫を客とし、讀むことを目的としたるものをいふ。讀本の名あるはこの故也。

京傳が洒落本の才は實に天授なり。この方面に筆鋒をみかくあたはずなりにしは彼にとりては蛟龍の雲を失へる也。船の水にはなれたる也。かれが兩腕をそがれたる也。されば一轉して讀本もしくは教訓的草双紙の作者となりたる後はよし名聲なほ四方に轟きたりとはいへ、遂に以前の全盛の京傳とはいふべからざりき。これ理のまさしにしかるべきところ也。されどもその異常なる才能はよく典雅の文と巧緻なる趣向とを示して又もや小説壇の流行兒となるまでの讀本の作者たらしめぬ。殊にその文章すらくとして奇語僻字を用ゐず、極めて俚耳に入りやすきやうものしたる上に挿畫に工夫をこらしよるづ目前のかはれるを専として工夫したれば婦女老幼もこれを繕くを得て世に流行したりし也。

これら讀本の最初の作を文化元年(紀元二千四百六十四年)出でたる忠臣水滸傳とす、又最名高かりしは文化三年(紀元二千四百六十五年)出でたる「昔語稻妻表紙」と、善知鳥安方忠義傳となす。文は圓熟の境に入りて麗語佳句に滿ち、想は苦心慘愴のあと見えて人をして手卷を釋てざらしむ。稻妻表紙は名古屋山三不破伴三の傳記をしるせるもの、その後の歌舞伎狂言に用ゐられていはゆる鞘當として行はれたるを見ても大なる流布をいたしたりしを知るべし。

これよりさき天明の末年よりして心學流行の結果として戯作本の趣向やうやう

教訓を主とするやうなれり。京傳もこの機に乗じて心學早染草の著あり。勃達なる理論よりして心學を説明せずして具體的に話說的にこの勸懲主義を解説したる當時にありてたしかに一新機軸たるを失はざりき。そのいたく世にもてはやされしも理り也。

京傳が所刑後改悛後の結果は一面考證的述作においてもあらはれぬ。彼は從來の小作の世教に益なきをさとり、刻苦して近世の奇談逸事を搜索して近世奇跡考骨董集の著あり。考據精確、文章平明、容易に後人の企及すべからざるものあり。隨筆中の白眉にして、當時の世態人情を知るにも佐け多き書也。

京傳はかくて文化十三年、紀元二千四百七十六年身まかりぬ。年五十六也。

四、滑稽小説。當時讀本草双紙と並びてひたすら滑稽談話を旨とする小説の一種あり。吾人は特に名づけて滑稽小説といはんとす。當時天明の時代風俗敗類人情澆季、内憂すてにこゝろ外患まさに來らむとせし時代なりしにもかゝらず、國民は怡々として桃源場裡にぬむりし時代なりき。かれらは世の樂さを知りて悲さを知らざりき。笑あるを知りて涙あるを知らざりき。この國民の笑の發して文學となりけるもの則この滑稽小説也。洒落本と同じく滑稽小説は最よく當時の時代をあら

はせり。吾人はこれら述作においてよく當時のパノラマ的光景を見る也。

これらの滑稽小説の壇上に雄視したり二人の英雄あり。一を十返舎一九となし、他を式亭三馬となす。

一九は本名を重田貞一といふ。明和元年(二千四百二十四年)を以て生れぬ。性洒落逸蕩にして禮義小節に拘泥せず、常に酒を飲み、遊樂を事とす。しかれども天稟の滑稽はこれをあさへてかくすべからず、上方を流浪したる末江戸に來りて草双紙に筆をそめぬ。その處女作は淨瑠璃には、木下蔭桶狭間合戦あり、草双紙には、心學時計草あり。しかれどもこれらの著は滑稽を旨としたるにあらざり、したがひて拔群の奇才を窺ふべくもあらず。而して實に一九の一代の傑作一九が文才のエキスとも見るべきを、東海道膝栗毛となす。こは彌次郎兵衛喜太八といふ滑稽なるもの、實は一九の分身といふべき兩人が東海道を旅行したる紀行文也。種々の失敗くさくのドヂをしるして談話百出奇想天下よりあちきたるが如く讀むもの思はず捧腹絶倒す。これを以てその初編の享和二年(紀元二千四百六十二年)に出づるや、滿都の喝采驟然として一九の一身に落ちきたり、洛陽の紙價にはかに貴し。これより二編三編と重なりて文化六年(紀元二千四百六十九年)その最後の八編の出づるに及ぶまで

世間は年々鶴首してその出版をまちぬ。江戸時代の出版物發賣高の最多かりしもの唐詩選とこの膝栗毛との上に出てしものなきを思へばその世にもてはやされしこと推して知るべからずや。

一九はこれにつゞきて木曾街道、金毘羅參詣、宮島詣、金のわらじ等の膝栗毛續編を出しけれども、しかもその精粹は前の八編に盡きたりといふに至當とす。

この他讀本洒落、本草双紙の種類なほあまた一九の手に出てたりといへど膝栗毛の陸離たる光鋭に壓せられてさまた名傳はりたるものはあらず。

天保二年(紀元二千四百九十一年)一九身まかりける時の辭世にいはいはく

この世をばどりやあ暇にせん香の煙とともに灰さやうなら

この句の風體最よく一九が人のなりの如何をあらはしたりとやいふべき。

式亭三馬は菊地泰輔といひ本町庵と號す。三馬といひけるはその先輩唐來三和と鳥亭焉馬の一字をとりて合せたる也。安永四年(紀元二千四百三十五年)を以て生れぬ。商賈に生れけれど幼より讀書を好み、書肆の小僧となりて十四五歳の頃までにあまたの戯曲戯作を讀みつくし、十八歳にして始めて「天道浮世之出星操」といふ黄表紙をいだしぬ。これより年々著述あり、あるは「人間萬事虛誕計」あるは「今古百馬鹿」

あるは「人心視機關」などありて世に歓迎せられぬ。讀本にては「雷太郎強惡物語」「阿古義物語」など上評也。この他述作數ふるに違あらずといへどもその最傑作ともいふべきは「浮世風呂」と「浮世床」との二書となす。もし膝栗毛ありて一九不朽なりとなさば「浮世風呂」と「浮世床」とありて三馬は永く文壇より忘られざるべし。天明時代の風呂と床屋、これ最社會萬般の人間のあつまるるところ也。嫁に對する姑のかけ言、姑をとする嫁の雜言、主人を罵詈する丁稚の惡口、下男をけなす檀那の疝癩、ひとしく落ちくるはこれ錢湯の柘榴口にあらずや。女郎の批評、藝妓の下馬評、町内の取沙汰、世間の出來ごと一切あつまりきたるは床場の店頭にあらずや。従ひて當時の人情と風俗とを知らんとするもの、よろしくまづこの二個所の言行を觀察せざるべからず。發明なる三馬はいちはやくこゝに留心せり。その平生緻密なる觀察をもて見聞しあきたる材料を傾倒して風呂と床やとにける代表的人物と言動とを描く。世間の弱點と當代の缺點とは躍々として紙上にあり。天明時代の華奢なる世相は宛としてこの二書にあつまれりといふも誣言にあらざる也。

一九と三馬と同じく滑稽を精神としたれども、一九は機智(ウキット)を主にし三馬は談話(ユイモア)を主とす。しひて道化たる風體をなし、をこなる言語を使用して、こと

第二十二章 淨瑠璃と歌舞伎

一、上方淨瑠璃の漸衰。さはかり前時代に隆盛をきはめたりし淨瑠璃はこの期に入りてやう／＼世人の嫌厭を來すにいたりぬ。上方における淨瑠璃は大阪よくこれを代表せり。大阪の淨瑠璃は竹本と豊竹との兩座最よくこれを代表せり。竹豊兩座の運命は以て淨瑠璃の運命を卜するを得べし。見よ貞享以來八十有餘年を経たりし竹本座は明和四年にいたりて一時閉場の止むを得ざるにいたりしにあらざや。更に豊竹座にいたりてはこれに先だちて明和元年すてにその朝大鼓のひびきを止めたりしにあらざや。尤も豊竹此吉、豊竹此太夫等の盡力により再び北堀江豊竹座は創められ又竹本座は再興せられたりといへどもすてにこれ大厦の倒れんとするを支ふる一木なりき。並木永輔、淺田一鳥、近松半二の輩これに據りて二三の當りを占めたることなきにあらざりしも元祿の全盛時代は遂に永久の昔語なりき。歩々衰退の潮勢にむかひ、人は淨瑠璃を顧みるものなきにいたりし也。

二、江戸淨瑠璃の漸盛。當時江戸は文學の中心なりきといへども、しかも江戸より獨創の文學生れたるにあらざして、上方よりやう／＼輸入したりし也。之を以てか

なたに盛なりしものがこなたに輸入せられて隆盛を來すまでには多少時日の遅延あらざるを得ず。和歌しかり、俳諧小説しかり、況んや江戸時代に入りて上方に創始せられし淨瑠璃においてや。こゝにおいてか、上方の淨瑠璃の漸衰期は江戸における淨瑠璃の漸盛期なりき。

江戸にはじめて操座を立てたるは豊竹肥前掾にして則肥前座なりき。更に天明時代に入りて外記座あり、又一名薩摩座ともいふ。これに加へて結城座あり、これを江戸における操座の主なるものとす。

しかのみならず始めは演する作の如きも皆上方の作者を待ち、もしくは上方の舊作をのみ採用したりしにこの時期にいたりて始めて江戸に淨瑠璃の作者出て次第に新作を公にするにいたれり。その勢のさかんなること、よし元祿のむかし竹豊二座のちもかけは偲ふべからずとするも到底當時の上方の淨瑠璃界の及ぶところにあらざりし也。

三、當時の淨瑠璃作者。世に近松門左衛門と竹田出雪と近松半二とをかぞへて淨瑠璃の三哲といへり。而してこの近松半二こそ此時代にあらはれける大阪の淨瑠璃作者なりし也。半二は近松門左衛門が友人穂積以貫の子、享保九年(紀元二千三百

八十四年)を以て生る。長じて竹田外記に就きて淨瑠璃を學ぶ。寶曆元年(紀元二千四百十一年)その師と合作して「役行者大峰櫻」を出し、よりこのかた天明二年(紀元二千四百四十二年)五十九を以て歿したるにいたるまで、作を出すこと三十種ばかり、その中に就きて「本朝廿四孝」「大平記忠臣講釋」「妹脊山女庭訓」「伊賀越道中双六」「奥州安達原」「新板歌祭文」「近江源氏先陣館」などに名あり。しかれどもその多くは三好松路、竹田小出雲、吉田冠子、中村阿契など、合作になれりしを忘るべからず。たゞ半二が力與つて多きにありしのみ。

半二の作者としての價值、門左衛門出雲に比べて遜色あるはもとより論なし。しかもよく作の變化に注意し、言語應對に氣をくばり、觀客をしてつゆ厭きを來さざらしめたるところたしかに並木宗輔と雁行して有數の作者たるを失はず、ことに淨瑠璃漸衰の時代に生れ、とにかくにしばし狂瀾のすてに倒れんとするをおそからしめ、以て上方淨瑠璃に棹尾の勢をふるひたるはいかんどその力量の小ならざるを證せざらむや。

大阪の半二に對して江戸に對抗したりしを福内鬼外とす。鬼外は平賀源内が淨瑠璃作者としての名也。鬼外は享保十三年(紀元二千三百八十八年)を以て生れ、安永

八年(紀元二千四百三十九年)を以て歿しぬ。鬼外官途に失敗し、貨殖に失敗し、憤慨のあまり天賦の狂才と筆とを以て一面に戯文にかくれ、一面に戯曲にかくれぬ。もとこの種の作者を以て立つものにはあらざりきとはいへ、縦横の才元來の淨瑠璃作者をして顔色なからしめたり。而して最傑出したるを「神靈矢口渡」とし、次ぎて「嫩松葉相生源氏」となし、「弓勢勇湊」となす。その「神靈矢口渡」を薩摩座に出したりし時の如き、その大入は非常の勢なりき。

鬼外につぎて松貫四あり。これかの有名なる「伽羅先代萩」の作者としてかくれなき人也。また千品龜井あり。吉田角丸もあり、これ貫四と合作して「戀娘昔八丈」を出したりし人也。

しかれども要するに當期の淨瑠璃は局面の宏大を失ひて趣向の纖巧となり、壯るを、しき姿は失せて、こまかなる細工あるものとなれり。一局部につきて、まま人を感ぜしむるふしなきにあらざるも一部の劇として眞の幻影をおこすものまれなるにいたれり。淨瑠璃がやうく歌舞伎のために壓倒せらるゝにいたりしこと、故ありけり。

四歌舞伎の勃興。お國が女歌舞伎ひとたび世に行はれてよりその流弊のためし

はく官の禁遏にあひきといへども、一たび生ひたちし芝居草は遂にその萌芽を枯らさず、やうくにして三都に蔓延せり。大阪にては承應の頃にいたりて鹽屋九郎右衛門、大阪、太左衛門、杉本久左衛門の櫓を許されて大芝居を建設せる事あり。是を中の芝居、角の芝居、大西芝居といふ。京都にても村山又兵衛を始めとして七人のものども狂言座をおこせることあり。これ京都の七座也。しかれども最歌舞伎の活潑なる運動をなしたりしは江戸を第一とせざるを得ず。猿若勘三郎によりて堺町に基を定めたる中村座、村山又三郎によりて葺屋町におこりたる市村座、森田太郎兵衛が許可を得たる木挽町の森田座この三の櫓や實に劇界の覇となへたりき。その構造の如きも次第に壯宏美麗となり、道具衣裳の如きも日に月に巧緻綿密となれり。松島吉三郎によりて中乗の狂言はおこなはれたり。あるはせり上げの道具は始り、あるは廻り道具も始められたり。ことに瀬川菊之丞、坂東彦三郎、尾上菊五郎、澤村宗十郎、中村歌右衛門の如き名優あるは江戸におこり、あるは上方より下りてその妙腕を振ひしかば歌舞伎は實に旭日の勢を以て流行せり。

しかれども歌舞伎の完全は俳優と共に狂言作者を待たざるべからず。時しもあはれ、この時にあたりてあまたの高名の作者はあらはれたり。曰く津打治兵衛、いはく堀越菜陽、いはく金井三笑、いはく櫻田治助、いはく並木正三、いはく並木五瓶、皆一騎當千の作者たりし也。

津打治兵衛は江戸狂言作者の鼻祖と稱すべし。その功績は時代物と世話物と取合はせし作をものせしこと也。五十七年の間脚本に盡力し、寶暦十年(紀元二千四百二十年)七十八歳もて歿したりき。「淡島榮花聲」「二河白道の如きは有名なるもの也。堀越菜陽と金井三笑とはともに寶暦時代の人、治兵衛につぎて江戸作者の二英俊也。菜陽には由良千軒、蟾兎港「戀染隅田川等の作あり。三笑には江戸紫根元會我「梅紅葉伊達大門などことにかくれなし。

櫻田治助は菜陽の門人也。寛延元年(紀元二千四百〇八年)を以て生れ、文政三年(紀元二千四百八十年)七十三歳をもて身まかりける人也。本名中村平吉、また狂言堂左衛門とも號しぬ。生涯に著作すること五十有餘種、最世話物に長ず。世話物を以て名あるもの、さきには金井三笑あり、後には鶴屋南北、古川黙阿彌あり。前をうけ後をおこしたるの効はたしかに治助に歸せざるべからず。以上三人は江戸の狂言作者なるがこれに對して大阪にありて馳名を轟かしたるを並木正三となす。正三は和泉屋正三といひ、淨瑠璃作者並木宗輔の門弟也。享保十五年(紀元二千三百九十年)を以

て生れ安永二年(紀元二千四百三十三年)を以て歿しぬ。年五十二歳也。正三は淨瑠璃作者にしてかねて狂言作者なりき。一代の才筆最煥發したりしものを宿無團七時雨傘となす。

正三の門より出て、並木五瓶あり。五瓶通稱吾八、延享四年(紀元二千四百〇七年)を以て生れ文化五年(紀元二千四百六十八年)を以て身まかりぬ。年六十二歳也。五瓶はもと大阪の人なりしも江戸に下りて筆を振ひ聲名櫻田治助と相ひとし。五瓶が特色は上方の作風を江戸にうつしたるにあり。上方の作風は由來濃厚にして複雑なり。情のこまやかなると筋の入り組みたるを以てその特質とす。上方人士の氣風としておのづからこの種の作をもてはやせるは理の當然なるべし。江戸の作者はおほむね洒灑にして單純也。景のはてやかなると味の淡泊なるを以てその主眼とす。これはた輕快にして意氣を尙べる江戸人士におのづからもてあそばれける作風ならむ。筋の單純にして統一あるもとより可なりといへども變化なく單調なるは劇としては幼稚を免れず。場面を變轉し人物をこみ入らしむる勿論必要なりといへどもさりとして統一と團結とを缺かんはもとより避けざるべからず。この兩者の長短を取捨し、江戸の洒脫なる作風に加味するに上方の濃艶なる特質を以

てす。これ五瓶が手腕にして、かれが江戸の狂言界に一味の清新を興へ、いたく世人に歡迎せられし所以也。その作中最采喝を博したるを、春花五大力と、金山五三桐との二篇とす。

かくの如く歌舞伎が隆盛の運にむかひたるは主として作者と俳優との輩出によりきとはいへ、なほ一つ忘るべからざる原因あり。いふまでもなく淨瑠璃は人形を用ひて作中の人物を觀客の目に訴ふと雖ももとこれ非情の人形也。人情を表彰するの巧拙は有情の俳優が作中の人物を呑込みてこれに扮裝すると同一の論にあらす。また淨瑠璃にありては太夫はその聲の緩急張弛によりて巧みに男女老幼の口吻をまぬるといへども、もとこれたゞ一人の咽喉也。作中の人物を躍動せしむるの優劣はあまたの俳優がひとり／＼作中の人物になりかはるとは數等の差ありといはざるべからず。これ淨瑠璃が劇として歌舞伎に劣る二の缺點也。この缺點ありながら淨瑠璃が久しく歌舞伎の上に立ちて劇界に跋扈せしは一に近松始めあまたの先哲が靈活絶妙の淨瑠璃をもつて世人を魅したるにより二は義太夫はじめ多くの名人がその圓轉美妙の嬌喉もて世の中を感ぜしめたるによる。この聲とこの作とありて淨瑠璃は歌舞伎に對してその缺點を補へりし也。天明の時期に入りて、

作に名人なく聲に妙手なく、いたづらに先輩の趣向を踏襲し、語りぶりをまねるより、ほかなきに及びて遂に歌舞伎に凌駕せらるゝにいたりしこと、豈に理なからむや。

第二十三章 當時の散文

一、漢學者の文章。まづいふべきは漢學者の手に成れる散文なり。則いはゆる和漢混交文也。そも天明以前の時代にありては漢學者はかねて國學をも研究せり。彼らにはしばしば歌集あり、國文學の註釋書あり。雅文の紀行文などもあり。これを以てその漢文脈と漢文辭とをまじへたる文章にあつても、典雅なる艶麗なる文辭もまじりて柔ならず、硬ならず、眞に程よき和漢混交文の出でたることは吾人の前章に見たるところ也。されば天明以前にありては國文學と漢文學とは相むつまじかりき。さるにやうくこの二者は關係うすくなり、この時期に入りては全く反目せり。國學者は漢文學をうとんじ、漢文學者は國文學を卑ひにいたれり。こゝにおいてか漢學者の普通文は全く國文の美所を採らず、文法と語格とをあやまり、流麗と曲雅とを缺くにいたりぬ。たゞ思想はよく深遠なる幽玄なる理致を説くものありといへども文章としてはたゞ達意にして趣味少き者となり終りぬ。これを以て傳ふべきもの少なけれど、湯淺常山の常山紀談、太田錦城の梧窓漫筆、松崎堯臣の窓のすゐびなどは最傑出せるもの也。

二、國學者の文章。眞淵出てて文章を古にかへし、よりこの道はこゝに一大發展をなせり。眞淵の弟子に村田春海あり、本居宣長あり、加藤千蔭あり。この三人のそのその本領をそなへ、春海は文章にその一代の力をそゝぎ、千蔭は歌道に献身し、宣長は國體の發揮に盡瘁しぬ。これを以て春海の文章は縦横開闔、規模宏大よく變化あり、委曲あり、加ふるにいふべからざる流暢を以てし、まことに當代の文豪といひつべし。その琴後集中の文章の如き、歌がたりの如き、よくこれを證せりといふべし。千蔭は文においてはやゝ春海に劣りしも、當代の文章家とならびて確に一頭角をあらはせり。やゝ濃艶にかたむきて氣骨にとぼしといへどもなまめかしくさらさらしきところよく王朝時代の文章を操縦し得る者にあらざれば能はず。うけらが花その文才を示せり。宣長の頭腦は春海よりも一層學者的也。散文的也。これを以て華美なる相像の文章においては傳ふべきもの乏しといへども論難解説の文章にいたりては平明簡易條理のよくとほりたるがあり。鈴屋集中の文章、玉かづま、うひやまふみ古事記傳などはその恰好の例なるべし。これに加へて京都の伴蒿溪、難波の上田秋成また能文の士なりき。蒿溪には閑田文章と閑田耕筆と近世奇人傳とあり。文章は純粹の雅文にして奇人傳と耕筆とは普通的性質を帯びたり。しかれ

ども蒿溪は文名の高かりし割合に實質に乏しかりしが如し。頭腦や、臆臆として散漫に失したる傾向あれば也。上田秋成にいたりては國文より出て、近代小説の味を加へ幽婉にして變化おほきところ最よみするに足る小説としては雨月物語つづきて春雨物語あり。雅文としてはつゞら冊子あり。たゞ幽婉のあまり晦澁におちいり意味の捕捉すべからざるものあるとその缺けたるところなるべし。

三、俳諧師の文章。風俗文選と和漢文操とは元祿時代における俳文の代表なりとすれば、天明時代の俳文を代表するものは横井也有が鶉衣なるべし。もと俳文の特質はその俊爽にあり、簡勁にあり、その清新にあり、通俗にあり、しかれども也有が文章はやゝ俊爽を失ひたるかはりに滑稽にかたむくにいたれり。滑稽とはいへ、いたづらに文辭の末を捉へたる滑稽にあらずして、世間の弱點と缺點とをうがちたる思想上の滑稽なりき。俳文は也有にいたりて一變せり。世の人いたくこれをめてたりしはこの故也。この他當時の俳諧師にして俳文をものしたるもありけれども多くは元祿の糟粕をなめて何等の獨創なく、こゝにとりいていふべきものなし。

三、戯作者の文章。俳諧はもと滑稽の意なれども芭蕉にいたりて一變してその意を失ふに至れり。これを以て俳人の作れる文章はまじめなる文章にして滑稽なる

ものにあらざりき。滑稽を主としたるものを戯作者のものしたる狂文となす。それらの中にありて鳥亭焉馬、山東京傳、十返舎一九、式亭三馬等皆それ／＼に名高かりしが最獨特の技倆をふるひ、狂名を轟かしたるもの、一を風來山人となし、二を太田蜀山人となす。風來山人が俊逸の才、手にふれてあらはれざるはなく、淨瑠璃に發しては矢口渡、智勇湊となり、狂文にあらはれては六々部集となりぬ。こは風來が十二篇の戯文をあつめたるもの也。縦横の才、奔放の情、加ふるに諷刺の筆を以てし、委曲周密、上流の事より下流社會にいたるまで罵るべきは罵り、笑ふべきは笑ひ、談諧百出人をして端倪するあたはざらしむ。

風來の狂文はたゞ滑稽の發してあらはれたるものにあらずして思ふところを滑稽に託してあらはしたる也。これを以てかれが作は諷刺の文章といふを適當とす。これとやゝ趣を異にして全く可笑の趣味を目的とし、通俗平易の言語を以て滿腔の談諧を吐露したるものを太田蜀山人となす。蜀山はその狂詠に二三世を諷したるものなきにあらざれど、文章にいたりては全くその傾向なし。飄逸洒落なる思想、圓轉活脫なる文辭、罪なくあどけなき言語をつらねてよくこの時代における嬉々たる民心を反映せり。四方の赤、四方の溜柏、千紫萬紅、千紅など、以て見るべし。

この他、手柄岡持が我面白奇々羅金鶏が燭火文庫などあまたありといへども、遂に以上の二大家に匹敵するものあるを見ず。

江戸時代第四期 天明以後の時代

第二十四章 當時の一般

一、綱紀振肅と對外運動。こゝに天明以後の時代といふは文化九年(紀元二千四百七十二年)十一代將軍家齊執政の半ばよりして慶應三年(紀元二千五百二十七年)王政復古の行はるゝに至りしまで五十六年の年月を含む。この間を大觀すれば前半は綱紀振肅の時代にして後半は對外運動の時代なりき。そもく大平の餘波人心風俗の頹敗をまねくにいたれるは數の免れざるところ、一旦頹敗を來して久しきを經たらむは、そを改むると一朝一夕のわざにはあらざる也。これを譬ふるになほ大河を決するが如し。かしこを沮渴すればこゝに破れ、こゝを沮渴すればかしこにやぶる。將軍家齊が松平定信を擧用したりし寛政の治も畢竟これ堤防を以て一時大河を止めたりしのみ。定信退くにおよびて奢侈の風再び行はれ、賄賂公行、群小道にあたり、庶民の困苦ひと方ならざりしことは、かの大鹽平八郎が一揆などにても察すべからずや。幸にして十二代家慶の時にいたりて水野越前守が改革あり、節儉を尙び、質素をむねとし、私娼を禁じ、戯作を制し一意享保寛政の治に返さむとして天下ふた

ゝび緒に就きけるをりしも、はしなく閩國の心膽を寒からしむべき飛報は國民の耳朶にひびきぬ。何ぞやいはく嘉永六年(紀元二千五百十三年)米國の軍艦浦賀にきたり、通商條約を請ひたりし事これ也。さすがに悠長なりし國民も、こゝにいたりて桃源の夢を破るべくなりぬ。紅絹裏に細身の大小をたばさみし武士は俄に陣笠草鞋ばきの姿となりぬ。人病みて始めて身を知る。當時の人々はこゝに到りて始めて自覺心を有するにいたりし也。要するに江戸時代二百年の榮華は夢の如くに消え去りぬ。王室と幕府と諸藩と相たゝかひし様はまことに漫々たる海上忽ち颶風おこり狂瀾いかり、鯨鱈の吞噬するにやなぞらふべき。

二、文學の衰頹。文學がかくの如き時代にありて、活潑なる運動をなすあたはざりしはけだし當然の事也。そも文學に尊きは個人性のあらはれたるにあり。さるをこの時代の前半において、水野忠邦が文學を掣肘し、自由なる思想の發表を禁ぜしより、文學は一般にまじめとなりぬ、教訓的となりぬ。趣味なく生氣なきにいたりぬ。ことに滑稽は國民の餘裕に生ずるもの也。されば砲聲におどろき、談判に寒心し齷齪として日もこれたらざる當時にありては滑稽文學はことに衰頹をきたすにいたりぬ。たゞこの時代の後半、對外運動の結果として忠君愛國の精神勃興し、憂國の士

項背相望みておこりけるため、悲涼慷慨の和歌多くあらはるゝにいたりたるのみは、思ふに和歌壇に一異彩をはなてるものといふべし。

第二十五章 和歌壇の鼎立

一伊勢の歌人。前代において上方伊勢江戸の三方に鼎立したりし歌人はこの時期に於てもまた同じ姿勢をたもちたりしが如し。まづ伊勢の歌人よりいはむ。

宣長の衣鉢をつぎ和歌においてかくれなかりしものを大居大平となす。大平はもと稻懸茂穂といひしが本居家に養はれて大平といふ。寶曆六年(紀元二千四百十六年)を以て生れ、天保四年(紀元二千四百九十三年)身まかりぬ。年七十八也。家集あり稻葉集といふ。

大平の風體はさながら宣長をつたへたり。従ひて詠歌に古體近體の區別を立てけるはいふまでもなけれど、その旨とするところは古體にありけるが如し、年のはじめに

ともかくもたどらてたゞに嬉しきは春くるけさの心なりけり。

などは平々のうちにあつたづから真情のこもれるにあらずや。

鈴の屋の門文章にすぐれたるを藤井高尚とし、歌にすぐれたるを本居大平とす。そのゆたかなる聲調、うるはしき言辭、たしかに鈴門の白眉たるべし。たゞ才情の足